魔法少女リリカルなのはStrikerS～加速の記憶～

秋風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～加速の記憶～

【Ｎコード】
Ｎ３７７２Ｑ

【作者名】
秋風

【あらすじ】
仮面ライダーコアの騒動から数年後、風都の仮面ライダーであった仮面ライダーアクセルこと、照井竜が凶弾に倒れて殉職した。だが竜の精神と魂はアクセルメモリを通して地球の記憶へと潜り込み、シュラウドと再会する。そしてシュラウドから彼女の償いとして、新たな世界へと生まれ変わることを約束される。そしてその世界で照井竜は再び仮面ライダーとして戦うこととなる。仮面ライダーアクセルとして・・・
「さあ、振り切るぜ」

秋風の新小説であり、夏コミ出展候補作になります。やっぱり私は仮面ライダーなしでは生きていけないようです。

第1話　死に失せるA／新たなる旅立ち（前書き）

秋風「というわけで活動報告に書いてた夏コミ候補の作品です」

竜「納得いかない・・・何故最初から俺が死ぬ！」

秋風「気にするな☆」

竜「・・・」

秋風「あ、なんか言うことある？皆さんに」

竜「俺に質問するなぁー！」

第1話　死に失せるA／新たなる旅立ち

・・・仮面ライダーとは、いかなる状況においても人々の命を守り、正義のために戦い続けるヒーローである。そして今日、あるライダーがこの世を去った。

照井竜　享年３０歳

鳴海亜樹子と結婚して、初めは問題で衝突ばかりであったがようやく落ち着き、子を成した。だがそれから数年後、捜査中にガイアメモリを扱う組織を追い詰めるも、その凶弾に倒れ死亡した。変身した状態なら倒れることもなかっただろう。仮面ライダーAに、普通の弾丸を受けても効果などあるはずがない。だが人間の状態なら話は別である。変身する前に撃たれてしまった。

「・・・アタシ、聞いてない」

妻の照井亜樹子は静かにそう呟いた。墓の前で佇みながら。

「亜樹子、やっぱりここか・・・」

「・・・翔太郎君」

黒い帽子を被った男、左翔太郎。亜樹子の父、鳴海荘吉の弟子であり、その荘吉の意思を継いだ探偵であり、仮面ライダーWである

「みんなが待ってる、帰るぞ」

「・・・・・ねえ翔太郎君、やっぱりやめさせればよかったかな」

「あん？」

「竜君が仮面ライダーじゃなければ・・・ガイアメモリの捜査から手を引いてたら、竜君は死ななかったかな？」

過去に父もガイアメモリに関わり死んでいる亜樹子にとって、竜の死はそれと同じものであった。

「さあな・・・だが、あいつはやめるような性格はしてねぇ・・・それはお前が分かってるはずだ」

「・・・うん」

ぽろぽろと、涙が零れる

「でも、死んで欲しくなかったよ、竜君・・・」

照井家墓地と書かれた墓の前で、亜樹子は泣き続けた。

「・・・ここはどこだ」

真っ白な空間に、茶髪で紅いライダージャケットを着た男が立っていた。男の名は照井竜

「照井、竜・・・」

そして竜の前に一人の女性が立っていた。

「お前は・・・シュラウド！何故、ここに・・・」

そこにいたのはガイアメモリを竜に渡した女性、シュラウドであった。シュラウドはガイアメモリを流通させた組織「ミュージアム」の首領「園崎家」の人間であり、ミュージアムの科学者としてガイアメモリ研究に携わっていたが、最愛の息子をミュージアムの道具として奪い、さらに自分を用済みと切り捨てた琉兵衛への復讐を決意。家族の下を離れて様々な暗躍をするようになった。そして、竜の家族を殺した打倒琉兵衛を狙う井坂にウェザーメモリを提供した張本人でもある。だが竜はシュラウドの罪を許した。そしてそんなシュラウドも自分の役目を終えて息を引き取った。

「答えは簡単よ・・・私は死者だから」

「そうか・・・そうだったな、俺も死んだ・・・」

竜の中には記憶がはっきりしていた。受けた銃弾の痛み、鉄球を力いっぱいぶつけられたような衝撃と痛みを

「ここがあの世か？」

「いいえ、違う・・・」

「何？」

「ここは地球の記憶・・・そう、ガイアメモリの源と言っても過言ではないわ」

ガイアメモリの記憶の中枢ということに竜は驚く

「何故、俺はここにいる？」

「貴方に与えたアクセルメモリには細工がしてあった」

「細工？」

「そう、アクセルメモリを使っていれば、どんな形でも私に会えるように・・・その貴方の記憶と意識を、ここへ繋げるように」

静かに、シュラウドはその照井の手にあるＡドライバーを指差した

「貴方に罪を許されても・・・私の中では罪は消えなかった」

静かにシュラウドは言う。許すと言われても、自身の中の記憶は消えることがない。

「だから貴方にチャンスを与えたい」

「チャンス？」

竜は首を傾げる。チャンスとはどんなものなのだろうか。

「これから、貴方に新たな命を与えるわ」

「新たな命、だと？」

新たな命、つまりは生き返るということだ。

「そんなことが可能なのか！？」

「ここは地球の記憶の中枢・・・不可能などない、ただ・・・」

と、そこでシュラウドは口を紡ぐ

「貴方が行く場所は、元の世界でない可能性がとても大きい」

「何？」

「パラレルワールドを知っているかしら？」

パラレルワールド、それはもしもの世界である。もしも竜が「ガイアメモリをもらわない世界」もしも竜の家族が死ななかった世界。そんなものである。

「私には感じて欲しい、もう一度・・・家族のぬくもりを」

「・・・シュラウド」

「何かしら？」

「俺には子供が出来た・・・亜樹子との・・・もし、あの世界に帰れなかったとしたら、二人を見守っていてくれるか。そして亜樹子に伝えてくれ。俺は大丈夫だから、負けるな、と」

竜の言葉に、シュラウドは頷いた。

「わかったわ・・・約束しましょう」

「後を頼む、シュラウド・・・・・・亜樹子、元気でな」

こうして竜の意識は解けて消えていった。

これはもしものＩＦの世界

だがそのＩＦがもしかしたらあるかもしれない

疾走の記憶を携えた男に、新たな世界での戦いの日々が始まる

第1話　死に失せるA／新たなる旅立ち（後書き）

というわけで、照井竜の新たな物語が始まります。こうご期待！

第2話　誕生のR／そこは魔法の世界（前書き）

「通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけっ！」ｂｙ門矢士

いや～、いつ聞いてもカッコいいこのセリフ。
皆さんも好きなセリフがありましたら感想にどうぞ

ではっ！

第2話　誕生のR／そこは魔法の世界

（・・・・・・ここはどこだ？）

竜は静かに目を開けた。そして上を見る

（知らない天井だ・・・この匂いは、病院？）

「奥さま、おめでとうございます。元気な男の子ですよ」

（何の話だ？）

竜は考えながら起き上がろうとした。だが、起き上がれない。

（どういうことだ！？）

体を見ると、小さくなっていた。

「・・・よく頑張ったなぁ」

「あたしの赤ちゃん・・・ふふ」

男女が竜を覗きこんだ。そう、竜は赤ん坊になっていたのである

（なんだこれはー！？）

そんな驚愕をしていると、抱えられる。女性は美しい桔梗色の髪をしていた。

「おぎゃあああ！」
（は、はなせぇぇ！）

「あらあら、元気いっぱい・・・そうだ、あなた・・・この子の名前は？」

「ああ、倅よ、どんな名前何がいい？」

と、冗談交じりに男が言うのだが、竜はそれどころではない。

「おぎゃあああああ！」
（俺に質問するなー！）

「はは、まあ考えてあるよ。リュウだ」

「リュウ？」

「地球にある島国、まあ俺の先祖の国の言葉でドラゴンのことだ。龍が如く、強く育つために、な」

リュウと名付けられる竜は少々複雑ではあったが、別の名前を付けられるよりはましだと、少しだけ安心していた。

「貴方の名前は、今日からリュウ・ナカジマよ」

こうして、リュウ・ナカジマがこの世に生を成したのであった

それからの竜は苦悩の日々であった。母乳を飲む日々と、色々な人

々から弄られる毎日。リュウにとっては女性の胸部を見るのは非常に困った問題でもあった。何せ前世の記憶がある３０代の男なのだから、本来なら犯罪であった。まあ、この件に関しては本人のトラウマと言う形で幕を閉じ、一年が過ぎる。このころには歩き回ることができるようになる。そして言葉を発することができる。父であるゲンヤにお父さんと言ってごらんと言われてそのまま返すと、こいつは天才だ！などと絶賛していた。完全に親バカである。３歳にもなると、リュウは自分のいる世界のことを調べ始める。新聞やインターネットを通して言葉を覚え、世界を知った。そして驚愕する・・・ここは、並行世界おろか、地球ですらないということを。ミッドチルダと呼ばれたこの世界で、父は時空管理局と呼ばれる世界を管理する警察官のようなものであり、母のクイントも同じなのだという。また、この光景を見たクイントとゲンヤが驚きを隠せなかったのも事実であった。

「・・・魔法、か」

静かに新聞を読み終えたリュウはそう呟いた。魔法はリンカーコアと呼ばれるものによって生成され、科学で出来た「デバイス」で戦うものらしい。

「母さん」

「あら、なあにリュウ」

「俺に、リンカーコアはあるのか？」

ほんの興味本位に、そんなことを聞いてみた。

「そうね・・・私はあるけど、お父さんはないの。今度調べてみよ

っか」

こうして、クイントに連れられて時空管理局を訪れたリュウは驚かされる。その世界を守る組織の規模に

「・・・すごい」

「ふふっ、初めて来たものね、さあ行きましょう？」

クイントに手を引かれ、局の内部へと入っていった。そして検査結果は・・・

「あら、凄い。クイントさん、リュウ君は素晴らしいわね」

「魔力蓄積ランク・・・A！」

Aということは、そこそこあるということである。

「これは将来が期待できそうね」

「ふふっ、でもそれはこの子が決めるのよ。そろそろ行くわ」

「あら、もう行くの？」

「元々、リュウのことはおまけ。うちの旦那に弁当を届けに来たのよ」

「あらそう」

こうしてクイントとリュウはその研究室を後にし、ゲンヤがいる場

所へと向かうこととなった。

「あなた～」

「おお、クイント、それにリュウ・・・よく来たなぁ」

ゲンヤの話だと、本来なら部隊の部隊長ではあるのだが、今日は本局の会議でこの場所に来たのだという。

「さあ、ご飯を食べましょう」

こうして仲良く食事をする3人。リュウはいつもこの時間が好きだった。今までの人生の中で失った家族。だが新たな家族と共に、このように団欒で過ごせるという喜びを

「リュウ、どうした」

「いや、何でもない・・・」

「そういえば聞いてあなた、リュウったら魔力ランクAも持ってるのよ！」

「ほう！そいつはすごい！」

と、ゲンヤが驚く。まあ実際にゲンヤには魔力はないので魔力を持っている人間と持っていない人間からそんな子供が誕生すれば、誰でも驚くだろう。

「こりゃ、将来有望だな」

「あなた、気が早いわよ」

「いや・・・俺もいつか、父さんを超える管理局員になるつもりだ」

リュウの言葉に二人は目を丸くする。そして笑顔になった。

「そいつぁ頼もしい！」

「なら母さんが今度格闘技を教えてあげるわ」

「ああ」

こうして、一家の日々は過ぎていく

それから数年が経ち、リュウは6歳になった。名門の魔法小学校、魔法学院に入学したリュウは、クラスではトップの成績を保っていた。そしてリュウの教室

「おい、ナカジマ」

「・・・何の用だ？」

なにやらお坊ちゃまらしい子供がリュウにつっかかる。大抵の学校にはこういう輩が必ずいる。リュウは面倒くさそうにその生徒に振りかえった。

「お前、あんまり調子に乗るなよ」

「・・・何の話だ？」

またか、という具合にリュウがため息をつく

「勉強が出来るからって調子乗りやがって」

「俺がいつ調子に乗った・・・大方、またテストが出来なくて俺にやつあたりか」

年齢は同じでも、中身は大人。冷静な対応に子供が逆切れする

「黙れっ！」

思い切りリュウの机を蹴り飛ばした。それによって広げていた弁当が散乱し、周りが騒々しくなる。

「……」

「いいか、これ以上調子に乗るなよ」

勝ち誇ったような生徒に、リュウは睨みつける

「な、なんだよ・・・」

「貴様・・・今、俺の弁当をこぼして踏みつけたな」

ゆらりと立ち上がり、生徒を見る。その6歳とは思えない殺気に生徒は恐怖する。生前は何人もの犯罪者を尋問してきた警視だ。当然である。

「謝れ・・・」

周りにいた生徒も驚き始める。普段はおとなしく、あまり人と話さないリュウに対して恐怖していた。

「た、たかが弁当くらいで「黙れ」ひっ！」

生徒は下がっていくと壁にぶつかり、リュウに胸倉を掴まれた。

「あの弁当は、俺の母親が作った弁当だ・・・それをお前は踏みにじった」

そう、リュウはその生徒の行為によって潰された弁当に対して怒っていたのだ。家族を大事に思うが故に、生徒はリュウの触れてはいけない逆鱗に触れてしまったのである。

「3度目は言わん・・・謝れ」

掴んだ腕が上がっていき、生徒は宙に浮いた。

「あ、ひ・・・」

生徒はその恐怖に失禁し、ガタガタと震えていた。教室では止めようとする生徒はいるのだが、そのリュウの恐怖に止めることが出来ない。

「貴方達何をしているの！やめなさい！」

そこにタイミングよく教師が介入し、この事件は幕を閉じた。

放課後

「リュウ、なんであんなことしたの」

帰り道、呼びだされたクイントはリュウに静かに聞いた。リュウは悪くない。悪いのは男子生徒だ。向こうの親からも謝られ、クイントは納得したのだが、リュウが納得しなかった。その男子生徒が未だに謝らなかったからだ。リュウを見れば恐怖して親の後ろに隠れる。そんな行動にイライラして殴ろうともしてしまった。そこはクイントに止められてことが収まったのだが・・・クイントとしては大人しいリュウがそんなことをするとは思わなかったので、どうも納得がいかない。

「お弁当なんて、また作ってあげるわよ。ね？」

「そんなの、問題じゃないんだ」

「え？」

リュウの言葉に、クイントが少しだけ驚く

「母さんは、管理局員として危ない捜査もする・・・そんな母さんがいつ危険な目にあうかわからない。何かあったら、俺は母さんの弁当を食べれなくなる」

「・・・リュウ」

「だから許せなかった、それだけだ」

「リュウ」

足を止めて、クイントはリュウを優しく抱きしめた

「母さん？」

「ありがとうリュウ、私の心配してくれてるのね・・・でも大丈夫よ、母さんはずっと貴方の傍にいるわ」

クイントはその我が子の気持ちに喜び笑顔になる。そして再び手を繋いで歩き始めた。

「さ、今日はごちそうにしましょう。何がいい？」

「母さんの料理なら、なんでも」

「ふふっ、じゃあ腕によりをかけなきゃね」

こうして、夕焼けに染まるミッドチルダの街の中を二人は歩き続けた。

深夜

リュウが眠りに着いたころ、クイントとゲンヤが今日のことを話していた

「そんなことがあったのか・・・」

「ええ、リュウは普通のことは少し違う・・・でも、それだからこそ私達の心配をしてくれる」

「・・・やっぱり、引退したらどうだ？リュウに心配はかけたくないだろ」

ゲンヤの言葉に、クイントは少し苦い顔をした。死と言うリスクを負う捜査官であるクイントはリュウのことが心配であり、またリュウもそんなクイントを心配している。

「うん・・・でも、やっぱり私には捜査官として今の仕事を降りるなんてできない」

「戦闘機人事件か・・・」

「うん、この事件はみんなで一丸となって捜査してる・・・やめたらみんなに迷惑がかかる」

クイントにとっては辛いものだ。産休をしていた時も彼女自身協力ができなくて辛い部分もあったからだ。

「じゃあこの事件に幕が閉じたら、引退しろ」

「うん・・・そうね」

そんな話をして、今日は過ぎていく。この話がリュウに聞かれているというのはまた別の話である。

次の日、リュウは学校に行きながら考えていた。どうすれば二人の手伝いが出来るのかと。魔力はある。そして今まで得た経験と技量がある。だがどうしても年齢と科学技術に頭を悩まされる。

「アクセルメモリがあれば・・・」

そう、仮面ライダーになれば、二人の手助けが出来る。だがそれは生前の話。そんなことできるはずがない。そんなことを考えていると、学校の廊下で少女が立ちふさがった。

「あ、あの！」

「・・・？」

顔を真っ赤にした女子生徒が目の前にいた。両脇には別の生徒がいる

「これ、読んでくださいっ！」

ハートのシールが貼られたその手紙。完全なるラブレターであった。この後も同じようなことをされ、困り果てたリュウ。当然男子生徒からの睨みは凄いものである。余談ではあるが、これはリュウが昨日行った行為によって周囲の女子生徒がカッコいい！という印象を持ち、そしてそれが学校に広まったのだ。本人は知らないが、携帯の様な通信カメラでそれが撮影されネット上で広まっていたのである。男子生徒はその態度からも不評であり、小学生の表現で言えば「うざいやつ」というもの。この男子生徒によっていじめられた生徒も多く、そんな生徒がボコボコにされてしまってはそのやった人間はヒーローなのである。

「弱ったな・・・」

亜樹子と結婚してから女性への関心が薄いリュウはため息をついて鞄にそれらをしまった。こうして一日が始まり、そして終わっていく

夜、リュウは眠りに着いた後、また白い空間にいた

「ここは・・・」

「久しぶりね、照井竜」

声を聞き振りかえる

「シュラウド・・・」

「残念ながら、地球ではなかったけど・・・新たな生を得たのね」

そのリュウの今の姿を見ながらシュラウドは言う

「シュラウド、頼みがある」

「何かしら？」

「お前の力で、今いる俺の世界でアクセルとして戦いたい」

「それは、何のため？」

シュラウドの問いに、リュウは真剣な眼差しでシュラウドを見た。

「家族を守るためだ」

「そう・・・丁度よかったわ。そうしようと思ったのよ」

「何？」

「目が覚めたらベッドの上にでも置いておくわ・・・でも、来るべき日まで使ってはいけないし、他人に見られてもダメ。いいわね？」

「わかった」

リュウはシュラウドの言葉に頷く。

「私と貴方はアクセルメモリを通して繋がっている。私が罪を償い終えるまで、永久に・・・だから私は見守っているわ・・・竜・・・」

こうして、リュウの意識はまた薄れていった。

朝になって起きると、本当にAと書かれたガイアメモリ、アクセルメモリ、Eと書かれたエンジンメモリ、そしてTと書かれたストップウォッチの付いたガイアメモリ、トライアルメモリ・・・そしてそれぞれを入れるためのツールであるアクセルドライバーと、専用武器エンジンブレードが置かれていた。

「シュラウド、感謝するぞ」

そう言いながらドライバーとアクセルメモリだけをバックに入れておいた。これは万が一のためである。そしてエンジンブレードはまだ重たく、生前でも扱いづらいため机の下に封印。エンジンメモリとトライアルメモリも同様である。

「来るべき日まで・・・か」

来るべき日、それはアクセルの力が必要になる時

「わかっているよ、シュラウド・・・」

リュウは静かにそう呟いた

第2話　誕生のR／そこは魔法の世界（後書き）

と言うわけでリュウ誕生の話でした。

次回はついに？あの子たちが登場する予定です

第3話　GとSとの出会い／騎士との対決（前書き）

「俺には夢がない・・・でも、夢を守ることはできる」乾　巧

仮面ライダー555は大好きでしたね。ファイズギア持ってましたw

今回は本編にあまりで来なかったあの二人の登場です

第3話　GとSとの出会い／騎士との対決

アクセルメモリを取り戻してから早数年の歳月が過ぎた。リュウは日々クイントから受けた鍛錬をこなし、そしてアクセルとして戦ってきた剣技を忘れずに練習をし続けている。そして小学3年生になったある日、クイントが二人の少女を連れて来た。一人は髪の長いクイントと似た髪形の少女。もう一人は逆に髪が短いボーイッシュな少女である。

「・・・・・母さん、この子たちは？」

「うふふ、今日から家族になる子たちよ」

クイントの言葉に、意味が理解できないリュウ。そしてまさかという答えが出てしまう

「まさか、隠し子か？」

「へぇ～・・・リュウはそんな風にお母さんを見るんだ」

と、リュウにアイアンクローをするクイント。仮にも陸戦魔導士である。握力は半端なものではない。

「痛い・・・冗談だから、やめてくれ」

「ふふっ、許してあげるわ。さあ二人とも、お兄ちゃんに挨拶して。今日からこの子は貴方達のお兄ちゃんなんだから」

と、クイントが言う。二人は若干緊張しているらしく、なかなか切り出せない。それを見かね、リュウは一歩前に出る

「・・・リュウ・ナカジマだ」

「あ、あの・・・えと、ギンガ・・・です」

ロングヘアーの少女が静かに名乗った。

「えと、えと！スュ、スバ、スバル・・・」

と、必死に言うショートカットの少女。どうやら言葉がまだはっきりしてないらしい。

「二人のお兄ちゃんだからね、ちゃんと言うこと聞くのよ？」

そう言ってクイントが出かけようとする

「母さん、どこへ？」

「買い物よ♪」

「え・・・」

「いっちゃうの・・・？」

と、まるで世界が終わってしまうような顔をする二人。

「だ、大丈夫よ。すぐ戻るから・・・ほら、リュウ、遊んであげて！」

こうしてすたこらとクイントは出て行ってしまった。

（・・・この状況、どうしろというんだ）

リュウは静かにそう思っていた。何しろスバルがチョロチョロ走り回り、ギンガは不安そうにおどおどと周りを見ている。

「さて、どうしたものか・・・」

家には遊び道具など一切ない。ゲームの類もないし、庭にあるのは木刀や訓練用のグッズのみ。とても幼い子供にやらせるものではない。リュウはとりあえずお菓子を取り出し、二人に上げた。

「これでも食べて大人しくしていろ」

と、クッキーをざらざらと皿に置き、ジュースを置いておいた。二人はまるで初めて見るようなしぐさでそれを見る。リュウがそれを一口入れると、少しかじってみる。そしてそれは段々と量が増え、沢山食べるようになる。どうやらお気に入りになったようだ

「もっとたでたい！」

スバルがキラキラと目を輝かせる。ギンガもギンガで無言の訴えをしてくる。

「・・・確か、ここにあったな」

残りを出し、二人が食べる。やれやれとため息をつき、リュウは庭で修業を始める。休日はいつもクイントに課せられた量の運動をこなしている。

「ふっ！」

格闘技においては幾多の犯罪者やドーパントを相手にしてきたかは分からない。それほどにリュウのバトルセンスは高いのだ。

「「・・・・・・」」

するといつの間にか、二人は食べるのをやめてそのリュウの動きをずっと見ていた。リュウもそれに気が付き、リュウが近づく

「どうした、二人とも」

「おにいたんかっこいい！」

スバルが目をキラキラさせて言う。憧れを持つようなそんな目である。ギンガもコクコクと頭を縦に振っていた。

「そ、そうか・・・」

「スバルもやりたい！」

「あ、あたしも・・・やりたい」

二人はどうやら格闘技に興味を持ったようである。リュウはやれやれとため息をついて、二人の頭を撫でる。

「二人にはまだ早い、もう少ししたらな」

二人はリュウの言葉に少し不服そうではあったものの、笑顔であった。

それからしばらくして、クイントがごちそうを買って帰ってきた。ケーキやら何やら、さらにクイントの手料理である。ゲンヤも帰宅し、二人を歓迎するパーティーが行われた。二人は初めは驚いてはいたが次第にはしゃぎすぎて眠ってしまった。

「うふふ、リュウにべったりね、この二人は」

「ああ、妹が出来てよかったな、リュウ」

「・・・父さん、母さん、ずっと聞きたかったが、二人はいったい？」

リュウの言葉に、クイントは少し真剣な表情になった。

「・・・あの子たちは、私が追う事件で保護した実験体よ」

「戦闘機人・・・ってことか？」

「ええ、そうよ。あの子たちはね、どこかで入手された私の細胞を元にしてるらしいの」

「！？」

「だから引き取ったの・・・実質上、私が親みたいなものだし」

と、笑顔を見せるクイント。だがこれが示すことは

「管理局に母さんの細胞を入手して使った奴がいる・・・」

「そうね・・・それを踏まえて調査するつもりなの。だからあの子たちを守ってあげて」

と、クイントはリュウの頭を撫でる。リュウも静かに頷いた。

「わかった・・・二人は必ず守る。俺の妹だからな」

「ふふっ、そう言ってくれると母さん嬉しいわ」

前世で、リュウは家族の中で妹も失っている。拳を強く握って誓う。今度こそ守り抜いて見せる。そう思うのだった。

しばらくして、ギンガとスバルはすっかりリュウに懐いてしまった。ギンガはリュウを「おにいちゃん」とよび、スバルは「にぃに」と呼ぶ。家族で買い物に出かける時、食事をする時、いつもリュウは二人の板挟みになっている。

「おにーちゃん！早く！」

「にぃに、いこ！」

二人は嬉しそうにリュウの手を引く。リュウとしては嬉しいのだが少々疲れるところもある。そんな中、デパートであるお店を見つけた。それは以前リュウが照井竜であったときに愛用していたブランドを見つけた。ハートが逆に描かれているのがとても印象的で、前に持っていたペンダントも亡き妹から送られた大切なものであった。世界は違っても、ここにあるのには少し驚いていた

「あらリュウ、どうしたの？」

「いや・・・」

「あら、ずいぶんカッコいいわね・・・へぇ～・・・」

と、クイントがそれを眺めている。そしてジャケットを着せたりする。

「いいわね、買ってあげよっか」

「いいのか母さん」

「いつもは自分で欲しいとか言わないからリュウは。買ってあげるわ」

と、クイントが言う。それと言うのも、リュウは幼少から中の精神年齢上で誕生日などに欲しいと一言も言わないし、普段からもおもちゃやゲームをねだらない変わった子供である。経済的には助かるのだが、子供としてはかなり可愛げがないのだ。そんなリュウが少しだけ欲しいと思ったものにクイントは反応し、買ってあげることにしたのだ。

「ジャケットと、シャツ・・・ズボン・・・どうせなら全部そろえましょう」

と、次々に買って行くクイント。ギンガとスバルはゲンヤと玩具コーナーにいるのでいない。それをいいことにクイントは次々と買って行く。

「かあさん、そこまでしなくても・・・」
結果的にシャツ、上着、ズボン、アクセサリー、ブーツ、全て一新された。お値段はなかなか良心的な値段であった。
「ほら、カッコいい！」
「あ、ありがとう・・・母さん」
と、少し照れるリュウ。そこへギンガとスバルが帰ってきた。
「わぁ・・・！お兄ちゃんカッコいい！」
「カッコいい！」
と、ギンガとスバルが目を輝かせた。ゲンヤもほぉ、と感心する。
「そうでしょ？やっぱり男の子はかっこよく飾らなきゃ」
「お兄ちゃん、お父さんがおもちゃ買ってくれたの！いいでしょ！」
と、ギンガがおもちゃを見せる。
「ああ、よかったな」
「スバルも！」
と、熊のぬいぐるみを見せる。
「よかったじゃないか」

こうしてリュウはこの日一日ご機嫌であった。そしてそんな日の帰り道。それぞれ欲しいものを買ってもらえたのでご機嫌の3人。夕焼けに染まるミッドチルダの街を歩き、駅へと向かう。

「そう言えばギンガとスバルは大きくなったら何になりたい？」

「うーん・・・」

「スバルね、にぃにのおよめさんになる！」

「ぶっ・・・！」

缶コーヒーを飲んでいたリュウが噴き出しそうになる。ゲンヤも同じことだった。

「スバルずるい！あたしもお兄ちゃんのお嫁さん！」

「あらあら、大変ねぇ・・・リュウ、しっかり面倒見てあげなさい」

「母さん、冗談でもやめてくれ」

「いいじゃねぇか、で？どっちが好きなんだ？リュウ」

と、ゲンヤも悪乗りしてリュウをからかう。

「お、俺に質問するなぁ～！」

そう言って駆けだすリュウ

「あ！お兄ちゃん！」

「待て～！」

ギンガとスバルが走りだし、リュウを追う。こうして静かに、家族のひと時は流れて行った。

それから3年の月日が流れた。リュウは学校に通いながらも時空管理局の嘱託魔導士候補という異例の大抜擢を受けた。それと言うのもその魔力量とバトルセンスが管理局の目にとまったからだ。リュウとしては母親の細胞を提供したのが管理局と疑っているので不満はあるものの、それを調べ上げるためにもそれに了承したのだ。そして今日はクイントの部隊の訓練を見学しに来ていた。

「・・・・・・」

「どう？リュウ」

「すごいの一言だ・・・」

その実戦に似た訓練と、戦闘には驚かされるものだ。前世では見ることができないであろう、その施設の訓練の内容にリュウは驚かされっぱなしである。

「クイント、あなたは今日見学なの？」

と、紫色の髪の女性が近づいてくる

「ええ、今日は息子の見学の付き合いよ」

「へぇ、この子がクイントの子・・・あたしはメガーヌ・アルピーノよ。よろしくね」

「リュウ・ナカジマだ・・・よろしくお願いします」

そう言って握手を交わす。それからリュウは一人の男を見ていた。

「あら、隊長がどうかしたの？」

「この部隊でもかなりの腕と見える」

「ふふっ、そうね・・・ゼスト隊長はエースだから」

ゼストと呼ばれる男は5人ほどの部隊の局員を相手に戦いをする。それぞれに的確な攻撃を加えて撃破するというものだ。

「あの男と戦ってみたい」

「あらあら、クイント・・・この子将来大物かしら？」

「どうかしらね・・・って、リュウ？」

リュウが自分の隣にいないのに気づくクイント。そしていつの間にか立て掛けてあった木刀もない。

「はあっ！」

いつの間にか駆けだしていたリュウが背後からゼストに迫っていた。そして木刀を振り下ろす

「なっ・・・！」

メガーヌが声を上げる。だがゼストはそのまま手にしていた木槍でそれを受けた。

「なかなかの殺気だな、クイントの倅」

「ふっ・・・」

地面に着地すると、リュウは剣を構える。

「流石は首都防衛隊長・・・素晴らしい武器の捌き」

「その眼・・・その歳でそんな目が出来る奴は初めて見た。」

「凄いわね、リュウ君」

ゼストも武器を構えなおす。そして遠くでメガーヌが一言呟くのだが、そんな中でクイントが一番驚いていた。自分は今まで普通のストライクアーツの基礎を叩きこんではいた。剣術だってかじっているのだから少しくらいは教えた。だがあんな動き、あんな物を教えた記憶はない。背後から確実に敵を倒すような無駄のない動きと、その熟練されたような動きは普通の子供には出来ない。

「人とは戦ったことがなくてな・・・一手、俺もご教授願いたい」

リュウは木刀を握り、ゼストを見る

「いいだろう、行くぞっ！」

ゼストが木槍を振る。大ぶりの一撃は空気を裂くような音を立てるが、それはリュウに当たらない。リュウはそれを避け、ゼストの死角から木刀で突きを放った。だがその軌道を瞬時に見切ったゼストは木槍の持ち手の部分でそれを受ける。寸分ずれていれば直撃するそれを、しっかりと受けていた

「っく！」

「フンッ！」

「はあっ！」

――轟！

木刀と木槍で戦っているのも関わらず、互いの殺気は凄まじかった。リュウは体に回転を加えて剣を振り下ろす。子供の体では思っている以上に力は出ない。ならば回転を加えて力を上げればいい。そしてそれの意味を瞬時に理解したゼストは力を込めて木槍を振るった。

「はああっ！」

「おおおっ！」

互いの武器がぶつかり、大きな音を立てた。いつの間にか別メニューをしていた騎士たちもその戦いを全員が見ていた。そして音を立て木刀と木槍が砕け散った。そこからリュウは吹っ飛ばされ、地面にころがる

「やるな、おもしろかったぞ」

「はあ、はあっ・・・感謝します」

「何、気にするな。おもしろかったからな！」

「こらリュウ！ゼスト隊長に何してんの！」

と、クイントから拳骨を喰らった。リュウはその場に痛みを抑えてうずくまる。

「なあに気にするなクイント。俺も久しぶりに楽しかったからな」

「隊長が言うなんてよっぽどなのね」

「クイントの倅・・・リュウだったな。でかくなったら俺達の部隊に来い。歓迎するぞ」

そう言って頭を撫で、ゼストは訓練場を後にしていった。

「まったくもう、なーんであんなことするかなぁ」

と、クイントがリュウの首を腕をまわして締め付ける

「か、母さん・・・入ってる」

「ほらほら、そこまでにしておきなさいな。もうすぐ病院へ行くんでしょう？」

戦闘機人であるギンガとスバルは定期的に検診へ行くようになっている。今日の帰りにはその迎えもする必要があるのだ。

「そうだったわ・・・それじゃあね、メガーヌ」

「ええ、じゃあリュウ君、また遊びにいらっしゃい」

「はい、ではこれで」

こうしてリュウたちは部隊を後にし、病院へ向かい、二人を迎えに行くのだった。
このあと家でクイントがリュウと組み手をして竜がボコボコにされたのは言うまでもない

第3話　GとSとの出会い／騎士との対決（後書き）

というわけでゼストとメガーヌの登場でした。リリカルなのはでは個人的にメガーヌとクイントは好きです
ゼストも渋さがまたいい（笑）

ではまたw

第４話　蘇るＡ／３人の約束（前書き）

・お婆ちゃんが言っていた。友情とは、友の心が青臭いと書く、ってな　ｂｙ　天道　総司
天道語録の中で何故か一番頭に残っている名台詞。
言われた瞬間「なるほど！　確かに！」と思ってしまったｗｗ
神埼先生より頂きました。こんな感じに書いていきます。
ちなみに私もこの天道の語録は好きですね。私の場合は
「食べるという字は、人が良くなると書く、ってな」
も印象的でした。ああ～となっちゃう天童語録、日常でも使ってみたりｗ

あー・・・ド畜生、テストが難しい

とりあえず頑張って更新、明日は他の小説も出せるように頑張ります

相変わらずクオリティが低いとかよく言われますが、努力していきますので、応援よろしくお願いします

第４話　蘇るＡ／３人の約束

ゼストとの戦いから数日が過ぎたある日の夜。リュウはまた夢を見た。

「ここは、いつもの・・・」

白い空間にいるリュウは周りを見る。

「シュラウド」

いつも通りに、シュラウドはそこにいた。

「今日は何の用だ？」

「・・・危機を知らせに来たわ」

「危機？」

「貴方の家族に、危機が迫っている・・・」

シュラウドの言葉に、リュウは驚きを隠せない。

「なん、だと・・・？」

「メモリを使うといいわ。でもメモリを使う本当の時はもう少し先・・・それを覚えておきなさい。メモリを使うことの意味を・・・忘れてはだめ」

「待てっ！それはどういう・・・！」

「メモリを使うことはこの世界では歓迎されない。自分の力が及ばなかったとき、使いなさい」

そう言ってシュラウドが消え、リュウの意識も消えていった。目を覚まし、時計を見る。朝の9時。いつもどおりの休日だ。だがクイントが任務で調査へと出かけていた。家族の危機・・・嫌な予感がした。リュウはアクセルメモリとエンジンメモリ、そしてアクセルドライバーとエンジンブレードを手に、部屋を出る。エンジンブレードは以前のものとは違って比較的軽くなった。何故かはわからないが、シュラウドがそういう配慮をしてくれたのかもしれない。

「あれ？にぃに、どこに行くの？」

家の外に出ると、そこにはスバルとギンガがいた。どうやら朝早く起きていたらしい。

「・・・少し出かけてくる」

「お出かけするの？スバルも行く！」

と、スバルが目をキラキラさせる。

「駄目だ、スバルは家で大人しくしていてくれ」

「やだやだやだぁ！にぃにとお出かけする！」

と、言っても聞かない。ギンガも行きたいようである

「あたしもお兄ちゃんとお出かけしたい」

「ギンガ、スバル・・・頼むから言うことを聞いてくれ。すぐに帰ってくるから」

「うー・・・」

「いい子だ」

そう言ってリュウは駆け出し、呼んでいた自動４輪に乗り込んだ。ミッドチルダではタクシーはないが、こう言った自動サービスが存在する。そこまでのお金を払えばそこまでいき、そこで降ろされる。お金を払わないとそのまま自動で管理局に突きだされるというものである。

「急いで座標地点へ行ってくれ。大至急だ」

『了解しました』

こうして急ぐリュウであった。実を言えば、クイントの行く場所は知っていた。クイントが寝ていたころ、リュウがクイントのパソコンのデータをそっくりコピーし、任務を見ていたからである。

（間に合ってくれ・・・！）

リュウはずっと祈り続けていた。家族を守りたいその一心で

一方　違法研究所に乗り込んだゼストの部隊は全滅寸前であった。ＡＭＦによる魔力の制限や目の前にいる人らしきそれと、謎の機械

軍団に、ゼスト達は苦戦していた。

「クイント、お前はここを脱出しろ！」

「隊長！？」

「そうよ、貴方の足ならなんとか救援を呼びに行ける」

「メガーヌ・・・」

メガーヌは短く笑い、残り少ない魔力でスフィアを放ち出口への扉を壊した。

「急ぐのよ！貴方だけでも！」

「でもっ！」

「家族がいるでしょう・・・？あの子たちを泣かせては駄目」

メガーヌの言葉に、クイントは奥歯をかみしめ、駆けだす。だがメガーヌにもまだ生まれて間もない子がいたはずであった。それを言う前にメガーヌが頷いてしまう。行けと

「待ってて・・・すぐに助けを呼ぶから！」

「逃がさんっ！」

白髪の少女が駆けだそうとするが、それは叶わない。ゼストに吹き飛ばされたからだ。

「悪いが、ここは一歩も通さんぞ」

「そうよ、ここから先は行かせないわ」

二人が構えを取る

「人間如きが我々に勝てると思うなよっ！」

二人はその軍団へと向かって行った。

クイントは走り続けた。仲間を助けるために、仲間の無念を晴らすために、そして家族のために。どれだけ走ったかわからない、どれだけそこから離れたか分からない。二人を置いて自分は走り続けている。救援を呼ぶために、仲間が生きていると信じて、だがそれは叶わない

「見つけたぞ、生き残り」

そこにいたのは先ほどいた人らしき敵のうちの一人だった。紺色の髪をしたショートカットの女性だった。

「っく！」

「悪いが死んでもらう、あそこに立ち入った以上は！」

体が思うように動かない。体力が限界だ。もう駄目だと、そう悟った。自分の人生が、自分の歩んできた道が、ここまでなのだと・・・

「ごめんなさい・・・アナタ、リュウ、ギンガ、スバル・・・」

静かにクイントは目を閉じる。

「ＩＳ　ライドインパル・・・っ！」

女性が何かを発動させようとしたその瞬間、何かがぶつかった。それは剣だ。紅と銀が特徴的なその剣

「なんだ！？」

「・・・間にあったな」

クイントは聞き覚えのある声を聞いた。だが目がかすんで見えない。そして体が音をあげて倒れ伏す。いったい誰が助けたのか？クイントには分からなかった。そのままクイントは気絶してしまったのだから。

リュウはその研究所の近くにある道で車を止め、走っていた。間に合って欲しいその一心で。そしてそこで母の姿を見る。体から血を流し、敵に追い詰められている姿を。この時わかった。これがシュラウドの言った「メモリを使う時」なのだと。そして敵めがけ、エンジンブレードを投げたのだ。母を救うために。家族を二度と失いたくないために

「・・・間にあったな」

静かに、リュウは呟く

「何者だっ！」

女性は目の前にいた子供のリュウを睨みつける

「俺に質問するな・・・」

そう言いながらアクセルドライバーを腹部に装着する。それによってベルトが巻かれた。

「さあ・・・振り切るぜ」

『Ａｃｃｅｌ！』

「変・・・身っ！」

リュウはアクセルメモリを起動させる。

『Ａｃｃｅｌ！』

エンジン音が鳴り響き、装甲がリュウの体へと纏われる。それは燃えるように紅い装甲と、蒼い複眼。バイクを思わせるその姿。仮面ライダーアクセルがここに降臨した。体は前世と同じくらいの身長に変化しており、体に不自由はない。

「！？っく、誰だか知らんが・・・片づけるっ！」

「はあっ！」

アクセルは女性に蹴りを放つ。女性はそれを避けて後方に飛ぶが、アクセルはそのまま走りエンジンブレードを構えた。

「行くぞ」

『Ｅｎｇｉｎｅ！』

エンジンメモリを起動させ、エンジンブレードへと挿入する。そしてトリガーを引く

『Ｓｔｅａｍ！』

音声と共に高熱の蒸気が発射される。

「っく！この程度で・・・・」

女性が構えるがアクセルの姿が消える。

「何！？どこに・・・・「はあああああっ！」何！？上！？」

上からアクセルが急降下して迫る。女性は腕のビーム状のブレードでそれを受け止める。

「っく！」

『Ｅｌｅｃｔｒｉｃ』

「はあああああああああっ！」

「ぐあああっ！」

電撃を帯びたその斬撃が幾重にもヒットする。そしてもう一度トリ

ガーを引いた。

『Ｅｎｇｉｎｅ！Ｍａｘｉｍｕｍ　ｄｒｉｖｅ！』

「はあっ！」

「ぐあああっ！」

エンジンブレードの先からＡという形をいたエネルギー弾「エースラッシャー」が発射され、女性に直撃した。

「絶望がお前の・・・ゴールだ」

「っく！まだだ・・・！」

「アレを喰らってまだ立てるのか・・・！」

アクセルのマキシマムドライブは強力なものだ。普通の人間が喰らえばひとたまりもない。だがこの魔法世界ならなんらかの防ぐすべがあったのかもしれないとリュウは考える。そして女性がよろよろと立ったので、もう一度エンジンブレードを構えなおす。だがそこへ別の女性が現れる。眼鏡をかけた女性だった

「大丈夫ですかぁ？トーレお姉さま」

「済まないクアットロ・・・離脱するぞ！」

「わかりましたぁ」

「待てっ！」

アクセルが迫るが、転送の魔法陣が既に敷かれていた。

「この借りはいずれ返す」

そう言い残し、女性は消えた。アクセルはクイントを抱き起した。

「母さん、しっかりしろ！」

息はしているが、血が流れ過ぎている。

「間に合ってくれよ！」

アクセルはクイントを抱え、自動車両の場所まで戻っていった。

時空管理局　本局　集中治療室

ミッドチルダの病院に搬送されてから応急処置がなされると、時空管理局の集中治療室へと運ばれた。クイントは重傷で、クイントの部隊は全滅。隊長のゼストと隊員のメガーヌは行方不明となっていた。

「・・・・・・」

「にぃに、お母さん治るよね」

スバルの言葉に、リュウは小さく頷き、頭を撫でる。

「ああ、きっと母さんは良くなる」

不安そうにスバルはリュウに抱きついたまま離れない。ギンガも同じく反対側から抱きついていた。無言で不安そうに治療室を見続ける。すると治療室のランプが消え、医者が出て来た。

「うちの嫁の容体は・・・」

と、ゲンヤが効くと、医者は頷く

「一応、峠は越えています。後は本人の回復を待ちましょう。陸戦魔導士ですから・・・体力はあるはずです」

「俺達に出来ることはあるか？」

リュウの言葉に、医者は笑った。

「君たちにできることは、お母さんを見守ってあげることだ。いいね？」

「ああ、わかった」

こうして医者が去ると、クイントは病室へと移されて行った。すると、ギンガが泣いていた。

「どうしたギンガ」

「よかった・・・お母さん・・・うぇぇ・・・」

「ああ、そうだな」

リュウは泣いているギンガの頭を優しく撫でていた。

深夜の夜の病室

「・・・」

病院が静まりかえった頃、リュウはクイントの病室の部屋の前にいた。その腹部にはアクセルドライバーが装着され、アクセルメモリとエンジンブレードがあった。ゲンヤは本局の処理があるために戻り、スバルとギンガはクイントに寄り添って寝ている。リュウはただただ、廊下で来るであろう標的を待ち続ける。そしてそこに無数の影があった。それは機械の軍勢。さらには結界の様なものが張られていた。

「来たか・・・口封じのために来ると思ったぞ」

そう、クイントは研究所からの唯一の生還者である。そんな彼女を研究所の人間が何もしないわけがない。

「結界とやらがあるのは好都合だ・・・振り切るぜ」

結界が張られているということは、誰かしら魔導士が関わっているということとなる。だが今は目の前の機械を排除するのが先である。

『Ａｃｃｅｌ！』

「変・・・身っ！」

『Ａｃｃｅｌ！』

エンジン音が鳴り響き、仮面ライダーアクセルが姿を現す。そしてその機械の軍勢が一斉にアクセルに襲い掛かる。

『Ｅｎｇｉｎｅ！』

エンジンメモリを入れ、トリガーを引く

『Ｊｅｔ！』

「はあっ！」

エネルギー弾を発射し、次々と敵を粉砕していく。さらにアクセルは遠くにいる機械の軍勢の司令塔の様なものを見つける。同じ機械の軍勢の中に一機だけ妙なアンテナが付いているのだ。

「あれが司令塔かっ！」

アクセルはアクセルドライバーのスロットルを捻った。

『Ａｃｃｅｌ！Ｍａｘｉｍｕｍ　ｄｒｉｖｅ！』

何度かスロットルを捻るそれによってアクセルの体が燃え上がり、周囲の温度を上げていく

「はあああっ！」

やがてアクセルの正面にタイヤ跡状のエネルギーを放出される。そしてそれをなぞるようにアクセルが回し蹴りを放った。必殺技「アクセルグランツァー」である。それを受けた機械兵器はバチバチと

音を立ててよろける

「絶望がお前の・・・ゴールだ」

爆発は周りの機械兵器を巻きこみ、バラバラと機械のパーツが散乱していた。アクセルはメモリを抜き、変身を解除する。その瞬間

――ゴトッ

と、音が鳴った

「っ！？」

まさか戦っている間に入られたのか！？そう思いドアを開けた。クイントのいる部屋は集中患者の部屋なので壁は分厚く、窓はない。慌ててドアを開けた。しかしそこにいたのは敵ではなかった。

「スバル・・・それにギンガ！？」

そう、ドアの前にいたのは自分の妹たちであった。

「にぃに・・・」

「お、お兄ちゃん・・・」

「まさか、見ていたのか？」

リュウの言葉に、震えながら二人は頷いた。

「そうか」

ふぅ、と短くため息をつき、二人の頭を撫でる。二人は未だに震えていた。

「ごめんな、怖かっただろう」

「ん・・・」

「お兄ちゃん、あれはなあに？」

ギンガが恐る恐る聞いた。

「ああ、あれはな・・・お兄ちゃんが人を守るためになる姿なんだ」

「人を、守る？」

「ああ、仮面ライダーだ」

「「仮面ライダー？」」

二人は首を傾げる。まあ、知らないのだから無理もないのだが

「そうだ・・・正義のヒーローかな」

その言葉に、スバルが目をキラキラと輝かせる

「お兄ちゃんヒーローなの！？カッコいい！」

「だが、ヒーローと言うのは人に言うものじゃない」

「どーして？」

「ヒーローはな、人のために戦う。だから正体をばらしちゃうと人助けが出来なくなるだろう」

部屋に入り、扉を閉める。リュウは静かにエンジンブレードを布で包み、アクセルドライバーを鞄に入れる。

「だからさっきの姿のことは、３人だけの秘密だ」

そう言ってリュウは小指を出した。

「俺との約束、守れるな？」

「「うん！」」

そう言って二人が小指を絡ませる。そしてこの時ギンガとスバルは思う。自分もいつか、兄の様になりたいと・・・

第４話　蘇るＡ／３人の約束（後書き）

というわけでアクセルの復活でした。
とりあえず、シュラウドが意味不明なことを言ってますが、それは後から分かるようにしてます。
何故リュウはこの世界に転生したのか？
今回、シュラウドが何故照井に大きく関わるのか？
そして何故アクセルとして戦うことになるのか？
リュウがＡランクの魔力を持つ意味は？

答えはＳｔＳのこの話で登場する敵に関係します
そしてスバルの憧れは少しリュウに傾きましたが、なのはが憧れになるのはしっかりと書きますので、お楽しみに

とりあえず、今日はこの辺で

クオリティは低いかもしれませんが、頑張ります

第5話　Nとの出会い／意地の代償（前書き）

「今なら解る、お前は俺の運命を変えていた……」
「俺の占いが、やっとはずれる……」仮面ライダー龍騎・手塚海
龍騎での手塚死亡時の台詞です、この台詞はマジで泣きました。

美仁さんから頂きました。
病に侵された正義という二つ名がこの前のフィギア王にありました。
かっこよかったですねぇ、このシーン

実は劇場版の仮面ライダー龍騎のラストシーンのロケ地、私が通っている大学だったりします。
ザビー初登場とかもそこです

今回はまた皆さんに頼みごとがあるのでよかったら感想に書いて欲しいですw

ではどうぞ！

もし気になるなら調べてみてくださいw

第5話　Nとの出会い／意地の代償

クイントへの襲撃から次の日、部屋の中でリュウは徹夜で見張りを続けた。次の日何事もなかったように機械の瓦礫と結界は消えていた。そう、まるで昨日の夜の出来事は「なかった」かのように。魔導士が消したのか、回収したのか。いずれにしろ魔法が関わった以上管理局を疑う線は濃くなった。そして朝7時。出勤前にゲンヤが見舞いに来た。

「おはようリュウ、どうした。目のくますげぇぞ」

「なんでもない・・・」

「そうか、クイントはどうだ？」

「まだ寝たままだ。ギンガとスバルも一日寄り添って寝ている」

と、リュウは二人の毛布をかけ直した。

「父さん、仕事に行かなくていいの？」

「ああ、もう行くよ。クイントを頼むぞ、リュウ」

「ああ、分かっている」

こうしてゲンヤは仕事に向かった。

この後、スバルとギンガが起きて、朝食を取りに行く。昨日遅くま

で起きていたせいか、二人は眠そうである。クイントが起きないということもあって食欲もいつもの半分以下である。戦闘機人であるからか、その食欲は半端ではない。クイント本人も食欲は普通の星人女性の倍以上の量を食べる。だが今は普通の子供の食事量よりも少ない

「二人とも、食べないのか？」

「「・・・・・・」」

「いつもみたいに沢山食べないのか？」

「だって、お母さんが・・・」

と、ギンガが言う。それに対してリュウはため息をつく

「母さんが起きた時、お前達が元気でなかったらどうする？母さんが元気にならないぞ？」

リュウが笑顔で言う。それに二人は少々顔を紅くする。そしてスバルが頷いた。

「わかった、スバルいっぱい食べる！」

そう言って沢山食べる。ギンガもスバルにつられて食べる量を増やす。

（母さん・・・二人が待ってる・・・早く眼を覚ましてくれよ）

一方別の病室

「……」

一人の少女がその天井を見上げていた。正確には十分に体を動かすことができないのだ。体は包帯だらけで、点滴が腕に注射されている。隣には少女と、少女の友達が映っている写真、そして見舞いの花が置かれていた。少女はただただ天井を見続ける。

「・・・私、もう飛べないのかな」

静かに少女は呟く

「もう、誰も私を見てくれないのかな・・・」

次第に、少女の目から涙が零れ落ちる。寂しさと恐怖が同時に襲い掛かり、ガタガタと震えている。

「やだよ・・・独りぼっちはもうやだ・・・」

小さく呟く少女。その時、少女の体がゆっくりと痛みを抑えながら写真に手を伸ばそうとする。その悲しみを紛らわすため、自分の存在を確認しようとするために。だが、それは叶わない

「あうっ！？」

伸ばそうとした瞬間、体がバランスを崩した。やはり無理があったのだろう。そして少女はベッドから床に叩きつけられた。想像絶する痛みと、自分の今の非力さが身にしみていく。少女の目からさらに涙が零れていく

「う、あぁぁぁ・・・うぅ・・・私、一人はもうやだよ・・・」

少女の涙は床にポタポタと落ちていった。

病院の廊下

リュウは二人を先に病室へ行かせ、自動販売機でコーヒーを買っていた。昼間ということと、管理局の管轄内ということもあってか、数人の管理局員が周囲を巡回している。これならば流石に襲ってくることもないだろう。そう思いながらリュウはコーヒーを飲む。食堂でも飲んだのだが、やはり眠気を抑えるためにもコーヒーは欠かせない

「いつぶりだろうな、徹夜明けでコーヒーを飲むのは」

仕事の時にはよくこういうことをしていたが、この世界に転生してからはこんなことを一切していなかった。リュウはジュースをギンガとスバルのために買い、自分のために2本のコーヒーとお茶を買った。そして病室に戻る。その時だ

――ドタンっ！

何やら何かが落ちる音がした。リュウは一瞬、その音がした病室に顔を向ける。病室は個室らしく、表札には一人しか書かれていない。そして声が聞こえた

「う、あぁぁぁ・・・うぅ・・・私、一人はもうやだよ・・・」

「泣いている・・・？」

リュウはそれが気になり、ノックする。

「失礼する」

そう言って扉を開けて中に入ると、一人の少女がベットから落ちて起き上がることが出来ずにいた。

「おいっ！大丈夫か！」

「あ、うぅ・・・誰？」

「・・・そこを通りがったものだ。大丈夫か？今起こすからな」

そう言ってリュウは優しく少女を抱き起し、お姫様抱っこでベッドの上へ戻した。少女は顔を真っ赤にする。

「これでよし・・・」

「あ、ありがとなの・・・」

「気にするな、ここを通りがかっただけだからな」

「あ、写真・・・」

と、少女が呟く

「写真？これか」

と、床に落ちた写真を少女に渡す。

「写真を取ろうとしたのか・・・その体で」

「・・・うん。あ、そうだ・・・私、高町なのはっていうの」

「俺はリュウ・ナカジマだ。地球の人間か？」

「うん」

その言葉にリュウは少し驚く。地球の人間、前世でだが、自分も地球出身の人間だ。それに少しだけ嬉しいという事実。まあ、ナカジマ家も先祖は地球出身ということらしいのだが。

「そうか・・・俺の先祖も地球出身らしくてな、少し親近感がわいた」

「にゃはは・・・そうだね、リュウ君はなんだか地球の人みたい」

実際には地球の人間なのだが、話がややこしくなるのでそれ以上は言わないでおく。

「それにしても、随分ひどい怪我だな・・・先ほど床に落ちたのも、痛くないか？」

「だ、大丈夫だよ・・・この傷は、自分が悪いから」

「自分が悪い？」

リュウは首を傾げる。表札には管理局員であることを示す表記が描

かれていた。詰まる話、なのはは何かの戦闘か事故かで怪我をしたのだ。自分が怪我を負ったことにそれほど重く責任を感じるのだろうか？

「この怪我・・・自分の無茶が原因でこうなっちゃったの・・・ずっと無理してて・・・それを抑えつけて・・・それで敵に会ったら、堕されちゃった」

「・・・何故、無理をしたんだ？仲間がいただろう？」

「・・・うん、でも私はなんでも一人で出来ると思ったから・・・みんなに頼ったらいけないと思ったから・・・」

リュウはその言葉に、ピクリと眉をひそめた。ようするになのはは自分の弱さを見せないように意地を張って戦い続けたのだ。だがなのはの微妙な態度に、リュウは気づいていた。一人でやろうと、ウエザーに挑むのに仲間はいらないと思った意地はリュウも経験していた。だが少女の意地はそれはとまた違うものだった。

「それは、お前の本音か？」

「ふぇ・・・？」

「・・・こんなことを言いたくはないが、お前は自分に嘘をついたな？」

リュウの言葉に、少しだけなのはが体を震わせたのが分かる。先ほどリュウははっきりと聞いていた。

『私、一人になりたくない』という言葉を

「お前は仲間がいなくならないように、頑張ろうと意地を張り続けたんじゃないか？」

「・・・・・・・・・・・・・」

かつて、一匹狼となり・・・復讐鬼となったリュウ。だからこそどんな無茶でもしたし、誰も信用していなかった。

「お前がどうして他人を頼らないかは知らない。でも・・・自分に嘘をつくのは、自分のためにはならない」

「・・・めて」

「どんなに強がっても、心の弱さは見えてしまう・・・一人になりたくないなら、本音で言えばいい。それに・・・」

かつてどんなに仮面ライダーWがウェザーとの戦いに入っても『照井竜』はそれを邪魔と判断し一人で戦おうとしてしまった。それは自分の『復讐』のため、強がりで仲間を必要としないという意地を張った。だがそれは間違いだった。仲間がいて、愛する家族がいて、そして今も、守るべき家族がいる。だからこそ共に戦い、自分に正直にならなければいけない。だが・・・

「やめてっ！」

なのはが声を上げる

「私の心の中に入って来ないでっ！出てって！」

涙を目にいっぱいに貯めて、なのはは大声でそう言った。自分の心に入られる。これ以上、目をそむけた部分を前に出さないで欲しい。そんな拒絶があった。あって間もなく、地球について繋がりがあった少年に、なのはは思い切り否定してしまった。だが、はっとした、自分は何を言っているのかと

「・・・・・そうだな、悪かった。怪我がよくなるといいな」

そう言ってドアを開け、外に出る。そこで金髪の少女と茶髪の少年とすれ違うが、リュウは何も言わずそのまますれ違う。二人は不思議そうな顔をして通り過ぎるが、なのはが泣いているのを見てすぐに駆け寄っていった。

「さて・・・スバルとギンガを待たせるわけにもいかないな」

こうしてリュウはクイントが眠る病室へと戻っていった。

「・・・・・そうだな、悪かった。怪我がよくなるといいな」

そう言って出て行った少年、リュウの言葉を聞いて、なのははすぐに後悔した。自分の言
動と態度に、そして自分の涙に。自分は魔法だけが取り柄で、運動は中の下、勉強だって頑張ってみんなに追いついて学年トップにはいるが管理局の候補生となってからは下がる一方。だから魔法で頑張るしかない。みんなと一緒にいられるように。なのに無茶をし過ぎて・・・自分の積み立てた物が一機に崩れ落ちた。

―――これじゃあ、みんなが離れて行っちゃう

魔法が使えない自分を誰も必要としてくれるはずがない。そしてそんな自分に待っている運命など、たった一つしかない。

———また独りぼっちになっちゃう

今より幼い時、父親が怪我をし、母が、兄が、姉が、必死に生計を立て、頑張っていた。なのに自分は何もできないでいた。

———お家でいい子にしてるよ、なのはは一人で大丈夫

一人で強がり、そして自分を偽り続けた。本当はさびしい。誰か助けて欲しい、この孤独から、この絶望から。そんな風に時は過ぎ、魔法に出会った。魔法に出会い、パートナーができた。特別な力を授かり、いろんな事件に出会った。そのたび人と出会い、分かりあい、友達を作ってきた。なのに、そんな自分の中の意地が、痩せ我慢が、全てを崩してしまった。

———行かないでっ・・・！みんな、私から離れないでっ！

そんな夢を何回も見て、次第に自分の『意地を張ったこと』『自分の魔法に縋った理由』から目をそむけ続けていた。

「なのは、どうしたの？大丈夫？」

「うん・・・ごめんね、フェイトちゃん・・・」

涙を拭われて、微笑むなのは

「一体どうしたの？さっきの人が何かしたの？」

「ううん・・・なんでもないの・・・私がいけないの・・・私が・・・」

名前は知っている。だから会いたい。会って謝りたい。自分の過ちについて、それを指摘してくれたのにそんな恩人ともいえる人を拒絶してしまった。

「なのは？」

「ねえ、ユーノ君」

「何？なのは」

この時、なのはは一つの“決意”を固めた

「私、リハビリ受ける・・・もう一度、空を飛ぶ」

「なのは・・・」

もう一度空を飛びたい。もう二度と同じ過ちを繰り返したりしない。そして空を飛んで、あの人の元へ行きたい。行って謝りたい。そしてあの人が言いかけた言葉を聞きたい。

「いいの？本当に？」

「うん、頑張るから・・・私、頑張るから・・・」

なのはの胸に、一つの決意が芽吹いていた

一方戻ったリュウは

「ただいま」

「「おかえり～！」」

「あら、お帰りなさい」

笑顔でありながら泣いている二人。そして体を起き上がらせる、自分の母・・・クイントの姿があった。

「母さん！」

「心配させちゃったわね・・・もう大丈夫よ」

「よかった・・・」

リュウは笑顔になる。すると、クイントがリュウを手招きしてリュウを抱きしめた。

「か、母さん！？」

「ただいま・・・リュウ」

涙声の母の声が聞こえた。リュウも今だけは身を委ね、一言言う。

「お帰り」

第5話　Nとの出会い／意地の代償（後書き）

というわけでなのはとの邂逅でした。

実は個人的になのはと照井竜は重なるところがあるということを個人的に思っています。

意地を張り、一人でやるといって傷つく。そして次第に仲間の重大さに気付いていく。そんなことを考えた話でした。

次回はとうとうリュウにもデバイスが！

大まかな設定はありますけど、皆さんからもいい案があればぜひお願いします！

第６話　誕生のＡ／加速の心（前書き）

お久の更新
どうあってもタイトルでＡが外せないのがちょっと難点です
その辺は改善の努力をしていきます

今回はリュウにとうとうデバイスが渡ります。詳細は次回でどうぞ！

第6話　誕生のA／加速の心

クイントは目を覚ましてから一般の病棟へと移された。クイントがいた部隊が突撃した場所はもぬけの殻となっており、クイント自身もあまりよく覚えていない。今後襲撃が予想されるとして局員が二人ほど警備されることとなった。それからしばらくしたある日、リュウはマリーと呼ばれる人物に呼び出された。スバルとギンガの調整をしたり、デバイスを作る科学者である。

「初めまして、マリエル・アテンザよ」

「リュウ・ナカジマです。いつも妹達がお世話になっています」

そう言ってリュウが一礼する

「マリーでいいよ。それにもう少し柔らかく、ね？」

「わかった、マリーさん・・・それで、俺をここに呼んだ理由は？」

「ふふ、君、もうすぐ候補から本格的に嘱託魔導士としての資格試験を受けることになるみたいだから。デバイスを作ろうと思って。ゲンヤさんにもお願いされてたから」

と、言うマリーは次々と武器の案を出していく。槍、魔導士用の杖、剣、斧と、さまざまだ。母のクイントが所有しているリボルバーナックルも表示されている。

「さ、どれがいいかな？やっぱりお母さんと同じ？」

「いや・・・剣がいいと思ってる。剣術に心得があるわけじゃないが・・・腕には少し自信がある」

「剣かぁ・・・私の知り合いに剣の達人がいるの。それ聞いたら手合わせしたいなんて言いだすかもね」

と、思い出すように言うマリー。リュウは顎に手を当てて剣の設計図をじっと見ていた。

「マリーさん・・・その、デバイスというのは、こういう決まった形しかできないのか？」

「ううん、別に決まってないよ。なんか案があるの？」

「まあ、それなりに・・・」

と、口ごもるリュウ。実際クイント、そしてゲンヤが信頼してギンガとスバルを預けるほどの女性である。リュウはそれを信頼したいとも思う。だが管理局にアクセルドライバーやエンジンブレードは見せるのはあまりよろしいとは思わない。

「何々？もしかして、何か素晴らしい設計図があるの？」

「いや・・・」

「よかったらお姉さんに言ってごらん？力の限り助力するからさ」

と、笑みを見せるマリー。リュウも見せてはいいと少しは思うのだが、どうもシュラウドの「メモリはこの世界で歓迎されない」というのが引っ掛かる。それにエンジンブレードも質量兵器だ。この世

界で御法度の物を見せるわけにもいかない

「今から設計図を書いても構わないだろうか？」

「うんうん、ちょっと興味あるから書いてみて！書き方はね・・・」

こうして数分、マリエル先生の設計図書き方教室を習い図面を引き始める。といってもほとんど形状はエンジンブレードと同じもの。カートリッジシステムはギジメモリと同じ構想を考える。専門部や出ないので大まかな物しか書けないが、その発想はマリエルを驚かせる。

「へえ～・・・」

「カートリッジシステムをこんな感じに作れないか」

「なるほどなるほど、カートリッジを使い捨てじゃなくて何度も使えるように・・・まあ、魔力を込めればいくらでも替えが効くけど、こう言う風にリサイクルする方法かぁ・・・リュウ君の魔力はＡランクだし、悪くないけどこれだったら普通の方が良くないかな？」

と、専門的意見を加えて、どうにかエンジンブレードの設計図が出来上がる。そのデザインにマリーは何故か感動していた。そして待機状態は前世で妹にもらったペンダントと同じものを採用し、カートリッジは一般的なものを採用する。リュウとしてはエンジンメモリに「似たようなもの」を使った方が慣れているのだが、この方法では色々とデメリットが多いためマリーから却下された。大まかな設定が施され、そこから細部をマリーが埋めていく。細部というのはインテリジェントデバイスのＡＩや、そのほかに付属する昨日とバリアジャケットなどだ。それらを調整して、マリーはなんと普通

のデバイスの製造にかかる期間の半分の時間で終わらせてしまったのだ。マリー曰く「作るのが楽しかったから殆ど徹夜」とのことだ。ここまでわずか半月であった。

「さて、これがリュウ君のデバイスだよ」

「これが・・・」

不思議な感覚だった。まるで初めてエンジンブレードをシュラウドから与えられた時の様な感覚。これから強くならねばならないという決意が、不思議とこみあげてくるのだ。

『初めまして。貴方が私のマスターですか？』

女性の声が聞こえる。優しい声だった。特に誰かの声に似ているというわけではないのだが、とても温かい感じがリュウの中でこみあげる。

「ああ・・・これからよろしく頼む。リュウ・ナカジマだ」

『マスター認証を完了しました。私に正式名称と、よろしければ愛称をお願いします』

「愛称・・・？」

「ああ、一応正式名称だけでもいいんだけど。やっぱり相棒だから。そういうのあったほうがいいでしょ？」

（愛称、か・・・）

今まで一人で戦ってきたリュウ。翔太郎やフィリップの様に相棒がいたわけではない。少しだけ戸惑いながらも、数分考えてから答えを出した。

「正式名称は・・・アクセル・ハート。愛称は・・・アクセル」

『了解しました、正式名称、及び愛称を登録しました。これらの声紋認証により貴方を正式なマスターとして認めます。よろしくお願いします、マスター』

加速の心・・・仮面ライダーアクセルとしての心を忘れないために。ハートを付けた。リュウとしても逆位置でハートのマークがつくこの服なども好きなのでまんざらでもない。

「ああ、よろしく頼む」

「へぇ〜・・・アクセル・ハートね」

「何か問題が？」

「ううん、私の知り合いの子に同じようにハートを名前に入れている子がいたから」

と、マリーが言う。

「そうなのか」

「うん・・・っと、私もうすぐその子のデバイスの検診に行くんだった。リュウ君はこれから家に帰る？」

「家でこいつの慣らしをしたい」

「そっか、じゃあ気を付けて帰って・・・て、そんな年でもないか。じゃあね」

そう言って部屋を出て別れるマリーの書類にはミッドチルダの文字でＮＡＮＯＨＡ　ＴＡＫＡＭＡＣＨＩと書かれていた。

家に帰ると、スバルとギンガがリュウを迎える。

「にぃに、お帰り～」

「おかえり、お兄ちゃん」

「ああ、ただいま」

と、笑顔で答える。クイントが一般の地元の病院へ移ったこともあり、３人はいつも通り学校に通うようにとクイントから言われたため、一度家に戻っていた。とはいえクイントが襲撃されたという事実を知る以上リュウは病院に夜は張り込むつもりでもいる。だが管理局を通してクイントの記憶の混乱を襲撃者が知れば襲撃は消えるかもしれない。そんなことを思いながら、アクセル・ハートを手に取った

「行くぞ、アクセル」

『オーライ、マイマスター』

「アクセル・ハート、セットアップ」

『スタンバイレディ』

一応、魔法の式は現代ベルカ式である。三角形の魔法陣と共に、リュウの体をバリアジャケットが包み込む。紅いロングコートと、紅いズボン、手にはエンジンブレードと酷似したアクセルのデバイスモード、背中にはリュウが愛用するブランドの逆ハートのマークが刻まれている。庭で見学していた二人も目をキラキラさせている。

「にぃにかっこいい！」

スバルが大はしゃぎである。ギンガも目をキラキラさせ、ブンブンと頭を縦に振っている。それを少々気にしながらも、リュウはアクセルを構える。

「アクセル、今日は簡単な慣らしからだ・・・」

『オーライ、基礎的な魔力付加などを展開します』

魔力変換資質がないリュウは、魔力をただ乗せて戦わなければならない。今まで使っていた高温の霧を噴出するスチーム、電撃を帯びさせるエレクトリックは使用できない。ただ、ジェットのみ、リュウの設計を元にマリーが射撃をできるように作り出してある。

「ジェットだ」

『ジェットシュート』

『「ファイア！」』

目の前にあった丸太にジェットによって発射された魔力弾が突き刺さる。仮面ライダーの時の様に連続で出すこともできるし、魔力付加の切れ味も相当なものだ。それからしばらくリュウは基礎動作や魔力動作を確認して終了となる。

「モードリリース」

『オーライ』

元の姿に戻り、ため息をつく。デバイスを持つのが初めてで緊張していた

「ギンガ、スバル、そろそろ風呂に入ってこい。もうすぐ夕食だ」

「「は～い！」」

基本、１１歳のリュウがこういったゲンヤやクイントがいないときに料理を作る。といっても簡単な料理ばかりで、朝ゲンヤがご飯を炊いたりしているので何ら問題はない。夕食を済ませてから二人を寝かせて病院へと足を運ぶ。この日、病院での襲撃はなかった

一週間後

「ただいま～」

「「おかえりー！」」

クイントが退院し、家に戻ってきた。これによってリュウも負担がだいぶ減るようになる。

「リュウ、はいこれ」

と、リュウの手に紙が渡される

「・・・『嘱託魔導士試験要項』？これって」

「そうよ。退院した帰りにもらってきたの。リュウもデバイスもらったみたいだし、そろそろね・・・えーと、この子？デバイスって」

『初めまして、クイント・ナカジマ。私はアクセル・ハート、アクセルとお呼びください』

「うん、よろしくねアクセル」

と、笑顔を見せるクイント。一応退院してからもケアは続く。さらに今回の事件は部隊がクイント以外全滅ということで捜査は打ち切りとなり、クイントは退職することになった。これからは母親として過ごすのだという。

「これが筆記試験の過去問。後は実技があれば問題ないわ」

「わかった・・・後でやってみる」

そう言って問題集を受け取る。パラパラとめくると、まるで国家試験を受けるかのように難しい内容がずらりと並んでいる。警視として警察にいたリュウとしても、この手の問題はなかなか難しい。何しろ魔導士としての知識はこの世界の人並みにしかないのだから、簡単に言えば「小学生が高校の受験を受ける」ようなものなのである。

「大丈夫！お母さんが教えてあげるから！」

「あ、うん・・・」

正直、その大丈夫だというクイントを見て、ちょっと不安になってきたリュウであった。

筆記問題の勉強

「ここがこうなって・・・」

「あれ？リュウ、ここはこうじゃないの？」

「ここはこっちの方がやりやすい」

と、淡々と指摘するクイントだがリュウの方が正しかったりする。

実技の勉強

「とりあえず、射撃、近接ができれば問題はないわね。魔導士ランクとしては低いし・・・多分BかCくらいじゃない？とりあえず最大砲撃からやってみて。騎士だからそこまでの砲撃は出来ないと思うけど・・・」

「射撃か・・・アクセル、この間言ったのはできるか？」

『ハイ、カートリッジの消費数で切り替えは十分可能です』

「よし、マキシマムだ」

『オーライ！ロードカートリッジ、マキシマムドライブ』

「エースラッシャー！はあっ！」

仮面ライダーアクセルの必殺技同様のエースラッシャーが発動し、目の前の丸太が粉々に吹き飛んだ。

「な、なんてでたらめな威力・・・普通の魔導士より凄いわね」

「でもこれはカートリッジを二発消費するからいざという時しか使えない・・・やはりもっと効率を上げないとな」

『それに戦闘中では余裕もそうありません、マスター・・・もう少し体を前に出してですね』

と、これまたクイントのアドバイスなしに色々と特訓していた。

その日の夜

「うー・・・なんだかさみしいわぁ」

「何がだ」

お酒を飲みながらクイントがうなだれる。正直退院したばかりの人間がお酒を飲むというのはいかがなものかとも思うが、彼女の胃はどうやら鋼鉄らしくそんなダメージも受け付けない。

「リュウのことよー・・・せっかく嘱託魔導士の勉強教えてあげようと思ったのに、ほとんど一人でこなしちゃって・・・寂しいの」

「リュウには色々苦労をかけちまったからなぁ・・・たくましく育つと言えば、育っちまうのさ」

と、ゲンヤも言いながら酒を飲む

「それはそうだけどー・・・」

「ま、リュウは何でも一人で抱えちまうからな・・・きっと俺達を頼ってくれる日が来るさ」

「・・・そうね」

言いながらクイントは微笑み、酒を飲むことにした。自分の息子を信じて

時空管理局　本局

「へぇ～・・・リュウ・ナカジマ、１０８部隊ナカジマ三佐の息子さんねぇ」

と、その資料に目を通すのは時空管理局の提督、レティ・ロウランである。レティは言いながらお茶を飲み、資料を見つめる

「ええ、なんでも魔法学校の査察の時に目にとまったそうよ」

言いながら緑茶に砂糖をいれるのは同じく提督、リンディ・ハラオウンである

「何したの？この子」

「査察に来ていた局員の一人をぶちのめしたそうよ」

「ぶっ・・・！」

と、それを聞いて思わず紅茶を噴き出すレティ。まあ、そんな話を聞けば驚かざるを得ないだろう。局員に手を上げておいて何故不問として嘱託魔導士の候補となるのだろうか

「まあ、色々その局員に問題があったのよ」

「問題？」

「ロリコンだったの・・・それも重度の」

そう、実際にはリュウはヒーローである。局員はいわゆる「ロリータコンプレックス」であり、小学生を見た瞬間興奮してしまったらしい。幼女に襲いかかる直前でリュウが助けに入り、その局員をぶちのめしたのだという。

「アコース君の管轄で、仕事は優秀なんだけど、そういう性癖があるってことを知らなかったらしくて。彼の所ハードだし」

実際、査察官の補佐と言うことはそれなりにハードな仕事である。魔法関連の施設、管理局の管理する世界など、様々なところを回る。当然休みなどない。となれば当然、ストレスもたまってくる。己の

性癖も存分に満たせない。そして極め付けに仕事として魔法学校の初等科の査察である。この局員も我慢をすればいいものの、我慢できずにこうなったというわけである。

「アコース君が言っていたわ『その局員が襲う直前の背後から素晴らしいほどの容赦ない一撃』だそうよ」

「もしかして、そんな理由で嘱託魔導士の候補になったの？」

「いいえ、この子はもともと優秀よ。クラスは普通の魔導士生らしいけど、アコース君の見立てではほぼ修士生クラス・・・他に持っていかれる前にこっちで確保したほうがいいかも、ってことね。なかなか楽しみな子よ」

そう、このような優秀な人材ならば必ずや時空管理局では優秀な人材となり、有益になる。

「なるほどね・・・というか、リンディ？」

「何？」

「他の子のこともいいけど、自分のところの子を心配しなさいよ。試験落ちたんでしょ？フェイトちゃん」

「ああ・・・なのはちゃんが心配で心配で仕方がなかったらしくて。しょうがないのよ」

と、少々表情を暗くするリンディは、言いながらお茶を口にする。

「気長にあの子がしっかりするように見守るわ」

「そうね・・・」

リュウが嘱託魔導士の試験を受けるまで、後一ヶ月

第６話　誕生のＡ／加速の心（後書き）

というわけで、リュウの新デバイスのアクセルハートでした。
とりあえずリュウの詳細を次回に書きますんで、それで理解してくれると嬉しいです。他にもいい案があったらお願いします。

ちなみにアクセルハートの待機状態は神埼先生の意見を頂きました。
ありがとうございます

では、また次回
次回は「加速の記憶Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ」となります

外伝　加速の記憶Ｗｉｋｉｐｅｄｅｉａ（前書き）

というわけで、リュウの詳しいデータです

結構長くなりましたが、頑張って書きました。イメージがわきにくいと思うので今度絵を書いてみようかなと思います

もし「こんなのどう？」というのがあれば是非とも書いてくれると嬉しいですでわｗｗ

外伝　加速の記憶Ｗｉｋｉｐｅｄｅｉａ

リュウのデータ

魔力ランク　Ａ
魔力色　紅
デバイス待機状態　前世で身に着けていたネックレス
デバイス起動状態　エンジンブレード

アクセルフォーム
戦闘能力　Ａ＋
耐久性　Ｂ
速度　Ａ－
最大攻撃　ＳＳ

飛行能力　なし（ただしウィングロード使用可能）

技一覧
カートリッジロード一発
ジェットシュート（ジェット）　攻撃ランクＢ？
仮面ライダーアクセルのジェットと酷似したスフィアの発射。最大９発まで出現させることができる。ただし誘導性能が低く、兼制に使われることが多い。威力もさほど大きいわけではない

スチームファン（スチーム）　攻撃ランクＣ
同じくアクセルのスチームで、人工魔力変換機構によって使用されることで噴出される霧状の魔力に熱を持って発射される。氷結などを持ち合わせた魔導士、騎士には有効だが、そこまで強力なもので

はない

エレクトリックスラッシュ（エレクトリック）　攻撃ランクＡ
アクセルのエレクトリック。同じく人工魔力変換機構によって電撃を帯びた魔力で相手を斬りつけることができる。威力も高く、破壊力は抜群で並大抵の魔導士では防ぐことは不可能となっている。

フレイムスラッシュ　攻撃ランクＢ
アクセルのエンジンメモリ挿入時に発動するものを応用した人工魔力変換機構によって炎を帯びた一撃を相手に喰らわせることができる。魔力ランクとしてもエレクトリックに劣るものの、普通の魔導士でもこれを受けるのは相当辛い

カートリッジロード二発
エースラッシャー　攻撃ランクＡＡ－
アクセルのエースラッシャーと同じもの。アクセルに若干劣るものの、非常に攻撃力は高い。攻撃性能的にも必殺技の系統に入る。

ダイナミックエース　攻撃ランク　Ａ＋
アクセルのダイナミックエースで、攻撃性能も高い。やはり本家に劣るところはあるが、魔導士相手ならばその効力は十分に発揮することができる。

カートリッジロード三発
アクセルグランツァー（封印）　攻撃ランクＳＳ
アクセルのアクセルグランツァー。アクセルドライバーではなくアクセル・ハートから魔力供給が足に宿り、そのまま回し蹴りを放つというもの。非常に攻撃力が高く、どんな敵も一撃で粉砕することができる。ただし、１１歳の段階ではリュウに多大な負担をかけるため、リュウとマリー同意でプロテクトが施されている

カートリッジなし
ウィングロード
スバル、ギンガも使用する先天系魔法のウィングロード。ノーヴェなどが使用していることから元はクイントが使っているものと分かる。クイントの使用データをマリーがアクセル・ハートに組み込んでいる。攻撃性能はないが、これによってリュウの攻撃範囲は非常に広くなった

概要
仮面ライダーアクセルを見立てて作られたバリアジャケットとエンジンブレードを兼ね備えている状態。リュウの基本戦闘スタイルである。エンジンブレードなど仮面ライダーアクセルの物を作りなおして使用しているため性能は非常に高く、普通のデバイスより群を抜いている。しかしながら仮面ライダーアクセルよりも性能は劣り気味で、エンジンブレードの変わりにカートリッジシステムを組みこんだため威力は少々低い。カートリッジはリボルバー式を採用しており、ＦＦ？のガンブレードをイメージすると少しわかりやすいかもしれない。他にも人工魔力変換機構を搭載しており、人工的に「炎熱」「電撃」を使用することが可能で、これによってエレクトリックやスチームを補っている

トライアルフォーム（封印）
戦闘能力　Ａ＋＋
耐久性　Ｃ
速度　ＳＳ－
最大攻撃　Ａ

技一覧

カートリッジ二発
マシンガンスラッシャー　攻撃ランク　Ａ－
アクセルトライアルのマシンガンスラッシャーである。威力はやはり劣るものの、攻撃力は十分で、戦いでも真価を発揮している。

カートリッジ三発
マシンガンスパイク　攻撃ランク　Ａ
同じくアクセルトライアルのマシンガンスパイクである。条件もやはり同じ１０秒間しかそれを発動することはできない

仮面ライダーアクセルトライアルを模したスピード特化型の戦闘スタイル。攻撃性能や能力はやはり本家に劣ってはいるが、性能は非常に高く、スピードはフェイトのブリッツアクションを抜く速さを兼ね備えている。カートリッジを使用してもやはり必殺技の二つは１０秒間が限界であり、負荷はアクセルトライアルの時よりも大きい。

その他
リュウのバトルスタイル
基本的にアクセル・ハートを使った剣術が目立つが、格闘技なども問題なくこなす。アクセル・ハートを付属の鞘に納刀することで魔力を体に貼りめぐらせて身体能力を高めることができる。クイント直伝のストライクアーツで敵を倒すことも可能。アクセルグランツァーなども放つことができるが１１歳の状態のリュウでは使用が不可能

人工魔力変換機構
※注意：この物語のオリジナルです
魔力を生まれつきの変換資質でなく人工的に作り出す機構のこと。
管理局ではデュランダルなどといったものが代表例としてあげられ

るが、これには魔力の素質が高くないと適合できないということであまり良い傾向ではなかったのだが、リュウの発想でエンジンメモリを挿入するのと同じようにカートリッジをロードすることで、魔力機構を制御して人工的に変換資質を引き起こすシステムが確立され、プログラムとして開発された。原案はリュウだが、実際にプログラムして開発したのはマリーである。一応アクセル・ハートには導入されているが、実験段階であり不備が多いことから量産型デバイスに入れることはまだされていない。

外伝　加速の記憶Ｗｉｋｉｐｅｄｅｉａ（後書き）

次回は本編です

外伝「本編予告」（前書き）

本編と言っておきながら、ＳｔｒｉｋｅｒＳの予告です

いつ頃ＳｔｒｉｋｅｒＳ編に入るのかとメッセが来たので、予告と言うことで書きました。まあ、お楽しみだと思ってみてください。

次回こそ、本編書きますから

外伝「本編予告」

本編予告

それは、加速の記憶を持った男の物語

「なあ、リュウ・・・ちょいと俺の頼みを聞いてくれねぇか」

父、ゲンヤの依頼・・・

「リュウ・ナカジマ、機動六課へ着任する」

「にぃに、一緒に頑張ろっ！」

「これが、メモリを使うべき時なのか・・・？」

それは照井竜ことリュウ・ナカジマの、新たなる物語

「ひ、久しぶり・・・だよね、リュウ君」

「・・・ああ、そうだな。高町なのは一等空尉」

願った再会と、願わなかった再会・・・

「貴様、何故我々に話そうとしない？」

「俺はこの生涯で一度でも・・・管理局の人間は家族以外信用していない」

「それは、うちらも信用してないと取ってええんか？」

「好きに考えてくださって結構」

ぶつかり合う機動六課とリュウ。そしてリュウの１９年の想い、信念・・・そして、その本心

「自分の道は自分で決めるものだ・・・復讐を止める権利は誰にもない」

「どうして分かってくれないの！？どうして邪魔をするの！？」

「お前に、人の道を縛ることはできない。俺が相手になろう」

『Ａｃｃｅｌ！』

「にぃにっ！駄目だよそれは・・・」

「変・・・身っ！」

激突する、不屈の心と加速の記憶

「お兄さんはだあれ？」

「俺は・・・そうだな、ただの魔導士だ」

加速と少女の出会い・・・

「君が欲しい・・・っ！」

「十数年前の借り、変えさせてもらおう」

それは無限の欲望とその作品達・・・己の欲望を満たすための戦い

「世界は我々のものだ」

「世界の私物化だと！？許されるものではないっ！それがどんな理由であろうとっ！」

暗躍する、世界の支配を目論む影・・・

「さあ、地獄を楽しみな・・・」

「さあ・・・・・・お前の罪を、数えろ」

その裏にいる、全ての黒幕と、あの男の真意

「リュウ・・・貴方のを呼び寄せた理由がコレよ」

シュラウドの思惑

そして・・・

「にぃにぃぃっ！」

「お兄ちゃんっ・・・いやあぁぁぁっ！」

加速の記憶を持つ、全てを振り切る男の最後の戦い

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～加速の記憶～

ＳｔｒｉｋｅｒＳ本編・・・そのうち更新っ！

「さあ、振り切るぜ」

……ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

外伝「本編予告」（後書き）

というわけで、Ｓｔｒｉｋｅｓ編をお楽しみに。後数話でなる予定です

ではっ！

第７話　試練のＲ／金色の少女との激闘（前書き）

というわけで試験編です。これ書いたの２月１８日の２２時なのにもういつの間にか次の日の２時過ぎ・・・やばい、これでは神の力を継ぐ者の方の更新ができないｏｒｚ

とりあえずこれからもがんばります。
あ、この小説にもＯＰとＥＤを考えています。できれば仮面ライダーと関係ない曲で。挿入歌だと面白みがないので
沢山の応募待ってます！

あ、あと、今回は補足がリュウのことであるので見てください

第7話　試練のR／金色の少女との激闘

試験日当日、リュウはいつも通りに起き、そして試験会場へと向かった。現在は時空管理局本局へと訪れている。

『マスター、大丈夫ですか？』

「俺が大丈夫じゃないように見えるのか？アクセル」

『いえ・・・なんというか、不機嫌なご様子ですから』

先ほどからあまり良い気分でないように見えるリュウ。本局に来てからは苛立ったような表情である。

「・・・気にするな」

『はい、マスター』

「リュウ・ナカジマ君」

そんな会話の中、女性局員がリュウの目の前に現れた

「・・・はい」

「これより貴方の筆記試験を行います。デバイス、記録器具は預けてくださいね」

「了解した」

そういってアクセルと携帯端末を渡して席に着いた。

「では、試験開始」

サラサラとリュウはその問題を解いていく。なんの問題もない。母が教えてくれたところや、過去の問題集をやったリュウにとって問題な物はない。こうして５０分が経って、試験が終わった。

「では、試験終了となります」

『マスター、いかがでした？』

「問題ない・・・」

「次に第二、第三試験になりますので、移動してください」

こうして、リュウは指示に従い、転送ポートで転移をした。

訓練場　第２訓練室

「次に、詠唱、もしくは攻撃によるターゲットの撃破を試験といたします。どちらですか？」

「・・・砲撃」

「ではターゲットを出します。２０分以内に破壊してください」

この配慮については、呪文詠唱を得意としない騎士などへの配慮である。詠唱などを唱える魔導士に対し、一撃を武器で補う騎士には

詠唱は必要ないし得意な物ではない。リュウも騎士に近いものがあるので、攻撃を見るのである。無論先ほど言ったが騎士は武器が決め手となる。ターゲットは巨大な白い盾だ。これを破壊するかしないかは合否の大きな分かれ目でもある。女性局員が転移してから開始の合図が鳴る。リュウは静かにアクセルを持った。

「アクセル・ハート、セットアップ」

『オーライ、マイマスター』

真紅のバリアジャケットが装備され、エンジンブレードを手に取った。

『マスター、いかがいたしますか？』

「・・・エースラッシャーで十分だ」

『オーライ、ロードカートリッジ　マキシマムドライブ』

カートリッジが二発ロードされ、エンジンブレードが熱を持った。巨大な熱気が周囲を包み込んだ。

「エースラッシャー！」

『ｆｉｒｅ』

巨大なＡの砲撃が白い盾に向かって行く。Ａが激突して巨大な爆発が起きるが、破壊にまでは至らない。

「・・・っち」

『マスター、もう一度やりますか？』

「いや・・・ウィングロードだ」

『ウィングロード』

アクセルの声と共に、紅いウィングロードが白い盾に向かって展開される。

「次はダイナミックエースだ・・・行くぞッ！」

そう言いながらリュウは駆け出し、アクセルもそれに答える。

『オーライ、ロードカートリッジ　マキシマムドライブ』

またも同じようにロードを二発行うと、そのままダイナミックエースを叩きこんだ。

「はあっ！」

Aの形に剣閃が入る。それによってヒビが入り、音を立てて白い盾は割れた。2発のカートリッジを二回消費、つまり4つのカートリッジを消費しないといけないこの白い盾は相当な魔力と力がないと破ることができないのだろう

『試験終了です。3次試験まで2時間の休憩を取りますので、昼食などを取って待機してください』

「・・・了解」

こうして、リュウの二次試験は終了した

モニタールーム

そこではリュウの試験を監視する場所である。そこにいるのは提督レティ・ローランと、統括のリンディ・ハラオウンである。

「あらあら、すごいわねぇ」

「まったくね、ナカジマ家って三佐は確か魔力ないんでしょ？あれだけのセンスを持った子が生まれるなんて奇跡ね・・・」

そう言いながらリンディに渡されたお茶を飲むレティ

「ええ・・・あの盾、結構丈夫なんだけど・・・」

と、崩れた盾を見るリンディ。実を言えばリュウが破壊した盾はなかなか壊れない構造である。どれくらいかと言うと、Ｓランクの攻撃は耐えうるものだ。しかしながらＡＡランク程度の攻撃でヒビを入れたリュウは、魔力の他、筋力でそれを補ったということになる。

「今のところ合格ラインは余裕・・・ふふっ、私の部下にもらおうかしら？」

「あらレティ・・・自分の息子はどうしたの？」

「ああ、今は研修中・・・あの子は戦闘と言うよりデータ解析とかの方が得意だし」

「なるほどね・・・でも、どうしてかしら」

と、リンディが不思議そうにリュウを見る

「何が？」

「なんだか・・・全然嬉しそうじゃないわ、彼」

そう、かなりの実力と認められていいはずである盾の破壊。それは事前に説明で聞いているはずである。しかも、先ほどからどうもイラついたような表情を絶やしていない。それがリンディには良くわからない。

「何かしらね・・・彼がここまでイラつく理由は」

戻って訓練場

「・・・ふう」

クイントに作ってもらった弁当を食べ、お茶を飲んで一息つくリュウ。だが、言葉とは裏腹にあまり良い表情ではない。

『あの、マスター？』

「なんだ」

『本当にどうしました？デバイスの私が言うのもなんですが・・・なんというか、少し表情が恐ろしいです』

と、アクセルが言う。まあ、確かにここに来てからその表情のリュウを気にするのは仕方がないだろう。

「（・・・先ほどから誰かに見張られている）」

『（・・・本当ですか？）』

「（ああ、だから不快なんだ）」

『（なるほど・・・）』

と、アクセルは念話で納得する。アクセルは以前からリュウが管理局を嫌っているのも知っているし、今回の試験も親が進めたから受けたもので、それだからこそ嫌々受けているからだと思っていたのだが、違う・・・誰かがリュウを監視している。リュウはそれが気に入らないのだ。

『これより第三次試験を開始します。リュウ・ナカジマ君は所定の位置に着いてください』

「了解」

そう言って立ち上がると、再びセットアップして相手を待つ。第三次試験は魔導士相手の実戦試験である。リュウの魔力ランクはAランク。高いものだが、そこまで異常というわけでもない。しかし管理局は人手不足である。Aランクの相手に対して戦う相手など限られてくる。ドアが開き、入ってきたのは金髪の少女。黒いリボンでツインテールに結び、マントを付けた少女である。

「フェイト・T・ハラオウンです。初めまして」

「・・・リュウ・ナカジマだ。よろしく頼む」

そう言ってエンジンブレードを構える。フェイトと名乗る少女も同じように武器を構える。見たところデバイスとしては魔導士と分かる。

『これより嘱託魔導士試験を開始します。試合、開始！』

「バルディッシュ」

『イエッサー』

杖が反応し、フェイトの周囲に金色の魔力弾が宙に現れる。

「プラズマランサー」

『ｆｉｒｅ』

「アクセル」

『オーライ、ジェットシュート』

同じく、紅い魔力弾とエンジンブレードの先に魔力弾が宿った。

「ジェット」

『ジェットシュート、ショット』

魔力弾同士がぶつかり合い、相殺される。撃ち漏れた魔力弾がリュウに向かうが、リュウは問題なくそれをエンジンブレードで斬り払った。

「・・・やるね、バルディッシュ」

『ハーケンフォーム』

杖が鎌の形状になり変わり、そこから金色の魔力刃が姿を現した。それは正真正銘、死神の鎌ともいえる。そう、フェイトは接近戦へと切り替える

「はあっ！」

「・・・・・・！」

リュウは振り下ろされたバルディッシュをエンジンブレードで受け止める。そこからそれを横へいなすと、一閃を放った。だがそれをフェイトは反応して受け止める。そして再び距離が取られ、エンジンブレードの刃とフェイトのハーケンがぶつかり合う。このままでは決着が付かないと判断したフェイトはさらに距離を取ってバルディッシュを振りかぶる。

（なんだ？この距離から？）

そうリュウが思った瞬間、フェイトはそれを振った。

「ハーケンセイバー！」

フェイトの言葉と共に、その金色の魔力刃が飛び、リュウに向かっ

て行く

「っ・・・！アクセル！」

『ロードカートリッジ、スチームファン』

スチームファンによって辺りが熱のある霧に包まれる。それによってハーケンセイバーは標的を失い、霧の中で消滅する。

「なっ！？」

そこでフェイトは周囲を探す。魔力反応もこの霧でジャミングされている。熱の霧でそこまで熱くないものの、集中力を奪われる。すると、音が聞こえた。『ヒュルルルル・・・』そう、それは何かが落下する音。そこでフェイトはようやく対象物が接近していることを

「はああっ！」

「っく！」

そう、その音の正体はウィングロードで空中に移動し、急降下してきたリュウだった。その重力と加速に乗ったリュウはその勢いと共にエンジンブレードを振り下ろした。それを受け止めるも、それに押されるフェイト。それを勝機と見たリュウは一気にたたみかける。

「はあああああっ！」

「ぐぅっ！」

一方、防戦一方となるフェイト。フェイトはそこから距離を取るた

めに空中へと飛んだ。

「っ！」

空振りに終わった気合の一戦が外れて、リュウはカートリッジを入れ直した。

再びモニタールーム

「すごいわね」

「ええ・・・」

と、リンディとレティが呟いた。フェイトはリンディの娘であり、それなりの力があるのも自覚している。執務官の試験に落ちたからと言っても、その魔力量や戦闘能力はエース級だ。管理局に入局してから数年もたっているため、その能力だって上がっているはずだ。だが現状どうだろうか？フェイトは試験管に今回たまたまいただけとはいえ抜擢され、その同い年の少年と戦っている。そして、その少年リュウはフェイトを押しているのだ

「これは・・・相当優秀な人材よね」

「アコース君の目は間違わないわねぇ・・・」

と、驚くレティと感心するリンディ。リンディに限ってはどっちに感心しているのか分からないが、画面を見ているので恐らくリュウだろう。そんな二人とは少し離れた場所で、ピンク色の髪の女性がその映像を見ていた。その女性は先ほど第一試験、そして第二試験

で場所をリュウに案内した女性局員である。

「・・・ふふふ、凄いわね」

レティやリンディ、他の局員たちに聞こえない声で静かに、そして人を魅了するような甘い声だった。

「これが、トーレを倒した子・・・食べてしまいたい。ただ、ドクターが望む子ですもの・・・我慢しなくちゃ。でも、味見くらい良いわよね？ふふ、ふふふ・・・」

女性局員は静かにそう言ってからそこから姿を消した。

訓練場

試合も大詰めになった。それぞれ残っているカートリッジも少ない。

「バルディッシュ」

『ロードカートリッジ』

（・・・そろそろ、相手も限界か）

リュウはそう思いながら残りのカートリッジを見る。残り2発。そろそろ決めなければ勝ち目はない。基本的に消費が激しいリュウの技。スチームやエレクトリックにも一発ずつ使わなければいけない。次はない

「アクセル」

『オーライ、フルロードカートリッジ　マキシマムドライブ』
最後のカートリッジをロードし、構えを取る。構えはエースラッシャーだ。
「サンダー・・・スマッシャァァ！！」
「エースラッシャー！」
金色の砲撃、そして紅いＡがぶつかり合い、爆発が起きる。それによって煙が立ち上り、フェイトは衝撃で空中から地面に叩きつけられる。魔力ももう残っていない。つまり障壁で地面への落下の衝撃が止まらない。フェイトは覚悟を決めて目をつむった。フェイトに衝撃が来る・・・はずであった
「え・・・？」
だが、いつまでたっても来ない。その衝撃。むしろ温かいものがある。
「大丈夫か？」
そこにいたのはリュウだった。爆発によってウィングロードを展開して、走ったのである。そのウィングロードによって格段的にスピードを得たリュウはフェイトを抱えていた。
「あ、うん・・・」
「試験は終了だそうだ。俺はこれで」

そういってフェイトを残し、リュウは訓練場を後にした。そんな取り残されたフェイトは顔を紅くし、そんなリュウを見つめていた。

訓練が終わり、リュウは人気のない廊下を歩いていた。そこへ、ピンク色の髪の局員が笑顔で近づいてきた。

「お疲れさまでした。もうすぐ試験結果が出ますので、控室でお待ちください」

「・・・そうさせてもらおう」

そういってリュウは女性局員を通り過ぎる。数歩歩いてから、リュウは足を止めた。

「・・・お前、何者だ？」

「はい？」

と、女性局員が答える。だが、リュウは手にエンジンブレードだけを手にしていた。

「俺がここに来る前から、監視していたな？一体何者だ？」

「あ、あの・・・何の事だか・・・」

と、オロオロする女性局員。だが、リュウはそれに惑わされない。

「そう言うなら、その手の後ろで組んで隠す武器はなんだ？」

女性の背中にはなにか刃物が爪の様な形になったグローブがあった。振り向かないリュウの後ろで、先ほどとは違う口調が聞こえる。

「あらぁ・・・気づいてたの？」

「別に確証があったわけじゃない。だが俺の視界に見える範囲にいつも貴様がいた。俺は見られるのが嫌いだ」

「うふふ・・・聞いてた以上ね、リュウ・ナカジマ」

「何者だ？俺の質問に答えろ」

そう言った瞬間、リュウの身体に女性局員がもたれかかる。リュウはそれに反応してすぐさま距離を取った。そこにいたのは先ほどの大人しそうな局員ではない。金髪で妖艶な女性

「あら・・・ちょっと触っただけじゃない」

「貴様・・・」

「紹介が遅れたわ・・・私の名前はドゥーエ。貴方の妹と同じ、戦闘機人よ」

ドゥーエは妖艶な笑みを見せてそう言った。

第7話　試練のR／金色の少女との激闘（後書き）

というわけでフェイトとの戦闘、そしてドゥーエとの邂逅！どんどん本編に近づきます！
スバルとなのはの出会いはほとんど同じなので簡略しますが、次は多分ティアナが出てきます。ティアナファンお待たせと言う感じです。バイク仲間？って感じなので・・・（笑）

で、訂正と言うのが、ウィングロードです。

ウィングロード
クイントも使う先天系魔法。これに関してはリュウの場合ローラーがない代わりにその脚力がウィングロード上のみ1．5倍の脚力を得る。

ということでした。別にフェイトフラグは経ってませんが、後々立たせるかちょっと迷っています。

ではまたｗｗ

第8話　誘惑のD／恋心とお酒（前書き）

夜の9時から初めて1時過ぎ・・・もうちょっとペース上げて頑張ろう・・・

と思います。それではどうぞ

第8話　誘惑のD／恋心とお酒

「貴方の妹と同じ、戦闘機人よ」

「・・・なんだと」

突然の告白に、リュウは目を見開き、ドゥーエを見る。

「うふふ、どう？私のこと・・・もっと知りたくないかしら？」

「・・・・・・・・・」

知る意味が違えど、リュウは心当たりがいくつかある。ここで戦闘機人と名乗るこの女性が接触をした理由。かつて一度この世界では「仮面ライダーアクセル」として戦っている。それを見ているのは謎の女性・・・記憶の限りでは「トーレ」と呼ばれていた。意味はもじっているがイタリア語で「3」という数字を示している、そしてドゥーエは「2」と現すのが分かる。つまりこの女性は母のクイント達を襲撃した連中の一味なのだ。あの時トーレを倒せなかったのも、彼女が戦闘訓練を終えて、強化されている戦闘機人であるというのならば納得もいく

「何故俺に接触した」

「貴方に興味を持ったからよ」

「興味・・・？」

エンジンブレードを構えながらも、怪訝な表情でドゥーエを見る。

「その様子からして、私のことについては心当たりがあるようね？」

「俺の母、そしてそれに所属する部隊を襲撃した連中の仲間だな」

「・・・察しがいいわね」

その言葉を聞いた瞬間、エンジンブレードが動く。

――許せない

そんな感情が、頭をよぎる。だがここで剣をふるっても意味がない。ここで奮っても何も聞きだすことはできないし、それで母の怪我への償いになるわけでもない。

「そんな殺気立たないで・・・私は別に貴方をからかいに来たわけでも、殺されに来たわけでもないのだから」

「なら「言ったでしょう？貴方に興味を持ったと・・・」・・・」

ドゥーエは言いながら、武器をしまった。

「貴方はもともと私達の一味の・・・そうね、ボスと呼ばれる人間が興味を持っていた。科学者だから・・・解剖でもしてみたいんでしょうね。私もあの人に作られ、そして今ここにいる。だからこそ、命令で貴方を見るように言われたわ」

そう、つまり今まで見ていた正体、リュウが不快だと思った視線の正体はドゥーエのものであるということがわかった。だが、それならば腑に落ちない点がある。

「ならばなぜ接触してきた。データを見て解析して送れば済むことだ。興味があろうとなかろうと、任務ならそれでおしまいだろう」

「もう、頭が固い男ね。つまり・・・」

言いながら一歩一歩、リュウに近づくドゥーエ。間違えればリュウが切りかかるかもしれないというのに、それに構わず進んでくる。

「私自身が、任務に関係なく興味を持ったということよ♪」

「・・・・・信用できん」

「ま、そうでしょうね。じゃあコレあげたら信用してくれるかしら？」

そう言ってドゥーエは一枚のディスクを渡した。ＭＥＭＯの欄には「ｔｙｐｅ　ｚｅｒｏ&ａｍｐ；　ｔｙｐｅ　ｚｅｒｏ　ｓｅｃｏｎｄ」と書かれたものである。

「これは？」

「貴方の妹達の設計データ」

「！？」

その言葉に思わず驚き、ドゥーエを見る。ドゥーエはそんなリュウを見て笑っていた。

「うふふ、別にこれを私が持っているからと言って『生みの親』が

私達の親とも限らないわ。現にそれは私が最近見つけたものだし」

「証拠は？」

「ないわ」

きっぱりと言う所から見て、本当にないし、嘘を言っていない。嘘をつく人間と言うのは、大体しぐさを変えたり、何かしら反応をする。だが、ドゥーエはまったくと言っていいほど反応がないのだ。

「・・・なら、これをどこで「ダーメ、教えてあげない」何？」

「もし聞きたいなら、私のものになるっていう条件はどう？」

妖艶な笑みを浮かべ、リュウの顔を触るドゥーエだが、リュウはそれを払いのける。

「断る」

「なら教えてあげない」

そう言って顔を膨らませ、ソッポを向くドゥーエはまるで子供である。そんな行動に、リュウは覚えがあった。

「・・・・・お前、目覚めてからそんなに経ってないな？」

「え？」

そう、ギンガ、スバルとも、施設から助け出され家で生活していた時、身体と中身が全くと言っていいほど合っていなかった。スバル

に限っては現在でもまだ言葉がはっきりしていない。つまり、ドゥーエのこの一連の動作は大人のように見えても年齢相応にあるわけではなく、まだ子供の部分があるということだ。

「そ、そんなこと・・・」

「見たところ、お前は２０前後の肉体年齢を持っているようだが、中身は俺と変わらないくらいの子供だ。その証拠に、何故か知らんがボタンの掛け方が間違っている」

「え！？あ、嘘！？」

最早これでは自分よりも脳内年齢が低いのではと思うリュウはため息をついた。

「話はこれで終わりか？」

「あ、あら・・・私を殺さないの？」

「ボタンをかけ間違えるような情けない女など、殺す気にもならない」

そう言ってリュウは立ち去る。

「あ、ちょっと！」

「・・・」

そのままリュウは黙ってそこを立ち去って行った。そこに残ったのはドゥーエただ一人。

「・・・変な子供、ううん、男ね」

確かに自分は目覚めてから日が少しだけ薄い。というのも他の妹よりもデータを収集することでアジトのラボで眠り、データを引き出されるという作業によって「成長」が少ないのだ。それによって少しだけ子供の様な一面が残ってしまっている。隠していても、実際に戦闘機人の世話を長くしているリュウにとっては見抜いてしまっていた。

「でも、ゾクゾクしちゃう」

ドゥーエはそう言ってそこから立ち去って行った。

時空管理局　本局　第1会議室

そこにリュウ、リンディ、フェイト、レティがいた。

「試験の結果、貴方は満点です。おめでとう。これで貴方は晴れて嘱託魔導士に任命されます」

そう言ってリンディが任名状を渡した。

「ありがとうございます」

「では、これから具体的なことを言うわね。まず貴方は嘱託魔導士であり、管理局の要請を受けることになる」

「・・・局員でない以上、それは絶対ではありませんよね？」

リュウの言葉に、レティが少し黙るが、すかさずリンディがフォローする

「で、でも・・・極力協力してねってことだから」

「そうですか」

と、リュウが言うと、レティが続ける

「次に、任務についても極秘とし、一般の人間に言うことはしないようにしてください。嘱託魔導士であることは構いませんが、任務内容は全て機密となっています」

まあ、管理局の任務は時々ハードなものもある。そのため全て機密とされ、このような扱いになる

「説明は以上です。質問は？」

「ありません」

「わかりました、これで任命式は終わりです。解散になるので帰宅して結構ですよ」

「失礼します」

そう言ってリュウはその場を立ち去ろうとする。だが、そこで呼びとめられる声がかかる。

「あ、リュウ君？」

「はい、なんでしょうリンディ統括」

「あなた、しばらく嘱託魔導士として活動したら・・・正規の職員として働かない？」

リンディのこの勧誘にはいくつか理由がある。まず、このような優秀な人材はもっとちゃんとした場所で働かせるべきである。それにより、管理局に利益をもたらすことになるからだ。次に、このような人材、手放せば時空管理局にとっては強大な「脅威」となるのだ。だからこそここで縛りつけてしまう必要がある。あるのだが・・・

「結構です」

「ど、どうしてかしら？」

「興味ありません」

バッサリと切り捨てるリュウ。まあ、リュウ自身まったくと言っていいほど管理局を信頼していないし、ドゥーエの件ではっきりしたが、管理局に何か黒い部分があることは理解できた。これにより「クイントを襲撃したのは管理局の差し金の可能性がある」という法則が自動的に出来上がるのである。

「ど、どうして？素晴らしい力を持ってるのに・・・職も安定できるわよ？」

「興味のない職についても面白くはありません。この試験も親の推薦であり、自己を高めるのが目的という意味で嘱託魔導士としての資格を頂きました。それ以外に興味はありませんので、失礼します」

そう言ってリュウは部屋を後にした。

外を出て、転送ポートへと向かうリュウ。試験が終わればこの場所にはもう用はない。後は

『マスター、よろしかったんですか？』

「何がだ？」

『先ほどの件です。確かに管理局には黒い部分の噂も絶えませんし、先ほどの件もあります。しかし管理局ほど安定した職と言うのはありませんよ？』

アクセルの言うとおり、世界を股にかけて働く時空管理局と言う職は安定したものだ。高額の給料ももらえる。

「アクセル、俺は「あのっ！」・・・？」

転送ポートの入り口まで来てから、リュウは呼びとめられた。そこにいたのは、先ほどの少女、フェイトであった。

「何か？」

「あの、えっと・・・その、助けていただいて、ありがとうございました」

「お礼なら、先ほど聞きましたが・・・？」

と、リュウが言うと、フェイトは少しオロオロする。正直、この場面でフェイトを見れば、大抵の男性は可愛いと思うだろうが、リュウは特にそう言った反応を見せない。

「あの、いえ・・・そうじゃなくてその、あ、あの・・・」

「言いたいことがあるのならはっきり言っていただきたいが・・・」

と、リュウは少し苛立ちを覚える。顔を紅くして、言葉をはっきり言わない。まあ、『鈍い』リュウにはそれがどういう意味なのかまったくと言っていいほど分からないだろう。

「その、何と言うか・・・管理局・・・一緒に、頑張りませんか？」

「・・・は？」

思わず、そんな言葉が出てしまった。あれだけ貯めておいて結局それなのかと、怒りたくもなるだろう

『（マスター、抑えて、抑えて）』

と、アクセルが言わなければキレていたに違いない。

「えと、母さんもああ言っていたし、私その・・・この前試験落ちちゃいましたけど、執務官を目指しているんです。それでその、一緒に目指せたらなって・・・」

母さん・・・というのリンディ統括のことだ。だが、リュウの答えは決まっていた

「断る」

この二文字でぶった切った。

「はうっ・・・で、でも・・・あれだけ才能があるんだし・・・」

「はっきり言って俺は管理局と言うのがあまり好きじゃない。好きじゃない職場で働こうとは思わない。嘱託魔導士としての資格は俺自身の目的のためだ。勘違いして欲しくない」

「目的・・・？」

「話はそれだけか？なら失礼する」

そう言ってリュウは転送ポートへ入って行った。ポツンと、フェイトはその場に取り残された。

「・・・嫌われちゃったかな、バルディッシュ」

『そんなことありませんよ、彼もきっとわかってくれるでしょう』

自分の愛機の励ましに、フェイトは笑顔になる。

「ありがとう、バルディッシュ」

この時フェイトはまだ知らない。数年後、再び彼と出会うことを。そしてそれによって波乱が巻き起こることを、フェイトはまだ知らない

ナカジマ家

「合格おめでとう～！」

「「おめでとー！」」

今日はパーティーである。当然リュウの合格祝いだ。

「それにしても本当に合格するなんてねぇ・・・母さん嬉しいっ！」

「あ、あはは・・・」

「さあ！今日は飲むわよ～！リュウも飲みなさい！」

と、クイントが酒を押し付ける。

「クイント、未成年に酒を勧めるな」

やれやれと言った感じでゲンヤがため息をつく

「いいわよ今日くらい！」

「ねえおかーさん、それなあに？」

「これ？これはねぇ、おいしいジュースよ」

そんなクイントの言葉に、スバルが目をキラキラと光らせた。

「スバルも飲むー！」

「あたしも飲みたいっ！」
スバルとギンガが言いだし、クイントがコップにそれを注いだ。
「いいわよっ！どんどん飲みなさい！」
「母さんっ！」
リュウとゲンヤは必死でそれを止める。そんな騒がしい夕食・・・
だが、こんな調子で酒が周囲に散乱すれば当然大変なことになる。

―――３０分後

「おにいちゃんどーん！」
「どーん！」
と、いきなりギンガとスバルがリュウを押し倒した。
「スバル！？ギンガ！どうした！」
「にーに、だいすきー！」
「好き～・・・」
顔から耳まで赤くしたスバルとギンガが笑いながら押し倒す。どうやら完全に酒がまわっているようだ。
「いいわよ！二人とも！やっちゃいなさい！」

「母さん！あれほど言ったのに酒を飲ませたな！」

「にぃに、スバルとギン姉どっちが好き？」

「あたしだよね～おにーちゃん！」

と、ギンガがすり寄ってくる。だが、それに負けじとスバルも同じようにすり寄る

「ちがうもん！にぃにはスバルがすきなのー！」

「ちょ、待て二人とも！落ちつけ！」

「お兄ちゃんどっち！？スバルとあたし、どっちが好き！？」

と、迫るギンガ。

「お、俺に質問を・・・「にぃに、スバルのこと嫌いなんだ・・・」なっ！？」

言葉を遮られ、スバルが涙目になる。決壊寸前の表情は過去に何度か体験している。学校に行くときにリュウだけ弁当だけの日や、リュウが勉強している時に邪魔をしてリュウが怒った時などである。ギンガも同様にスバルとほぼ同じ状態にあった。

「お兄ちゃん、あたしのこと嫌いなんだ・・・」

「え、いや・・・べ、別に嫌いじゃない！だから「じゃあ好き？」うわっ！」

さらに抱きつかれ、身動きできないリュウ。ゲンヤは酒に潰れてノックダウン。クイントは酒によって遠くで「頑張って二人とも！」などとエールを送っている。このやりとりはスバルとギンガの二人に酒が回って寝るまで続けられたという

第８話　誘惑のＤ／恋心とお酒（後書き）

というわけで、皆さん！お酒は２０歳になってからですよ！

それでわｗｗ

第9話　決意のS／リュウの休日（前書き）

ども、久しぶりの更新。こんな早朝の更新です。何を考えてるんだろう私は。自分でも分からない

さて、引き続きOPとEDの案を募集しています。よろしければおよせください。ただし仮面ライダーとは関係ないほうがおもしろそうなのでその辺をお願いします。

あと、最近小説の密度を濃くしていますが、どうかアンケートをお願いします

A　十分
B　多すぎる
C　少なすぎ
D　駄目駄目
F　微妙

です。よろしくお願いします

第9話　決意のS／リュウの休日

リュウが嘱託魔導士として活動するようになって早数年が経ち、ある事件が起きた。それは新暦７１年　４月２９日のミッドチルダ臨時空港の火災である。この日はゲンヤのいる１０８部隊にスバルとギンガが遊びに行くというものだった。クイントは管理局をやめているため別の仕事をしており、リュウは嘱託魔導士の更新をするために本局に行っていて二人で行くということになり、そこで火災に巻き込まれたのだった。リュウがそれを知ったのは火災が終わった後で、スバルとギンガは軽いやけどで済んだという。それから数週間が経ったある日のこと。

「ねぇ、にぃに」

「なんだ？スバル」

いつも通りに、朝が始まるナカジマ家。ギンガは管理局へ早くに出て行った。そのため、今はリュウと二人である。

「私、魔導士になりたい」

「・・・理由を聞こうか」

スバルの突然の言葉に、リュウは静かに言った。スバルはそれに気押されながらも、静かに口を開いた。

「この前の火災で・・・私、何もできなかった。怖くて、震えてて、逃げることしか出来なくて・・・でも、あの人は・・・私を助けてくれた。」

聞いた話では、一人の魔導士がスバルを助けたのだという。

「私は、戦闘機人だけど・・・この力は、破壊じゃなくて・・・救うために使いたい。だから、魔導士になって、特別救助隊に入って、私と同じ思いをしている人を助けたい・・・」

「・・・・・・・・・」

スバルの思いをリュウは静かに聞いていた。人を助けたい。そして救いたい・・・どこかで泣いている人を・・・ポツリ、ポツリと、スバルは繰り返し呟いていた。だが、問題があった。

「スバル、お前の今のいる学校ではそれは難しいぞ？」

現在小等科6年のスバル。だがリュウやギンガと違って学校は普通の学校に行っているのだ。そのため、時空管理局の訓練校に入ることなど難しい。ましてや航空部隊の場合はエリートのみが入ることを許されている。最低ラインで魔法を覚えても入れるのは陸士の訓練校である。

「それでも、目指したい夢があるから」

「・・・そうか」

「それにね？それだけじゃないんだ・・・魔導士になろうと思った理由」

「何？」

スバルの言葉に、少々困惑するリュウ。これ以上に何があるというのだろうか。

「私・・・にぃにみたいな正義の味方になりたい。困ってる人を助ける・・・そんな正義の味方」

「スバル・・・」

かつて一度だけ、リュウは仮面ライダーアクセルを見せた。そしてリュウはスバルたちにそれを正義の味方と話した。それは間違ってはいないし、仮面ライダーとしての存在だ。リュウは優しくスバルの頭を撫でた。

「わかった父さんたちに相談してみよう」

「うんっ！ありがとにぃに！」

こうして、スバル・ナカジマの魔導士としての人生が幕を開ける。

数週間後、スバルは無事に陸士の訓練校へと入学した。リュウは現在１６歳である。

「おはようお兄ちゃん」

「ああ、ギンガ・・・おはよう」

今日は訓練校に入ったスバルが休暇をもらい、クラナガンで会いたいとメールをよこしてきた。なのでギンガと二人でクラナガンへ行くこととなった。チームメイトも紹介してくれるのだという。

「さて、行くか」

朝食を済ませ、準備を終えたリュウは言いながらバイクを車庫から出した。イタリア車（ドゥカティ・９９９）。かつて前世でも乗っていた愛機である。嘱託魔導士になってからお金を稼ぎ、わざわざ取り寄せたのである。ちなみにこのバイク、日本で買う場合は３００万を超える値段である。カスタマイズや整備などをすればもっと掛るし、何しろ地球の“イタリア製”だ。そんなものを地球から多次元で輸入などすればとんでもない額になる。それでもゲンヤなどの手回しによってそれはここにある。

「ギンガ、乗れ」

「うふっ、お兄ちゃんのバイクに乗るの久しぶり♪」

「そうだな、さあ・・・振り切るぜ」

そう言ってバイクを走らせ、クラナガンへと向かうのだった。この際、何を振り切るのかは触れないでおこう。

ミッドチルダ　東部１２区内『パークロード』

「あたし思うんだ・・・あんたのその異様なワガママさと強引さだけは見習うべきところがあるって！」

「ほめられたー♪」

と、パークロードの中で叫ぶ橙色の髪をツインテールに結った少女、

そしてその言葉にニコニコと笑っているスバル。少女の名前はティアナ・ランスター。スバルとは訓練校内でチームメイトとしている少女だ。スバルの強引な誘いで今日一緒にここにいる。

「あたしは挨拶だけしたらすぐ帰るからね！兄弟水入らずなんだし、3人でゆっくりしなさいよ！」

「うーん・・・水入らずなんだけど、いつもギン姉とにぃにの取りあいなんだけどね」

と、乾いた笑いをするスバル。実際訓練校に先に行ったギンガの方が実力は上であり、スバルは実際喧嘩でギンガに勝ったことはないし、当然ながらリュウにも勝つことはない。

「で？お兄さんとお姉さんどこよ」

「うーんとね・・・あ！」

と、スバルはバイクを見つけた。その紅蓮のバイクの近くに立つ二人の影。リュウとギンガである。

「にぃに～！ギン姉～！」

「スバル～♪」

と、ギンガが駆け出し、手を繋いで回る。その様子にやれやれとリュウがため息をつく。するとスバルがリュウに勢いよく抱きついた。

「にぃに～！」

「うわっ！？」

なんとか受け止めたリュウはスバルを受け止める。

「危ないだろう、スバル」

「えへへ、ごめんなさい～」

と、笑顔を絶やさぬスバル。久しぶりに会えた家族がとても嬉しいのだろう。

「そうだ、にぃに、ギン姉、こちらランスターさん」

「ど、どうも・・・」

「ああ、リュウ・ナカジマだ。妹がいつも世話になっている」

「ギンガ・ナカジマです。初めまして」

と、挨拶する。それからしばらく歩き、スバルがアイス屋を見つけ、ギンガと買いに行った。リュウはティアナとベンチで座っている。

「すまないな、どうもスバルが迷惑をかけているようだ。今日も予定があっただろうに」

「ああ、いえ・・・」

と、ティアナが首を振る。実際ティアナに今日予定らしいものはない。

「妹さん優秀ですよ。訓練校でも最年少組でよくやっていますし、最初はともかく今は個人成績も上位グループだと思います」

「そうか、それを聞くと少し安心できる」

と、リュウがため息をつき、ティアナが微笑む。

「君、ご家族は？」

興味本位に、話題を繋げるためにリュウが切りだした。するとティアナは若干表情を暗くした。

「ああ、ええと・・・私一人です。両親は私が生まれてすぐの頃。育ててくれた兄も3年前・・・天涯孤独ってやつですね」

リュウには分かる。それがどんなに辛いものなのか、前世でもウェザードーパントである井坂に家族を殺され、一人で生きて来た。復讐の化身として。

「すまない・・・」

静かにリュウが謝罪すると、ティアナは首を振った。

「お気になさらず。寮制の魔法学校から訓練校なんで、暮らしに不安もありませんし、兄が残してくれた遺族補償もありますしね」

遺族補償ということは、ティアナの兄は何らかの任務で殉職した管理局員と言うことである。

「君のお兄さんは局員か」

「ええ、まあ・・・」

と、頷く。そしてティアナ自身が局員を目指す理由はただ一つ。

「憧れだったのか？」

「・・・・・今もです」

そうか、とリュウは言いながら空を見上げた。似ている、ティアナと自分・・・どこか似ている境遇を持つ。リュウもかつては父に憧れて警察官を目指し、夢を叶えている。そんな彼女は、どこか応援してやりたいとも思えた

「・・・君は立派だな」

「え？」

「その歳で、それだけの想いを持ち、ここまで一人で生きて来た・・・普通は出来ることじゃない」

リュウの言葉に、ティアナは顔を赤くした。

「そ、そんなことないです・・・妹さんにも助けられてますし、その・・・目標だって、兄の意思を継いでいるだけですから」

「謙遜することはない。夢を引き継ぎ、自らの夢にする・・・悪くない」

「あ、あの・・・そういえば気になったんですけど、お兄さんのバ

イクって・・・」

急に話題を変えたティアナ。まあ、これ以上褒め攻めにされるのは本人としては恥ずかしさの限界が来てしまう。

「ああ、地球のバイクだ。特別に取り寄せたものだ」

「その、私もバイクとか好きで・・・後で見せてもらってもいいですか？凄くかっこよくて、なんていうか・・・フォルムとかもしっかりしてるし、こっちのとは大違いで」

「別に構わないよ。ふふ」

と、リュウが少しだけ笑っていた。

「あの、どうしたんですか？」

「なに、今まで周りであのバイクの良さを理解してくれる人がいなくてな。まさかこんな所で理解者に会えるとは思わなかったよ」

実際、あのバイクのフォルムはミッドチルダにはないもので、珍しいものである。ゲンヤとクイントも最初はあのバイクにどこがいいのかと疑問を持っていた。

「にぃに～！ランスターさ～ん！」

「スバル」

「アイス持って来たよ！」

スバルは言いながらリュウとティアナに私、自分はギンガに持たせた5段重ねのアイスを頬張っている。リュウはやれやれとそれを見てため息をつく。この後、ティアナはリュウのバイクを見て感動して、休日1日をナカジマ家と過ごす羽目となった。

夕方になり、夕食を終えた4人。夕食はクラナガンのデパート内にあるレストランで取った。安く、バイキングで大量に食べる二人のことを考えてリュウが提案したものだ。それによってこのバイキングを行った店が大赤字になったことは言うまでもなく、スバルが大量に食べることを知っていても、ギンガが大量に食べることを知らなかったティアナはただ顔をひきつらせているだけであった。バイキングを後にして、帰ることになるのだが、リュウはバイクをパーキングの上に止めているためそれを取りに駐車場へと向かった。

「・・・まったく、あいつらの喰い気はいつ見ても慣れん」

『仕方ありませんよ。今に始まったことじゃないでしょう』

「まあ、そうなんだがな・・・」

と、ため息をつきながら駐車場へやってきたリュウ。すると、アクセルが点滅した

『マスター・・・魔力反応を確認しました』

「何？」

『戦闘が行われているようです。いかがいたしますか？』

この場合、リュウには二つの選択肢が出来る。介入と放置だ。介入は自身の正義感と嘱託魔導士と言う立場だ。だが、それが絶対と言うわけではない。放置はリュウがそこまでする義務がないということだ。局員ならともかく、一介の嘱託魔導士が介入する必要性がない。魔法を使った喧嘩などであれば局員が逮捕するし、自分は必要がない。

「・・・様子だけ見る。余程の事態でなければ放置だ」

『イエス、マイマスター』

こうして、リュウはその魔力反応の方へと駆けだした。

魔力反応地点に着くと、結界が展開されていた。これはよほどの事態である。凶悪犯を捉える局員がいるならば加勢する必要もある。アクセルにプロテクトを解析させ、ＢＪを装備して中に突入した。だがそこにいたのは一人の少女だった。自分とそう歳も変わらないであろう少女だ。ＢＪを展開し、４人ほどの魔導士を相手にしている。その場にへたり込んでしまっている。

『マスター、救援反応をキャッチ。あの女性は局員です』

「何？」

『さらに４人はいずれも局員データにありません。いかがいたしますか？』

つまり４対１で局員が一人で戦っているのだ。

「っち、行くぞアクセル」

『オーライ』

魔導弾が放たれた少女の前に立ちふさがり、エンジンブレードとなったアクセルでその魔力弾を叩き斬った。

少女・・・八神はやては上機嫌だった。管理局に入局してから持ち続けた夢に向けて確実に近付きつつあるのだから。そしてその自分へのご褒美として久しぶりの休暇を得た。前は空港火災やら何やらで午後は潰れたのでこれはとても良いものである。

「ふふっ、シグナムたちも今日はおらへんし、のんびりせな」

普段は守護騎士が警護につき、一緒にいる。夜天の書の最後の王である彼女はそんな守護騎士たちがいつも護衛と言って付いてくる。嬉しくはあるのだが、それに困っているのも事実である。実際はやては彼女達を家臣ではなく家族と思っているなので、そういう行為が嬉しくもあり、壁となってしまうのだ。なので今日一人というのは珍しい。

「せや、デパートで買い物でもしよか」

こうしてデパートの中に入ったはやてだが、それがいけなかった。そう、はやてはこの時気が付くべきだったのだ。そのはやてを監視する影を

デパートに入ってから適当に買い物して、中を歩いていた。その時

だ、急に寒気を感じた。そして突然近くのガラスが割れた。はやては慌てて周囲を見渡す。何かが自分を狙った。はやては荷物をデパートの職員に預け、駆けだした。確実に自分を狙った攻撃。

「・・・っ、こないなところでは戦えへん」

はやては駆け出し、駐車場でＢＪを纏った。そして４人の魔導士らしき人間が現れる。

「あんたら、うちに何の用や」

「八神はやて・・・闇の書の主だな」

その言葉を聞いてびくりと反応する。闇の書・・・今は名前が違えど、かつて持っていた古代遺失物のことだ。今はなきも、そのはやての身体の中に溶けたものである。

「貴様に恨みはない・・・だが、“アレ”のせいで我らは家族を失い、そして幾年も恨みを持ち続けた・・・この恨み、晴らす」

「っ・・・！確かにあの子たちは罪がある！でも今はそれを見つめ直して必死に償のうてる！こんなことに何の意味があるんや！」

はやての言葉に、別の女が舌打ちした。

「そんなの知ったことじゃないわ。じゃああんたの守護騎士たちは私達を知っているかしら？知らないでしょうね、もう２０年も前のこと。あいつらとその本がどんだけの人間に闇を持たせたか知ってるの？」

女性は言いながらデバイスを構える。そうだ、彼女達は自分が主となる以前には殺人を犯し、そうして生きて来た。主の命令でとはいえ、その事実によって人々に闇を作ってきたのは間違ってない。そしてそれを償おうとしても、それはいつ終わるともしれない道のりだ。

「謝る？償う？それで本当に恨みが消えると思ってんのか？許されると思ってんのか？」

また別の男性がそういう。はやては言いかえせない

「そ、それは・・・」

「もういい、時間の無駄だ、死ね！」

魔力弾が放たれ、はやては必死に防御用の魔法を展開して防御する。広域魔法を得意とする彼女を知っているのか、詠唱の隙を与えない。

「ア、アカン・・・」

このままでは本当に殺される。生きるすべはない。ここまでだと、はやては人生を悟った。夢を持って進むはずが、夢を叶えられず死する運命になろうとは。はやては静かに目を閉じた。

「みんな・・・ごめんな」

はやてに向かって魔力弾が放たれた。だが、その魔力弾がはやてに届くことはなかった。いつまでたっても攻撃が来ないことに疑問を持ったはやてが恐る恐る目を開けた。そこには紅蓮のＢＪを纏った男が立っていた。そしてその男に向かい、魔力弾を向けた男が叫ん

だ。

「テメェ！誰だ！どうやってここに！」

結界が張ってあったのにここにいる。はやては訳が分からないと言った表情で男を見る。無言の男にしびれを切らし、女性が魔力弾を再び発射する。

「答えなさいっ！」

だがその魔力弾は再び剣に切り裂かれ、煙が周囲を漂うだけであった。そして男は一言、呟く

「俺に質問するな・・・」

男の殺気を、はやては一番近くで感じ取った

第9話　決意のS／リュウの休日（後書き）

というわけで、久しぶりに話をまたぎます。本編は2話後です

第１０話　Ｇの依頼／動き出す物語（前書き）

というわけで、今回でＳｔｒｉｋｅｒＳ本編前の物語は終わりです

ぶっちゃけ、色々あって小説更新が難しくなりそうではありそうですが、これからもよろしくお願いします

第１０話　Ｇの依頼／動き出す物語

「俺に質問するな・・・」

クラナガンにあるデパートの駐車場で、リュウはＢＪを纏って少女の前に立ち、エンジンブレードを構えた。

「貴様・・・！」

「不本意だが、嘱託魔導士である以上、この現状を見過ごすことができない・・・公務執行妨害・・・反論があるなら聞こう」

リュウは静かにそう言った。この状況からリュウは襲撃理由を聞かず、ただそれだけを言う。こういった連中にはいちいち聞いているだけ無駄である。個人的な怨恨などリュウにとっては知ったことではない。

「黙れっ！テメェには関係ないんだよ！」

「その辺の嘱託魔導士一人が私達４人に勝てるとでも思ってるのかしら？」

女性の言葉に、リュウは短く笑った。

「勝てると思わなければ・・・ここには立たない」

「やっちまえっ！」

４人の魔導士たちがデバイスを構える。

「下がってろ」

リュウは一言はやてに呟き、エンジンブレードを構える

「アクセル」

『ロードカートリッジ　スチームファン』

「はっ！」

スチームが斬りかかった騎士に当たり、熱気に当てられてその熱さに苦しむ。

「ぐああっ！」

「はあああああっ！」

その隙をついてリュウが斬りかかる。隙が大きいためリュウはそのままある程度斬りつけたら蹴り飛ばす。そしてそのスチームの熱気に紛れ、別の魔導士に斬りかかる。スチームの温度は非常に高温だが、リュウはそのアクセルのバリアジャケットにはその高温に対応できる仕様になっている。そのためリュウにはそのスチームで自らダメージを喰らうことがない。

「はああっ！」

「いつの間に！？」

接近を許した女性の魔導士は慌ててデバイスを構えようとするが、

リュウはそれよりも早く斬りかかる。

『ロードカートリッジ、エレクトリックスラッシュ』

「はあっ！」

「きゃあああっ！？」

女性の魔導士は吹き飛び、壁に叩きつけられる。その際その吹き飛ばされた女性にぶつかって別の魔導士の男がぶつかり重なっていた。それを見た男の魔導士が後ろから砲撃を放とうとする。その距離わずか数メートル。リュウはすぐさま接近する。アクセルもそれに答えるように光る。

『ロードカートリッジ　マキシマムドライブ』

「はあああああああああっ！」

エンジンブレードで敵を斬りつける。Ａの形に魔力が跡となって残る。ダイナミックエースを発動させていた。

「絶望が・・・お前達のゴールだ」

「ぐっ・・・あ・・・」

リュウの言葉の後、最後の魔導士が崩れ落ちた。それを確認するとリュウはバインドで４人を締め上げ、はやてに近づいた。

「大丈夫か？」

「え、ああ・・・あの、ありがとうございます」

「立てるか？」

そう言ってリュウははやてに手を差し伸べる。はやてもその手を取った。

「す、すいません・・・貴方は一体？」

「・・・言ったはずだ、俺に質問するな」

実際、嘱託魔導士ということをはやては把握したはずである。これ以上関わる必要もないし、下で待たせてしまっているであろう3人も困っているはずだ。ここで下手に管理局の事情聴取を受けるのも面倒と判断し、その場を後にすることにした。もちろんはやてを放置して

「悪いが人を待たせている・・・これで失礼する」

そう言ってバイクに乗り、ヘルメットをかぶってバイクを走らせた。

「あの人、一体何者やろ・・・」

取り残されたはやてはそう呟いた。

下の階に戻ると、3人が待っていた。

「もぉ！にぃに遅いよ」

「すまない、この場所に来るまでに人に道を聞かれてな」
完全な嘘である。だがスバルとギンガは特に疑うこともなく頷いていた。
「へぇ、そうだったんだ」
「ならしかたないよね～」
「・・・」
まあ、ティアナは少し疑うようにリュウを見ていたが、それ以上リュウがいわなかったので、ティアナも特に何も言わず４人はエアラインの方へと向かった。
「ではな、スバル。それにランスター。残りの課程も無理せず、しっかりとな」
「頑張ってね」
二人の言葉に、スバルとティアナが頷く
「うんっ！にぃに！ギン姉！」
「ありがとうございます」
こうして二人はエアラインに乗って、陸士の訓練校にまで帰って行った。
「さて、俺達も帰るぞ、ギンガ」

「うん、お兄ちゃん」

そう言って笑顔でギンガが渡されたヘルメットをかぶり、リュウの後ろに乗って、それを確認したリュウがバイクを走らせそこを後にした。

時は流れ、３年の月日が流れた。スバルは無事訓練校を卒業してティアナと共に災害救助隊で活動をしている。だが、それからしばらくしてスバルとティアナにスカウトの話が持ち上がった。『機動六課』と呼ばれる部隊へのスカウトで、ゲンヤなども支援に当たるのだという。ギンガも１０８部隊で父のゲンヤの補佐として働いており、未だに嘱託魔導士をやりながら大学で勉強するリュウとは違っていた。そしてそんなある日、リュウは父ゲンヤに呼び出された。もちろん家の中だが

「なあリュウ・・・ちょいと頼まれてくれねぇか」

「何をだ？」

「ああ、実はな・・・スバルが行く部隊、機動六課って言うんだが。その部隊の助っ人をたのまれちゃくれねぇか」

突然の一言であった。父の依頼ならば受けるべきではあるのだが、正直気乗りしない。

「・・・大学があるから長期滞在はできないぞ、父さん」

そう、まず第一にリュウは学生である。嘱託魔導士であっても学生

としての本分の勉強もあるし、第一嘱託魔導士は管理局への強力であり、部隊に所属することは本来ならばない。

「大学は休学扱いにしてもらえる。それにどうしても、お前の力が必要だ」

「理由を聞いても？」

「・・・ああ、詳しくは言えないが、リュウは聖王教会を知っているな？」

聖王教会。時空管理局と協力体制にある数多くの次元世界に影響力を持つ有数の大規模組織であり、優秀な騎士が揃っている。

「それを指揮するカリム・グラシアって言う人のお達しでな。機動六課に優秀な人材を集めることになってる。オフレコだがこの部隊には俺だけでなく聖王教会、さらには伝説の三提督たちが協力体制に入る」

「！」

これはよほどの事態である。聖王教会、そして伝説の三提督と陸士１０８部隊という３つの後ろ盾に強力な部隊として活動する。これは明らかに異常だ。

「それほど、何かをしないといけない部隊なのか？」

「・・・そうなるな」

リュウは考える。それほど部隊ならば当然エリートが集うであろう。

そしてそれを知るならばスバルのことも“あの理由”から呼ばれたのではないかと

「父さん、俺が管理局を嫌っているのは知っているな？」

「・・・ああ、お前の管理局嫌いは筋金入りだしな。嘱託魔導士としても評価は低いし、上からの評価もあまりよくない。それがどうかしたか？」

「当然、俺の答えが分かるだろう？」

リュウの言葉に、ゲンヤは答えを見つける。

「つまり、協力しないと？」

「いや、そうじゃない」

と、リュウは首を振り、立ち上がる。

「その機動六課と言う部隊、そして管理局には元より協力はしない・・・だが、それだけの協力があるということはそれだけリスクがあることを目的として動くはずだ。その時にスバルに危険が降りかかるのが心配だ。俺は機動六課ではなく、スバルの安全を守る理由でなら、その部隊に協力してもいい」

後ろ盾を作る以上、その部隊には様々な敵がくる可能性がある。それは外敵だけではない、管理局と言う身内からも敵が出てくる可能性も十分に考えられるのだ。

「すまねぇな、いつもいつも、お前にはスバルたちのことをまかせ

っきりだ」

「俺が好きにやってるんだ。構わないさ、父さん」

そう言ってリュウは部屋を後にし、部屋へと戻って行った。

部屋に戻ったリュウは準備を始めた。着替えや日用品を鞄につめる。

そして・・・

「これも、恐らく必要になるだろうな」

それはアクセルメモリ、ドライバー、エンジンメモリとトライアルメモリ、エンジンブレードだった。カバンの底にそれを詰めてから服を重ねていく。

『マスター、それはなんですか？』

「アクセルは知らなかったな・・・これは、お前の元になったものだ」

と、リュウは相棒にそれを教えた。自分の生前のこと、仮面ライダーアクセルのこと、そしてその元々のアクセルの機構であること

『なるほど、どうりで私は特殊なデバイスだと思いましたよ』

「驚いたか？」

『はい、非現実的なことで解析不能ですが、マスターは嘘をつくような御方ではありません。それと同時に、これは私の記憶の最下層

にしまっておくべきだと判断しました』

と、アクセルが言う。元々主人のため、主人に尽くすようにプログラムされているのがインテリジェントデバイスであるのだが、アクセルは少しだけ違い、マスターの間違いにははっきりと受け答えるように出来ている。だが、リュウだからこそ、それを信頼しているし、それによってアクセルもリュウを信頼しているのである。

「ああ、頼む。さて、出向は3日後・・・その時は頼むぞ、アクセル」

『Ｙｅｓ，ｍｙ ｍａｓｔｅｒ．』

こうしてリュウは眠りに着いた

夢の中

「・・・ここは」

またリュウはシュラウドと出会った空間にいた。ここに来るのは母のクイントの危機を聞いた以来である。

「シュラウド！いるんだろう！」

リュウが声を上げると、シュラウドが姿を現した。

「今日は何の用だ？」

「・・・とうとう、刻が来たわ」

「何？」

「メモリを使う刻が・・・」

言いながら、シュラウドはアクセルメモリを取りだした。

「それは、アクセルメモリ？」

「・・・貴方に渡していたのは、劣化したもの。これを使えば本来のアクセルの力を全て取り戻すことができる・・・だから頼むわよ、この世界で起こりうる危機を・・・・止めて」

そこでシュラウドが消えた。残っていたのはアクセルのメモリだけ。リュウはそれを拾い上げて周囲を見渡した。

「おい！待て！どういう意味だ！シュラウド！」

だが、リュウの意識もまた段々と薄れていき、消えていった。

「・・・っ！」

リュウはそこで目を覚ました。

『マスター？おはようございます』

「あ、ああ・・・」

右手にはアクセルのメモリが握られていた。慌てて鞄を確認すると

鞄に入れておいたはずのアクセルメモリが消えていた。

「・・・・・・」

『マスター？どうしました？』

「いや・・・なんでもない」

こうして疑問を持ったまま、リュウは３日目を迎えていた。

３日後

「では、行ってくる」

「気を付けてね、ま、リュウなら大丈夫でしょうけど♪」

と、クイントが言う。すると、ギンガが少しだけ心配そうである

「どうした？ギンガ」

「ううん・・・スバルをお願い、お兄ちゃん」

「ああ、わかってる」

こうしてリュウ・ナカジマ改め、照井竜の物語が動き出す

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ編　開幕

第１０話　Ｇの依頼／動き出す物語（後書き）

ということで、次回からＳｔｒｉｋｅｒＳの物語に関わって行きます。よろしくお願いします

でわｗｗ

第１１話　始まりのＡ／それぞれの再会（前書き）

すいません、更新遅れました。ここからＳｔｒｉｋｅｒＳ編になります

第１１話　始まりのＡ／それぞれの再会

機動六課　隊舎前　夕方
機動六課が設立されてから2日後に、リュウはその機動六課の隊舎の前に立っていた。それというのも、嘱託魔導士の協力についての手続きに少々時間がかかったからである。

「・・・ここか」

バイクを押しながらゆっくりと歩き出すリュウ

『マスター、確かスバル様がいらっしゃるんですよね、この部隊』

「ああ、スバルがどんなふうに成長したか、少し楽しみだな」

そう言いながらリュウはバイクを止め、隊舎の中へと入って行った。

機動六課　部隊長室

部隊長、八神はやてはその新しく協力する人間の資料を見ていた。

「ふむふむ・・・ゲンヤさんの息子さんかぁ・・・」

「はやてちゃん、どうしたです？」

全長３０センチくらいの水色の少女がふわふわとはやてに近づく。
彼女の名はリインフォース？、通称リィンである。

「機動六課に協力してくれる騎士の嘱託魔導士がいらっしゃるんよ」

「嘱託魔導士さんですか？」

「なんでもゲンヤさんの息子さん・・・つまりスバルのお兄さんやな」

家族関係も乗っており、魔術ランクなども乗っている。リィンはその渡されたものを見て首を傾げる。

「でも、なんでＡＡランクの方がこのお歳で嘱託魔導士なんでしょう？普通局員の年齢です！」

リュウは現在１９歳である。ミッドチルダの成人年齢１８で、その年齢なら就職しても問題はないのだが・・・リュウは学生と言うカテゴリーが成されている。

「しかもなんですかこれー！上司からの評価最低ですぅ！」

リィンの見る履歴には『昇格の見込みなし』と書かれていたり『局員になる意欲なし』と書かれていた。

「ま、本人にも思うところがあるんやろ。とりあえず仲良くやっていけるとええな」

「はいです！」

そんな会話をする二人だが、そんな期待はすぐに裏切られることとなる

一方のリュウは機動六課の隊舎を歩き、受付で教えられた通りに部隊長室まであるいていた。そして曲がり角で人とぶつかってしまった。リュウは驚いてすぐに女性を見た。長く美しい金髪の女性だった。

「すまない、大丈夫か？」

「あ、す、すいませ・・・あ」

と、差し出された手を取ろうとした女性が驚いてリュウを見た。顔も若干紅い

「・・・？どうした。立てないのか？」

「あ、いえ・・・」

そう言って手を取り、女性が立ち上がる。

「あの・・・貴方は確か、リュウ・ナカジマさんですか？」

「ああ、そうだが・・・どこかで会ったか？」

と、リュウの言葉に「えっ」と声を上げ、ちょっとショックのようだ。「えーと」と、少しもじもじしながらも、リュウの目を見る女性。リュウもどこかで見た気がするのは間違いない。だが、何故かこの女性を見るとイライラする。

（どこかで会ったか？何故か思い出したくもないようなことな気がする・・・）

「私その、フェイト・T・ハラオウンです。前にその・・・一度戦ったことが・・・」

フェイトという名前を辿るリュウ。だがうっすらとしか覚えていない。確か嘱託魔導士になるときに一度戦った気がするが、それ以上を思い出せない。というか、思い出すとイライラしそうだと、考えるリュウ。そこでハラオウンという名前を思い出した。リンディ・ハラオウン統括である。その娘であり、自分が帰るときに管理局で頑張らないかと言うまでに数分もじもじもじもじしていた少女である。

「ああ、あの時の・・・」

「思い出していただけました？」

「まあな・・・」

「協力してくれる嘱託魔導士ってあなただったんですね、部隊長室へ行くんですか？」

と、フェイトの言葉に、リュウは頷く

「ああ、そうだ」

「じゃあ案内します。こっちです」

と、フェイトが歩き始める。

「そういえば、まだ局員になってはいないんですね」

「前にも言ったが、なろうとは思わない」

「そうですか・・・それだけの才能があるのに」

と、少々残念そうなフェイト。フェイトは実際９歳で嘱託魔導士となり１０歳で局員で執務官候補生として管理局に入局した。はっきり言って１０歳で就職するなど前世が日本のリュウにとっては考えられないだろう。

「今は何をしてらっしゃるんですか？」

「・・・大学で魔法学と経済について勉強している」

リュウの通うのはザンクトヒルデ魔法学院系列の大学で、日本の大学で言えば東大くらいの学力を要するものである。しかしリュウも二十代で警視となったエリートである。同じ努力をすればそれが実ることは知っているので、努力を続けた結果見事大学合格となったわけである。

「へぇ・・・あ、つきましたよ。私はこれで」

「ああ、案内をしてくれてありがとう。感謝する」

リュウの言葉に、フェイトは再び顔を赤くした。

「い、いえ・・・では、また」

そう言ってフェイトは走って行った。

『マスター、彼女完全に貴方にホの字ですね』

「そうなのか？」

『・・・・・・』

自分の主の鈍さに呆れるアクセルだった。それはさておき、リュウはその前の扉をノックした。

「はい、どうぞ」

向こう側から声が聞こえたので、扉を開けた。開ける途中どこかで聞いた声というのを覚えていた。そしてドアを開けたと同時に互いに声が重なった。

「「あっ」」

まあ、驚きである。あの時助けた少女が部隊長だということに。ゲンヤから事前に同い年の人間が部隊長だということを知らされていたが、写真を見ることはしなかったのではやてが部隊長だとは知らなかった。一方のはやても昔自分を助けてくれた男性がまさか恩師であるゲンヤの息子が自分を助けてくれていたとは、夢にも思わなかった。

「えーと・・・とりあえず、その、どうぞ」

「失礼する」

そう言ってソファーに腰掛ける。

「改めまして、機動六課部隊長の八神はやてや」
「その補佐のリインフォース？です！」
と、二人が挨拶する。
「嘱託魔導士、リュウ・ナカジマだ」
「とりあえず前はホンマに、ありがとうございました」
「俺はあそこを通りかかっただけだ」
と、はやてのお礼に軽く返すリュウ。
「それにしてもびっくりやわぁ、前に助けてもろた方がゲンヤさんの息子さんやったとは」
「・・・それで、この部隊での私の役割や要項を教えていただきたいのだが」
「あ、そやったな・・・えーと、主にフォワードと一緒に戦闘に出たりしてもらいます。具体的には・・・」
と、はやてが一通りリュウの機動六課での立場、仕事内容などを教える。あくまでも嘱託魔導士としての協力体制であるので、そこまで深く仕事をしたりはしない。
「と、まあこんな感じです。ご質問は？」
「いや、特に。自分の部屋の場所を教えていただけるとありがたい

のだが」

「ああ、リィン、案内して上げてな」

「はいですぅ！」

と、リィンが手を上げる。それからリュウが立ち上がり退出しようとすると、はやてがそれに待ったをかける。

「あ、リュウさん？」

「なんだろうか、八神部隊長」

「なんというか・・・もうちょっとやわらかくてもええよ？同い年やし」

と、はやてが言うがリュウは首を振る。

「最低限、組織として動くならこれが普通だ。上のものと下の者。協力関係があっても、それ以上にすることはない。リインフォース？曹長、案内をお願いする」

「えーと、はいです！」

こうして、リュウは部隊長室を後にし、残ったのははやてだけとなった。

「・・・うーん、想像以上に頭の固い人やなぁ」

と、頭を掻きながらはやてはため息をついた。実を言えば、はやて

はゲンヤから息子のリュウの話は聞いたことがあった。頭が固いが、家族や妹に優しい。そして管理局を信頼しない珍しい人間で、絶対に管理局には就職しないと言っていたらしい。

「これは信頼されていないってことやろうか？」

そっけない態度、言葉遣い、明らかに自分を信頼できる人物と断定していないようだ。それならばやることはただ一つである。

「信頼されるようにがんばらな！」

と、決意を固めるはやてであった。

廊下

「えーとですねぇ、こっちがお部屋になるですぅ！」

「感謝する、リインフォース？曹長」

「あの、リュウさん？別にフルネームで呼ばなくてもいいですよー？私はリインでいいです！」

とリィンがリュウの肩に乗っかった。

「いや、だがな・・・」

「じゃないと次から返事して上げません！」

と、リィンがソッポを向いた。よほどリュウの対応が気に入らなか

ったらしい。というか、頬を膨らませている辺りからして子供っぽい理由のようだ。ただ単に、そう言う風によそよそしくされるのが嫌だと。リュウはやれやれという様子で頷いた。

「了解したリィン。次からそう呼ぶとしよう」

「はいですっ！」

こうして機動六課の中で一歩だけ仲が良くなったリィンである。すると、遠くから走ってくる音が聞こえる。

「にぃーにぃー！」

「スバ・・・ぐおおおっ！」

スバルの勢いを付けたダイブによってリュウは押し倒される。

「にぃにが機動六課にいるー！やったー！」

「スバル・・・降りろ・・・」

「スバル・・・降りるです～・・・」

リュウの上に乗るスバル。そしてリュウの下敷きになり目を回すリィン。そしてリィンを潰すまいと頑張るリュウの姿・・・なかなかシュールである。

「あ、すいませんリィン曹長」

「スバル、お前はどうやって俺を見つけた？お前にここに来ること

は秘密にしていたはずだが・・・」

「うん！にぃにの匂いがしたから！」

「犬かお前は」

と、顔を引き攣らせるリュウ。

「まあ、冗談だけど・・・実は訓練が終わってからフェイト隊長が教えてくれたの。だから一杯走ってきたんだよ？」

まさか機人モードにでもなって走ってきたのではないかと不安になるリュウ。そして随分と汗がびっしょりである。

「スバル、汗がびっしょりだな。すぐシャワーでも浴びて来い。このままだと風邪をひくからな」

「はーい！にぃに！一緒に入ろ？」

「えー！？リュウさんそう言う趣味があったですか！？」

「リィン、本気にするな。スバル、悪ふざけは後にしろ。とりあえず「スバルー！」うん？」

遠くから橙色のツインテールの少女が走ってきた。リュウはこの少女の名前も知っている。

「ランスターか」

「あ、リュウさん！お久しぶりです」

そう言ってティアナがぺこりと頭を下げる。

「ティア、そんなに慌ててどうしたの？」

「どうしたのって、アンタがフェイト隊長からリュウさんがいるって聞いてすっ飛んでったから追いかけて来たんでしょうが、リュウさんのことになると見境ないんだからもう」

「あはは、ごめーん」

と、悪気もなく謝るスバル。ティアナも「まったくもう」とため息をついている。

「どうやら、相変わらず苦労をかけているようだな。申し訳ない」

「いえ、いいんです・・・もう慣れました」

「だろうな」

と、リュウはティアナと二人でスバルを見てため息をつく。

「ちょ、ちょっと、なんでにぃにとティアはあたしを見てため息をつくの！？」

「「手が掛るから」」

「シンクロした！？」

と、驚くスバル

「とりあえず二人とも、さっきも言ったが汗だくだ。シャワーを浴びて来い。スバル、話がしたいならシャワーを浴びたあとにまたこの部屋に来い」

「はーい！にぃに、後でね！」

「私も後でお邪魔してもいいですか？」

「別に構わない。さ、行って来い」

そういうとスバルは手を振りながら、ティアナは一礼してその場を後にした。

「リィン、案内はここまでで結構。後は部屋や私物の整理をさせてもらう」

「はいです！ではまた夕食の時にでも～」

そう言ってリィンはその場を後にしていった。リュウは部屋に入り、その自分の部屋を見渡した。随分と広い部屋である。ベッドがまず3人くらい寝れるほど広い。キッチンが付いてる。風呂とトイレもしっかりしている。どういう意味でこの部屋があるのか理解不能だが、ここはゲンヤの話では中古品である。そういうことは前に使っていた人間に聞くべきである。

「さて、と・・・」

言いながらリュウはアクセルメモリとドライバー、エンジンブレード、エンジンメモリ、トライアルメモリを取りだした。そしてそれ

ぞれをベッドの下に隠しておく。さらに5つほどの段ボールを見つめた。

「荷物の整理をするか・・・」

こうして、リュウは掃除と整理を始めるのだった。

30分後

「にぃに～！来たよ～！」

と、スバルが勢いよく入ってくる

「ああ、スバルか。丁度部屋の整理が終わったところだ」

「広いね、にぃにの部屋」

まず第一声がそれだった。

「おじゃまします・・・ホントだ、広っ」

と、ティアナも同じ反応である。

「二人とも元気そうで何よりだな。たまに帰ってくるスバルからよく話は聞いていたが・・・」

スバルは仕事がない時、たまに実家に帰ってくる。その時は一日リュウと事件のこと、普段のこと、ティアナのことを話し続ける。リュウはその日は飽きずに聞いてあげているのだ。

「ああ、そうだスバル、これ」

「ほぇ？」

「部隊入隊記念だ。本来なら災害救助隊に配属されたときに渡そうと思ったのだが、時期が遅れた。あと、ティアナもな」

と、二つの箱を渡した。箱にはそれぞれ青いイヤリングと、橙色のイヤリングが入っていた。

「わぁ！ありがとにぃに！」

「私まで・・・いいんですか？」

「ティアナはいつもスバルの面倒ばかり見てもらっているからな。お礼だ。」

「あ、ありがとうございます」

と、お礼を言うティアナは少々顔を紅くしていた。

「そうだ！聞いてにぃに！あのね・・・」

それからしばらく、スバルとティアナはリュウに機動六課でのことを話した。2日だけでも、たいしたものである。沢山の訓練の話、スバルの憧れの人がこの部隊にいること、新しい仲間のこと・・・楽しそうにスバルは話していた。それからしばらくして、時計が7時を回った。

「そろそろ夕食に行くか」

「あ、そうだね、行こ、にぃに！」

そう言ってスバルがリュウの腕をからませる。普段からこれをするとギンガと喧嘩になるのだが、現在ギンガがいないためスバルの一人占めである。

「～♪」

「スバル、あまりくっつかれると歩きにくいのだが・・・」

「気にしないで、にぃに♪」

後ろでティアナのため息が聞こえていた。

機動六課　食堂

3人で座るテーブルには、相変わらず山盛りの料理がある。スバルはパクパクとそれを食べ、ティアナはそれを慣れた様子で食事を食べる。リュウもようやく慣れている感じで食事を口に運んでいるのだが、他の食堂の人間はそれに唖然としていて手が止まっている。そんな食事の途中、リュウの目にある物が止まった。それは小さな子供二人が機動六課の制服を着てフェイトと食事をしているものだった。

「スバル、あの子供はなんだ？」

「ああ、あの子たち？あの子たちは私やティアと同じフォワードだ

よ？９歳なんだって」

「・・・９歳で子供を戦場に出す、か」

前世なら考えられないことである。まあ、紛争地などであれば関係もないが、そういうのはあまり良いようにリュウは思えなかった。夕食を終えて、席を立った。そしてそこで人とぶつかりそうになる。

「あ、ごめんなさい」

「すまない」

そこで目があった。リュウがぶつかったのはサイドポニーの少女である。

「あ、あの・・・リュウ、君・・・？」

「すまない、どこかで会ったか？」

と、リュウが首を傾げる。リュウもあった気がするのだが、思い出せない

「わ、私だよ・・・高町、なのは・・・」

願っていた再会と、特に願うことのない再会が交錯した

第１１話　始まりのＡ／それぞれの再会（後書き）

というわけでなのはと再会！こっからリュウの戦いが始まります

で、今回の疑問

フェイトとなのはが何故リュウとわかったのか？

これはですね、リュウが服を殆ど変えないからです。外用の服はおなじみに出てくる真っ赤なジャケットや真っ青なジャケットです。ブランドも同じで、強烈な印象が残るわけです。

これによりフェイトたちはもしかしたらという感じになったのです

まあ、女の勘というのもあるかもしれません　でわノシ

第１２話　謝罪のＮ／リュウとシグナム（前書き）

どうにか更新です。とりあえず更新が遅いというのが感想に来たので頑張ってみました。そろそろ終わる小説も出てくるので、なんとかするつもりです・・・

とりあえず、最近は昼夜が逆転してしまってるので、投稿も４時過ぎというよくわからない事態になってます。ごめんなさい

とりあえず、今回書いてみて、リュウ＝竜の性格がちょっと壊れてきてます。治さないと大変なことになりそうなので頑張る予定です。

結構話を飛ばすことにもなりますが、高速更新を頑張る予定ですので、よろしくお願いします

第12話　謝罪のN／リュウとシグナム

「高町・・・なのは？」

リュウは首を傾げる。今まで話は聞いたことがある。時空管理局で活躍するエースオブエース。それが高町なのはだ。ミッドチルダでは雑誌に乗るほどの超有名人であり、9歳で管理局に入り、その名を馳せたとも聞いている。だが、そんな有名人と会った記憶が、リュウにはない。

「えっと・・・もう、随分前かな、一度、病院で会ったんだけど・・・」

と、歯切れが悪いが、ポツリ、ポツリと言うなのは。首を傾げ、考えるリュウ。そしてリュウの頭にある言葉が蘇る。

――う、あぁぁぁ・・・うぅ・・・私、一人はもうやだよ・・・

（・・・あの時の、子か）

包帯だらけで顔しか見えなかったのだが、今思えば高町なのはと名乗っていた気がする。

「確かに、久しぶりのようだ。高町なのは一等空尉」

「あの、そんなに固くならなくていいよ・・・同い年だし、ね？」

「最低限の礼儀と規律。守るのは当然だ」

と、リュウが返す。そんなやりとりに慌てるなのは。当然である。

「その、お話・・・いいかな？」

「別に構わないが・・・」

なのはに促されて、みんなとは少し離れた席に座った。数人の局員がそんな様子をチラチラと見ているが、リュウは特に気にしない。そのままお茶を置いて席に着く

「あの、その・・・１０年前のこと・・・」

「？」

１０年前、一度会っただけだが・・・と、リュウは思考させる。

「あの時のこと、謝ろうと思って」

――私の心に入って来ないで！

「ああ・・・」

と、リュウは特反応しないで思い出す。子供に対して少し強く言ってしまったことを覚えていた。

「あの時は、私・・・本当にどうかしてて、気付かせてくれたリュウ君に、酷いこと言って・・・本当にごめんなさい！」

と、頭を下げるなのは。リュウはやれやれとため息をつく。

「あの時のことは、君が謝ることではない」

「でも！貴方が気づかせてくれなかったら、私はきっとここにはいない・・・ううん、絶対にここにいない」

「それでも、対して親しくもない人物にあれだけの言葉を言ったのは私の方が悪いだろう・・・」

「でも・・・」

「ちなみに言うなれば、済まないがそんなことを気にする俺ではない。君が再びこの道を選び歩くのなら、自分の部下に自分と同じ思いをさせないように努力させればいい。」

そう言ってリュウは立ち上がる。

「話はそれだけだろうか？そろそろ部屋に戻りたいのだが」

「あ・・・・・・うん、その、ありがとう」

「特に例を言われることをした覚えはない。では」

そう言ってリュウは食堂を後にした。そこへスバルがやってくる

「にぃに、なのはさんと何を話していたの？」

「たいしたことじゃない・・・俺は部屋に戻る」

「にぃにの部屋にいていい？」

スバルがそう言うと、リュウは優しくスバルを撫でる。

「ああ、構わない」

そう言って部屋に戻る2人であった。

部屋に戻ると、スバルのトークの荒らし。昇格試験のことや、その時になのはに助けられたこと、それはもういろんなことを話まくる。だが、リュウはそれを決して面倒と言ったり、聞かなかったりすることはない。一つ一つを真剣に聞いている。

「スバル」

「何？にぃに」

「今の生活は楽しいか？」

「うん！」

「そうか」

と、笑顔でスバルの頭を撫でるリュウ。昔はよく自分の妻にもしていたことだ。スバルも嬉しそうにしている。今の生活はリュウがいなければ実現はしない。管理局への道はリュウの後押しもあってこそ、スバルは決意したのだ。“正義の味方”になりたいと。災害の中で独り、孤独に泣く人を助けたいと。それがスバルの目標だ。

「・・・む、もうこんな時間だな」

時刻は１２時を過ぎている。随分とスバルの話を聞いていたようである。就寝時間は１１時。もう寝なくてはいけない。

「スバル、部屋へ戻れ。そろそろ寝ないと、明日も訓練なのだろう？」

「じゃ、寝よう！にぃに！」

「・・・何？」

スバルの言葉に首を傾げるリュウ。すると、スバルはニコニコとリュウが寝るはずのベッドの中へと入って行く。これはもう、実家に帰ってくればいつもである。ギンガは基本的に１０８部隊勤務だ。なのでスバルとギンガが家にいることが滅多にない。スバルは正直な話それを狙って帰ってくる。そして部屋へ押し入り、一緒に寝る。これはギンガも同じことだ。自分の兄を独占するためにこんな策を繰り出す。大体一緒だと喧嘩になってリュウに止められる。リュウの機嫌が損ねれば空気が非常に悪くなる。

「ほら！にぃに寝ようよ！」

「・・・ティアナには言っているのか？」

「うん！」

素晴らしいまでの笑顔を見せるスバル。そうとうリュウを独占することが嬉しいらしい。　リュウはスバルが一度我儘を言うとテコでも動かないことを知っている。ため息をつき、電気を消してベッドに入る。スバルは嬉しそうにリュウの腕に絡まる。

（・・・やれやれ）

「お休み、にぃに」

「ああ、おやすみスバル」

こうして眠りに着くスバル。リュウは静かにスバルの頭を撫でると、布団の中に入る。しばらくして、少しずつ眠くなっていく。リュウの横で、スバルは段々と眠くなっていく。その安らかな笑顔に微笑む。

「お前は俺が守る・・・安心しろ、スバル・・・」

リュウの言葉に、寝ていたスバルは少しだけ微笑んでいた。

翌日

リュウ、5時起床。普通なら早い時刻だ。5時間しか寝ていない。いささか少ない睡眠時間ではあるものの、これがリュウの日課である。どんなに時間が短くても朝5時には起床し、鍛錬に勤しむ。リュウは身体を起こし、意識を覚醒させる。スバルはまだ気持ちよさそうに眠りこけている。

（・・・確か、昨日の話では朝の訓練があると言っていたが）

「スバル」

「ん～・・・ティア～・・・あと五分・・・」

我が妹ながら、朝にめっぽう弱いのは相変わらずだと、リュウはため息をつく。

「スバル」

「もうちょっと～・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・朝食、抜き」

その言葉をリュウが発した途端、スバルが勢いよく起き上がった。これぞ、リュウの最終兵器である。スバルは普段から寝坊したり、昼寝したりすることが多い。なので、朝食、昼食、夕食を抜きというと飛び上がるのである。

「ごめんなさい！起きますからそれだけは・・・・・・ってあれ？にぃに？」

「・・・やっと起きたか、おはようスバル」

「うん、にぃに・・・・って！」

「そう、後４０分で朝の訓練だろう。速く着替えに戻ってナックル持って行け」

リボルバーナックルはそれぞれスバルとギンガが母から受け継ぎ、それぞれがきき腕に付けて愛用している。ちなみにリュウはクイントからもらったブレスレッドを大切にしている。これはクイントの祖母の代から受け継がれているものだとか。

「じゃあにぃに！また後で！」

「ああ、わかった」

こうしてスバルはバタバタと走って行った。

「やれやれ・・・」

そんな元気いっぱいかつ、どこか抜けている妹に苦笑するリュウであった。

訓練場付近

機動六課の訓練用システムは高町なのはが監修したシミュレーションシステムが搭載されている。ホログラムの用にそこに本物があるように見せるもの。廃墟、森林、草原、荒野・・・データを入力さえすればあらゆる環境を作り出せる素晴らしいシステム。地球では考えられないような代物出る。

「・・・これだけの訓練施設を持ってして、いったい何をするつもりだ？」

訓練場から少し離れた場所で、スバルを見守っているリュウは静かにそう呟く。軍事施設・・・とまでは行かないが、それ並みの戦力である。己を高めることは悪いことではない。だが、その力は一体どこに振るうのか？管理局の概念は無限に広がる世界の管理。管理するだけなら武力はいらない。治安維持になら、警察と同じくらいの物はいるだろうが、そのためにわざわざ子供まで引っ張るのは少し矛盾がある気がする。

「まあ、俺には関係ないことだ」

ここにいる目的はスバルを守ること。ギンガも守ると言いたいところだが、ギンガのところには父、ゲンヤがいるので問題はないだろう。スバルが未熟な点を自分がカバーする。それがここでの自分の役目になる。そしてメモリを使う時が来るまでは・・・

「おい、貴様」

「ん？」

不意に、リュウの後ろから声が聞こえる。後ろを向くとそこにはピンク色の髪の女性がいた。キリッとした目と、そのいでたちはまさに騎士という感じである。

「ここは部外者が立ち入る場所ではない。何者だ？」

「名乗るのなら先にそちらの名を聞かせて欲しい」

「我が名はシグナム。主はやてに仕える騎士の将であり、機動六課、ライトニング分隊の副隊長だ」

リュウはそこで思い出す。ゲンヤから聞いた八神家。八神はやてを守護する４人の騎士の一人であり、将を名乗る女性。目の前の女性がそれなのだ。ヴォルケンリッター・・・かつて闇の書と呼ばれるロストロギアによって生み出された彼女は今はそれと離れた個人だとも父ゲンヤから説明された。自分の愛弟子である彼女は良い娘なのだと・・・随分と嬉しそうに語ったのをリュウは覚えている。

「さあ、お前は貴様の名は？どうしてここに？」

「・・・・・昨日より、機動六課に協力することとなったリュウ・ナカジマだ。嘱託魔導士なので、一応協力者と言う形になっている」

「ゲンヤ殿のご子息であり、スバルの兄・・・！？」

「その通りだ」

と言った瞬間、シグナムは剣を引いて頭を下げた。

「そうか、貴方が・・・ゲンヤ殿から聞いている。非常に優秀な騎士であると」

シグナムの言葉にリュウはやれやれとため息をつく。

「父の言うことは少し飛躍があるな。非常に優秀というわけではない。それより、シグナム副隊長はここで何を？」

「いえ、私はここで新人たちを見ているのです」

急に口調が変わるシグナム。おそらく八神はやての師の息子と言うことで目上と思っているのだろう。真面目だが、真面目すぎるのはあまりよろしいと思わないリュウ

「・・・シグナム副隊長。俺は局員ではない。もっと柔らかに話してもらいたい。父と八神部隊長の関係など気にすることはない」

「なら、私もシグナムと呼んでくれ。それは素ではないだろう？」

「・・・ふっ、流石はヴォルケンリッターの将か、良いだろうシグ

ナム」

と、リュウが頷く。

「それでシグナム、ここで新人を見ていたそうだが？」

「うむ、私は教導と言うのがどうも苦手でな。戦い方など、近づいて斬れとしか言えん」

「言えて妙だな・・・貴女の剣はここ（管理局）という鞘に収まる剣ではないだろう？」

「ふっ・・・そうだな」

リュウもそのシグナムの堂々とした態度や気迫に、ゲンヤの言うとおりの騎士だと思った。

「フム、もう少し・・・・・私の出番は先だな」

「基礎、基盤は高町一尉か・・・」

遠くから眺めるリュウ。常に空を飛んで指示をするなのは。彼女の眼はどこまでもまっすぐだ。４人の新人と呼ぶ子供たちはそれに従って訓練に励む。

「あれはとても頑固だかなら。やると決めたことは意地でもやり通す」

「・・・その結果、自らが傷つこうともか？」

「っ！？知っていたのか！？」

「一度だけ会ったことがある。母が病院にいたときにな」

１０年も前の記憶。断片だけだが、忘れてはならないのは母の口封じをしようとした一味。そしてあの包帯だらけの少女

「シグナム」

「なんだ？」

「貴女はこの世界を、この組織をどう思う？世界を管理することに理想を掲げるこの組織・・・だが、そこまでの戦力は必要だろうか？」

リュウの言葉に、少し真剣になるシグナム

「何が言いたい？」

「・・・・・人手不足の時空管理局。だが、世界を管理したいという理想に子供の犠牲はいるのか？ということだ。スバルも１５だ。地球なら学生でいる年頃だ。管理世界の治安を維持するための武力なら、成人になってからでも遅くはないだろう？」

リュウの言葉に、黙り続けるシグナムだが、しばらくしてシグナムは口を開いた。

「・・・個人の意見を言えば、管理局には少しだけ矛盾があるとは思う。管理するために人員を割くのはわかるが、何も子供まで能力があるから引きこむというのは何かおかしい。だがこの世界ではそ

れが当たり前だ。そしてそこに生まれて来た子たちならば、それを当たり前に思って志を持つだろう。そんな彼らを、私は信じたい」

「そうか・・・」

シグナムの言葉に、少しだけ笑みをこぼすリュウ

「む？私は何か変なことを言ったか？」

「いや、そういう考え方もあるのだなと、感心した。俺はどうも管理局が好きではなかったのだが・・・なるほど、そう言う考えも悪くない」

「シグナム～！」

すると、遠くから金髪を揺らすフェイトが走ってきた。

「どうした、テスタロッサ」

「いえ、遠くにいたのを見つけたので・・・って、リュウさん！お、おはようございます！」

急に顔を紅くするフェイト

「ああ、おはよう、ハラオウン隊長」

「お、お、おはようございまぅ・・・か、かんじゃった・・・」

「まったく、何をしているのだお前は」

と、ため息をつくシグナム

「あうぅ～・・・」

「そろそろ朝食の時間か・・・シグナム、ハラオウン隊長、行くとしようか」

「そうだな、ほら、テスタロッサ行くぞ！」

こうして、顔を真っ赤にするフェイトを引きずりシグナムが歩いていき、リュウも食堂へと歩いて行った。

（・・・・・信じる、か）

静かにリュウは心の中で呟いた

第１２話　謝罪のＮ／リュウとシグナム（後書き）

というわけで、シグナム登場でした

第１３話　Ｓとの死闘／蘇る加速の戦士（前書き）

久しぶりの更新です
先の話を考えてて全然浮かばなかったので放置してました。

とりあえず今回はファーストアラートです。色々はしょった部分もありますが、色々と個人的に頑張った回です

なんせ久しぶりの戦闘シーンでしたので

とりあえず仮面ライダーアクセルのＶシネマを見ました。アクセルとコマンダードーパントかっこよかったです

田中実さんには心より、ご冥福をお祈りいたします。
仮面ライダーアクセルブースター・・・出そうかな

第13話　Sとの死闘／蘇る加速の戦士

リュウが機動六課へ協力者として来て早くも数週間。未だリュウはこのメンツに慣れないでいた。なぜならこの部隊の大半が女性なのである。部隊長、隊長、副隊長全てが女性であり、ハッキリ言ってリュウには心苦しい場所でもある。唯一の癒しの場である自室でさえもスバルが自身が暇さえあればそこにいてしまう状態なのだ。つまり、リュウに休まる場所がないというのが事実なのである。

「・・・ハァ」

機動六課のロビーにて、コーヒーを飲むリュウ。基本的にだが、リュウは仕事がない。出撃時の支援だけであり、普段から局員が行うデスクワークなどは機密保持の関係上「嘱託魔導士」であるリュウはデスクワークに手を出すことができない。大半が暇なのである。つまりこのデスクワークで忙しい時間帯は唯一、リュウの安らぎの時なのである。廻りからの視線を気にしなければ・・・の話だが

『大丈夫ですか？マスター』

「別に問題はない・・・が、少し退屈だな」

『大学の課題はいかがですか？休学中ですし、課題があったはずです』

そう、リュウは大学生だ。当然休学するなら課題が出される。出されるのだが・・・

「昨日前期の分は終わってしまった・・・・・」

ここに来て数週間。真面目なリュウは課題を毎日こなしている。本当にリュウはやることがないのである。

「ところで・・・」

リュウはふと、テーブルに視線を戻した。

「リィン、何故君がここにいる？仕事はどうした」

「いえいえ～・・・リィンの分はきちんと終わったので休憩です！」

「別にここでしなくてもいいと思うのだが・・・」

とリュウが言う。基本静かにしているリュウといても大して楽しくないのだが・・・

「リィンがここにいたいからですぅ！」

「・・・そうか」

あまりにも子供な意見なのでやれやれとため息をつき、コーヒーをするリュウ。

「ところでリュウさん、リュウさんはスバルとどこまでいったですか？」

「ブッフウゥゥゥゥ！！！」

同じ仮面ライダーである左翔太郎のごとく、コーヒーを吹き出すリ

ュウ。はっきり言うと結構汚い。

「あれー？はやてちゃん曰く、兄弟であれは出来てるって言ってたです」

「・・・部隊長と君は俺のことをそんな目で見ていたのか」

口を拭いながら言うリュウ。正直洒落にならない。

「でもはやてちゃんが聞けって言ったですよ？」

「・・・・・・あの部隊長はそういうことをして楽しいのか？」

「まあ、はやてちゃんですから」

理由になってない。そう心の中で呟くリュウだった。するとそこへシグナムがやってきた。

「リュウ、少しいいだろうか？」

「ん？何か用か」

「暇を持て余しているようだったのでな。これからフォワードの訓練があるのだが・・・私と模擬戦をしないか？」

「模擬戦を？」

話の脈絡が見えない。なぜフォワードの訓練であるのに自分とシグナムが模擬戦をしなければならないのだろうかと

「なに、戦いの手本を見せるだけだ。身体もなまっているだろうしかまわんだろう？」

「・・・俺とシグナムの手合わせがフォワードの手本となるとは思えない。本音はなんだ？」

リュウの言葉はその通りである。まだまだ新人のフォワードに、熟練の騎士であるシグナムと、嘱託魔導士でありながら洗礼された腕を持つリュウ。正直な話そんな者同士の戦いを簡単に理解できることはないだろう。おそらく「ただ凄い」という感じになってしまう。技術的に学ぶのは難しいだろう。リュウの言葉に、シグナムはクスリと笑った。

「さすがはリュウだな・・・まあ、フォワードの手本というのは確かに私が付けたこじつけだ。本音としてリュウ・・・お前と戦ってみたい」

つまりリュウの実力が知りたい。ということである。ゲンヤの話ではシグナムは由緒正しき騎士ではあるのだが、戦いに置いて強者と戦うことを求める、いわゆる戦闘狂（バトルマニア）なのである。そう言う話を聞いている。リュウ自身もシグナムのことは管理局内部でも話題であることで聞いている。なにしろ自身が通う大学内にもファンクラブがあるくらいだ。相当な人気を持っているのだろう。ちなみにリュウの大学では、なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータなど、可愛さや美しさを持ちながらも優秀な管理局員ということで注目を集めている。

「・・・仕方がない。俺も暇だったところだ。いいだろう」

「さっそくだが、訓練場に行くぞ。フォワードが待っているのでな」

こうして、リュウとシグナムの戦いが幕を開ける。

訓練場

訓練場には一通りの訓練を終えたフォワードの姿があった。そして訓練場の真ん中にはリュウとシグナムの姿があった。

「では行こうか？」

「ああ」

シグナムが愛機「レヴァンティン」を、リュウが「アクセルハート」を構えた。

「「セットアップ！」」

互いの身体にバリアジャケットが纏い、デバイスがそれぞれ武器として形状を形成する。互いに持つのは剣だ。

「行くぞ、レヴァンティン！」

『はい』

「アクセル、準備はいいな」

『もちろん』

互いに構えをとる2人。そして離れた場所にいたなのはの声が響い

た。

『試合、開始！』

互いにその声で動く。アクセルとレヴァンティンがぶつかり合い、火花が飛ぶ。剣の達人とまで呼ばれているシグナムの攻撃をリュウは見切り、防ぐ。

「やるな、剣の心得もあるようだ」

「残念ながら心得はない。経験が物を言う！」

レヴァンティンをいなすと、リュウはそのまま蹴りを入れる。だがシグナムはそれを鞘で防ぎ、距離を開ける。リュウ・・・つまり仮面ライダーアクセルの基本戦闘スタイルはエンジンブレードを使った剣術だ。しかしエンジンブレードを使用しない場合なども存在し、肉弾戦をすることもある。リュウは前世、現世と両方でも格闘技に着手している。独自で編み出した剣術と格闘技を併用した戦い方によって、リュウはトリッキーな動きを見せる。

「レヴァンティン！」

『ロード、カートリッジ』

「っち！アクセル！」

『ロードカートリッジ！』

レヴァンティンに紫色の炎が灯った。それはすぐに刀身全体へと伝わり、全身にそれが灯った。一方のアクセルの刀身にも電撃が走る。

「紫電、一閃！」

「はあああああっ！」

『エレクトリックスラッシュ！』

互いの一撃がぶつかりあう。それによって大きな衝撃が生まれた。

「むっ！」

「ぐっ・・・！」

シグナムは空中へ、リュウは地面を滑りながら吹き飛ばされる。リュウはなんとか体制を立て直して構えをとる。シグナムも別の構えを取った。そしてこの時リュウは直感する。何か来る、と。

「レヴァンティン！」

『シュラゲンフォーム！』

シグナムの持っていた愛機「レヴァンティン」の突然崩れ始める。そしてそれらはワイヤーの様なものでそれぞれが繋がっている。つまり「連結刃」シグナムの持つレヴァンティンの別のフォーム、シュラゲンフォーム

「行くぞ、飛竜、一閃！」

連結刃が竜のように舞い、竜へ突進をしかける。それを避けるリュウだが、シグナムがそれをすぐに引いて再びそれをしかける。

「まずいな、アレを弾き飛ばす術がない・・・」

リュウの持ち得る技はエースラッシャーとダイナミックエース、アクセルグランツァーである。これらはあのように突進してくる敵に対しては有効ではない。仮面ライダーアクセルでもそれの対策はすこし難しい。仮面ライダーWであるならあるいは・・・である。そんな戦闘を、フォワードは見ている。なのはも同様であった。

「にぃに！頑張れ！」

スバルがエールを送る。戦いを見て学習することを忘れ夢中になる4人

「そういえばなのはさん、リュウさんには魔力変換資質があるんですか？」

ティアナがそんなことを聞く。シグナムの魔力変換資質は「炎熱」だ。だがリュウにそんなものはない。なのはも資料にはない情報に首を傾げる。隣にいたヴィータも同様だった。

「うーん・・・私もよくわからないんだ。リュウさん、資料には魔力変換資質はないって言っていたけど・・・ヴィータちゃん知っている？」

「いや、うちも知らねぇ・・・」

「えへへ、なのはさん！教えてあげましょうか！」

スバルが何故か妙に得意げだった。それも当然だ。この中でアクセ

ルハートについて知っているのはスバルが良く知っている。

「アクセルハートには、疑似的に魔力変換資質を変える装置『魔力変換装置』が備わってるんです！」

「魔力変換装置？」

「はい！最近内蔵され始めたもので、にぃにが開発に携わったものです。今のところ『電撃』『炎熱』を変換して戦うことができます」

「そ、そんなことができるの！？」

驚きである。ただの嘱託魔導士がそんなものを開発するなど、普通では考えられない。

「すごいんですね」

「びっくりです！」

ライトニングの二人が驚きの声を上げる。まあ、９歳の反応ならそうだろう。だがここでヴィータに一つの疑問が生まれる。

「それにしても、アイツそんなに凄いのになんで局員になんねーんだ？」

「あ、えっと・・・それは、にぃにに直接聞けばいいかと」

と、スバルは口ごもる。言えない。リュウが管理局を全く信用していないなど。それはつまりここにいる全員さえも信用していないということだ。そんなことを聞いて良い顔をするはずがない。スバル

はそれ以降は黙っていることにした。すると、ヴィータが戦う姿を見やる。

「お、リュウのやつ逃げるのやめたな」

飛竜一閃がまたしても外れ、それを引き抜くシグナム。再び飛竜一閃を放った。

「くらえっ！」

「アクセル！」

『マキシマムドライブ！ダイナミックエース』

「はあああああっ！」

Ａの形をした砲撃が飛んでいく。そしてそれがレヴァンティンに直撃した。それによって連結刃が宙を舞った。つまり相殺である。正直これをダイナミックスラッシャーで飛竜一閃にぶつけるなど、針に糸を通すのよりも難しい。

「ちぃっ！」

シグナムが連結刃を元に戻す。互いにカートリッジの消費が激しい。

「アクセル！」

『ウィングロード！』

紅い空への道が出来る。そこをリュウは駆け抜け、シグナムへ一気

に接近した。

「今だ！」

『ロードカートリッジ！エレクトリックスラッシュ！』

「はああっ！」

再びエレクトリックスラッシュが放たれる。だがタダでやられるようなシグナムではない。

「レヴァンティン！」

『ロードカートリッジ！』

「紫電、一閃！」

シグナムも同じく紫電一閃で対抗する。

「「はあああああああああっ！」」

互いの一撃がぶつかり合った。そして最終的に二人とも形成されていた廃ビルの上に倒れ込んだ。

「引き分け、か・・・」

「その、ようだな・・・」

『試合終了！そこまでです』

なのはの声が響きわたり、こうして二人の戦いは引き分けという形で幕を閉じた。

それからしばらくして、フォワード４人は新型のデバイスを受け取った。それは彼らが実戦へ向かうための証であり、戦士としての証でもある。そしてその直後、アラートが響きわたった。内容は貨物列車のレリックの回収。すでにガジェットが内部に侵入しているという情報も入っている。隊長２名とフォワード、そしてリュウの出撃である。フェイトはベルカ領にいるため途中からの出撃だ。６人はヘリへと乗り込む。

「にぃに、頑張ろうね！」

「スバル、無茶はするなよ？」

「うん！」

リュウの声に嬉しそうにするスバル。その様子を、なのははどこか複雑な表情で見ていた。しかし、なのはは気を取り直し目的地から一気にセットアップしながら降下していった。

「次！スターズ！」

パイロットヴァイス陸曹の声が響きわたった。

「スターズ３！スバル・ナカジマ！」

「スターズ４！ティアナ・ランスター！」

「「行きます！」」

二人は勢いよく降下していく。リュウは驚いて二人を見る。空戦魔導士でない二人は無理にこの高度から飛び下りる必要性はないのである。なんとか無事に着地しているところを見て、リュウは安堵のため息をついていた。そしてそんな片隅で、キャロが震えていた。

「・・・・・・」

「・・・ル・ルシエ」

「え、あ・・・リュウさん」

声をかけられ、リュウを見るキャロ。リュウは静かにキャロの頭を撫でた。

「別に無理をしなくていい・・・誰だって戦いは怖いはずだ」

「・・・・・・」

「それでも勇気があるのなら、前に進め。モンディアル、ル・ルシエを頼むぞ」

「は、はい！」

リュウの意外な言葉に、エリオは驚きながらも頷いた。そして・・・

「ライトニング3！エリオ・モンディアルと！」

「ライントング４！キャロ・ル・ルシエ！」

「「いきます！」」

二人も同じように降下していった。そしてリュウも、同じように出撃の準備をしていた。

「案外過保護なんだな、リュウ」

「・・・どうだかな」

ヴァイスの言葉に、リュウは短く笑った。

「ようし！チビども頼むぜ！」

「了解だ。リュウ・ナカジマ、出る！」

（・・・・・願わくば、これを使うことは避けたいな）

リュウの懐には、アクセルドライバーとAメモリがしまわれていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そこはどこかの地下。暗い暗いアジトの地下。そこに男はいた。

「ふ、ふふふ・・・」

男は上機嫌にそれを見る。それは機動六課の出撃の映像。次々にガ

ジェットを撃破するなのはたちの姿。

「機動六課、か・・・面白い人材がそろっている。そして何より・・・」

別の画像からは、リュウが出撃する姿が映っていた。

「彼女からの情報では確かに機動六課にいると言っていたが・・・まさか本当とはね」

男、次元犯罪者「ジェイル・スカリエッティ」はにやりと笑う。そして近くにいた女性に声をかけた。

「ウーノ」

「はい、ドクター」

「ガジェットの増援を頼むよ」

「は？」

女性は一瞬、キョトンとした顔になる。

「別にレリックはどうでも良い。だがこのままだと終わってしまいそうでね。至急転送魔法で車両の最後尾に２００機投入してくれ」

「に、２００機ですか！？それほど今回の部隊には何か？」

「ああ、見る限り彼女達は優秀だ。だが私が見たいのは彼女たちじゃないんだ・・・」

そう、スカリエッティの本来の目的はまったくの別にある。

「バリアジャケットの彼など見たくないんだ・・・」

自分が見たいのは自分の作品を退いた力。灼熱に燃えるような身体と、青い複眼。それを携える戦士

「私が見たいのは、彼のもう一つの姿なのだよ！」

スカリエッティは自らの欲望のため、高らかに声を上げていた。

戻ってリニア。最後尾の列に着地したリュウはガジェットの殲滅に掛った。ＡＭＦで制限されているものの、それがリュウにとってまったくの苦ではない。５機や６機の敵などたいしたことはないのだ。

「問題なさそうだな」

『そうですね・・・っ！マスター！転移魔法の発動を確認！どうやら増援の様です。囲まれています！』

周りにはガジェット？やガジェット？が大量に周囲を囲んでいた。

「っく！」

『まずいですマスター！ＡＭＦの濃度が高すぎて魔力の使用可能率が２０％を切りました！』

ＡＭＦはアンチ・マギリング・フィールドのこと。これは魔法を無

効にする効果を持っている。だがそれが完全に遮断するかと聞かれれば答えは否である。１００％カットするにはそれなりの濃度がいるのである。そして周囲を囲むガジェットの軍勢。塵も積もれば山となるとはよく言った物である。大量のガジェットのＡＭＦは強大なＡＭＦを形成していた。

『マスターまずいです、完全に囲まれています！私が意思を保つのも、限界が・・・！』

「ちっ・・・！」

ガジェットがビームの弾幕とアームを展開する。避けられる限り避けて行くリュウだが、装甲が薄いせいでダメージが大きくなっていく。当然ガジェットに非殺傷設定など着いているはずがない。ビームがリュウの頬をかすり、血が垂れる。

「アクセル、バリアジャケットを解除しろ」

『マ、マスター！？』

アクセルは驚く。こんな現状でバリアジャケットなどを解除すれば、死んでしまうのは当然だ。だがリュウの相棒はアクセル否、アクセルハートのみではない。もう一つ、前世から共に戦い続けた相棒がいた。

「解除だ、アクセル」

リュウはビームを避け、囲まれた空間から脱出。倉庫のコンテナの後ろに隠れるた。

『イエス、マスター』

それを理解したのか、アクセルは素直にバリアジャケットを解除していた。そしてリュウの腹部にはアクセルドライバーが装着された。そしてリュウの右手には赤いＵＳＢメモリ、否ガイアメモリがあった。それは『加速』というの名の地球の記憶を持つガイアメモリ。リュウ否、照井竜が、おのれ自身の呪われた運命を振り切るために生まれ変わるために持った力。リュウはビームがやんだのを確認し、ガジェット達の前に立った。そしてアクセルメモリのスイッチを押した。

『ＡＣＣＥＬ！』

「変・・・身！」

アクセルドライバーへメモリをセットするリュウ。そしてドライバーのクラッチ部分を捻る。

『ＡＣＣＥＬ！』

もう一度起動音が聞こえると、けたたましいエンジン音と共に、リュウの顔に模様が浮かび上がり、変身音と共に周りを何かが覆う。そしてそこにいるのはリュウであってリュウではない。それは人々を守り、街を守る存在。燃えるような紅い体と青い複眼をもった戦士。人はそれを・・・・・・仮面ライダーアクセルと呼んだ

「さあ！・・・・・・振り切るぜ」

第１３話　Ｓとの死闘／蘇る加速の戦士（後書き）

というわけで、仮面ライダーアクセル登場！
定期的にアクセル出さないと、何のための仮面ライダーのクロス小説かわからなくなるので（汗

次回もお楽しみに

第１４話　Ｈの本音／交錯する想い（前書き）

更新が遅いと言うのではやく更新してみました

まだ返してませんが、前回の感想で『正体をばらす』ということを異様に言われました。

・・・逆に聞きますが、皆さんこんな話の序盤で正体ばらして楽しいと思えますか？

私は思えないのでもっと先です（笑）

それではお楽しみください

第１４話　Ｈの本音／交錯する想い

「さあ！・・・・・・振り切るぜ」

仮面ライダーアクセルとなったリュウは、ガジェットの群れに踊りかかる。その拳が、蹴りが、何ｔにもなるその力をガジェットでは支えることができるはずもない。さらにそのままエンジンブレードを構え、ガジェットの群れへと斬りかかる。魔力を使用しないガイアメモリの力は魔法とは別の物。それによりガジェットはただのガラクタである。アクセルは身体を回転させながらも敵を斬り伏せる。そしてアクセルはそのままエンジンメモリを取り出した。

『ＥＮＧＩＮＥ！』

さらにトリガーを引く

『ＪＥＴ』

「はああっ！」

ジェットが飛び、次々とガジェット？型が爆発していく。攻撃をするガジェットも攻撃の発射までのロスがある。そこをアクセルはついて敵を切り裂いていく。

『ＥＬＥＣＴＲＩＣ！』

エンジンブレードに電撃が走る。斬撃と雷撃が重なった攻撃によって次々とショートを起こし、起動不能になっていくガジェット。機械であるガジェットが電撃を喰らえば当然起動することなどできな

くなり、崩れ落ちる。

「あとは・・・」

殆どのガジェットが再起不能となる中、相変わらずある程度の攻撃では倒れないガジェット?型。その数は約２０機ほどである。２００いたガジェットがもう?型しか残っていない。リュウはさらにトリガーを引いた。

『ＥＮＧＩＮＥ！ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！』

マキシマムドライブ発動と共に、その蒼い複眼が光る。

「ふっ！はあっ！だああっ！」

エースラッシャーを広範囲に浴び去るように自分の正面に一閃、後方に一撃、９０度の方向に一閃する。上から見れば『Ａ』と取れるその形。次々と爆発するガジェット?型だが、何機か逃亡を図る。どうやら戦闘以外にも情報収集として逃げるガジェットもいるようだ。だが、それを逃がす仮面ライダーアクセルではない。

「逃がさん」

エンジンブレードからエンジンメモリが排出される。本来ならエンジンメモリはエンジンブレード専用に組み込まれるメモリである。だが、別の使用方法もある。リュウはアクセルメモリを引き抜くとそのアクセルメモリが入っていた場所へエンジンメモリを挿入した。

『ＥＮＧＩＮＥ！ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！』

けたたましいエンジン音が鳴り響く。アクセルはそのままアクセルドライバをベルトから取り外してそれと共にバイクフォームへと変形し、その炎を纏った状態でガジェット?型へと突っ込んでいく。タックルによって数十機のガジェットは吹き飛ぶ。そして回転しながら元のフォームへと戻った。

「絶望がお前達の・・・・・・ゴールだ」

仮面ライダーアクセルが言うと、その場所に残っていたガジェット?型が爆散して吹き飛んだ。

『マスター、大丈夫ですか?』

「ああ、問題ない」

『これが仮面ライダーの力・・・ですか。私が元になったのがよく分かりました。しかしこれならば、私は必要なかったのでは?』

と、アクセルが装甲の下でいうが、変身を解くリュウはため息をついた。

「それがこの仮面ライダーの力は魔力がない。そうなれば管理局が動いてこれを押収しようとするだろう。そうなってこれが元になってドーパントが生まれたら洒落にならない」

もっとも、地球の記憶を要するガイアメモリ。だがこの世界の技術なら『疑似メモリ』とまた似たようなものが出来てしまいそうで怖い。そうなったらなったでまた面倒が起きそうなのでメモリを滅多に使うことがないのだ。

「それに、お前は俺の頼りになる相棒だ・・・そう言うことは、次から言うなよ？」

『はい、申し訳ありませんマスター』

（相棒、か・・・）

まるで仮面ライダーWの左翔太郎とフィリップのようだと、自分で言って苦笑していた。しばらくして、リニアは無事に止まってフォワードが無事にレリックを手に入れたとスバルから報告が来た。キャロとエリオが若干危なかったらしいが、リュウと通信が繋がらなくてそちらも不安だったらしい

「そうか・・・了解だ、すぐそちらへ向かう」

『うん、にぃに！』

こうして、リュウのファーストアラートは幕を閉じる。

スカリエッティのアジト

「素晴らしい！素晴らしすぎる！」

アジトで一人、スカリエッティは驚嘆していた。その力。以前は剣を使うだけと聞いていたが、その剣だけでも様々な機能が存在し、しかも本人はバイクのように変形するという力を兼ね備えている。という、今までこの世界では見たことも聞いたこともない、そんなものであった。

「ふふ、ふはははは！素晴らしいものだ！是非とも味方につけてこの力の秘密を知りたい！彼女にもしっかりと連絡しなくてはいけないね！」

全ては自分の欲望のため、自らを満たすために、スカリエッティは動き続ける。そんな光景をお茶を持ってきたウーノはまた病気が再発したと頭を抱えていた。

機動六課

隊舎に帰還すると、リュウはすぐに部隊長室に呼び出された。理由は当然ガジェットの破壊数である。なのはとフェイトが検証した時驚いた。それはガジェット２００体が・・・自分たちはともかく、絶対にフォワードが苦戦するはずのガジェット？型をＡランク魔導士であるリュウがたった一人で５０体以上を倒したということである。

『マスター、どう言いわけするつもりですか？』

「大丈夫だ、こうなることは一応想定しているしな」

そう言って部隊長室のドアを叩き、部隊長室へと足を踏み入れた。

「失礼する」

「待ってたで、ごくろうさまや」

部隊長室の中にははやての他にもリィンやなのは、フェイト、そしてシグナムやヴィータもいた。

「さて、自分が呼ばれた理由、わかっとる？」

「見当もつかないが？」

と、静かに返すリュウ。この事態を想定していたということはそれなりの対策を考えているということだ。

「・・・・・この、ガジェットの撃墜数や。先ほどの戦闘でおよそ２２０体、うち？型が５０体・・・どういうことか説明してや」

「どういうこと？ただ単にガジェットを倒しただけだ。それは何か機動六課に支障があるのか？」

「そうやない！２００体いたということは、相当のＡＭＦがあったはずや！どないしてこんなに倒した聞いてるねん！」

先ほどからこのありえない状況を見ることができなかったはやては正直驚きが頭の中をぐるぐると回っていた。それぞれ、隊長やフォワードをモニターできるはずのロングアーチなのだが、リュウの場所だけＡＭＦの充満によってその映像は切れていたのである。

「・・・・・部隊長、敵を倒す方法を何故気にする？」

敵を倒せばそれでいい。わざわざ敵を倒す方法を聞く理由がリュウにはあまり理解できない。対策がある以上想定はしていたが、改めるとますます分からなかった。

「そ、それは・・・」

「必要がないならこれで失礼する」

「まて、リュウ」

そこで待ったをかける人物がいた。シグナムだ

「ガジェット２００体の撃破・・・・・この任務の時間帯で私でもそれは不可能だ。だが私との戦いは引き分けだった。あの時の戦い、手加減をしていたのか？」

「・・・手加減などしない。相手に失礼だからな」

「なら、何故・・・」

「言うつもりもないし必要もない。俺は局員ではない。局員でない以上、貴方達が局員の権限を利用してきても俺には適用されないからな」

そう、本来これでリュウが管理局員であった場合、この部隊ではやては部隊長の位置にある。その位置はどうあっても覆せることはない。この場合でなら『命令』という形でリュウに全てを話させることができる。だが、リュウはあくまでも『協力者』だ。協力者である以上、それは任意だ。同じ目的のためにただ行動しているためだけであり、命令ではなく要請としてリュウは動いている。場合によってはこれ以上の追求から逃れるために機動六課を抜けることも可能なのだ。

「・・・・・・」

「話はそれだけか？これで失礼する」

「最後に、一つ・・・」

途中で黙らざるを得なかったはやてが、リュウに待ったをかける。

「なんだろうか？」

「リュウさんは・・・うちらのことを信用してはりますか？」

しばらくの沈黙が部隊長室を包み込んだ。そして静寂を破ったのは、リュウの一言

「さあな・・・」

こうして、リュウは部隊長室を後にした。

リュウが抜けた後の部隊長室で、長い沈黙があった。リュウの態度を受ければ当然だ。そしてフェイトが少し心配しながらはやてを見た。

「ねえ、はやて？どうしてリュウさんにあんな風に聞いたの？確かにリュウさんの態度も悪いとは思うし、２００体のガジェットを倒したことにも疑問がある。でも、そこまで追求するべきなのかな？」

「・・・・・わかっとる、わかってはいるんや」

はやては静かに口を開いた。手を強く握っているためか、手は白くなっている。

「確かに、リュウ君の言うことはもっともや・・・・・協力者であ

る以上制約があって一緒に動いとる。でも、うちらは仲間や・・・仲間なら、もっと腹を割って話せるはずや」

機動六課という部隊の中でただ一人、心を開かないリュウ。はやてはずっと気になっていた。

「いつも一人でおって、スバルとはいても他の人といたところをうちは見たことがない。そんなリュウ君は・・・きっとどこかで無茶してるはずや」

「無茶って・・・？」

はやての言葉に、なのはが首を傾げる。

「さっきの戦いの２００体のガジェット・・・ハッキリ言うけど、あの車両の中では計算上２０％までデバイスの稼働率が落ちるはずや。そうなった場合、なのはちゃんやフェイトちゃんでもスバルと通信が繋がるまでの間では全部倒せることは不可能に近い。つまり、そのＡＭＦ下でリュウ君は『それを超えるなにか』をしたということや」

つまりはやての言うことはこうだ。魔導士なら不可能に近いこの状況で、リュウはそれを打破できるなんらかの行動を起こした。しかし魔導士を超える何かといえば質量兵器か、別の何かだ。だがリュウが質量兵器を持っていた覚えはない。第一、斬り刻まれている以上銃ではない。ならリュウのデバイスであるアクセルハートでなにかをしたという方が考えとしては合理的なのだ。つまり・・・

「リュウ君は、もしかしたら・・・身体に負荷がかかるようなことをしたとちゃうやろうか？」

「そうかもしれないけど・・・」

と、フェイトが言葉に詰まる。いつもクールで無口のリュウ。しかしどこか無理をしかねない、なのはと似たような空気をフェイトは感じ取っていた。

「そないなら・・・辛いことがあるなら・・・うちらにも打ち明けて欲しいねん！ウチらは、仲間や・・・だから、もっと分かりあいたいんよ。うちは自分の部隊で一人孤独でなんていて欲しくないねん」

はたから聞けば、子供の様な内容かもしれない。しかし、これは彼女自身の過去の経験からでもあった。孤独であることは、どれだけ辛いのか。理解者がいても、それだけではどれだけ寂しいのか。

「はやて・・・」

「だからお願いや、リュウ君に信頼してもらえるように、頑張りたいんよ！協力・・・してくれる？」

はやての言葉に、一同は頷いていた。

「うん、もちろんだよはやてちゃん」

「私もリュウさんにも、信頼して欲しいし、中まであって欲しい」

「ま、はやてが言うならな」

「尽力を尽くします、主はやて」

「ですぅ！」

なのは、フェイト、ヴィータ、シグナム、リィンははやての言葉に笑顔で頷いていた。

機動六課隊舎　裏

機動六課の裏は、森がある。というのも庭でもあるのだ。この場所でリュウはいつも身体を動かしている。

『それにしてもマスター、よろしかったのですか？』

「何がだ？」

『部隊長達のことです。彼女達は本気で貴方に信頼して欲しいとも思っていたようでしたが・・・』

「・・・・・・確かに、その好意は嬉しい」

と、リュウは呟く。

『ならばなぜ』

「・・・管理局で疑惑がある以上、油断はできない。それが例え味方からでもな」

かつて二度、自分と同じ警察の人間がドーパントだったことがあった。一度目は思い人を殺した人物たちへの復讐のため。二度目は自

らの盲信した正義のため。それらのために仲間が傷ついたことがある。今回も協力しているのはスバルを守るためであり、同時に母のクイントのいた部隊の襲撃事件の真相を追うというものもあった。

『マスターは意地っ張りですね』

「そうか？」

『もっと仲間を信頼して頼るべきです。前世ではいなかったのですか？』

「いたさ・・・信頼できる仲間が、３人も」

鳴海探偵事務所と呼ばれた探偵事務所の探偵二人と所長。３人は信頼できる人物たちだった。だが本当に信頼するまでは時間がかかった。己自身の復讐に駆られ、全てを一人でこなそうとしていたからだ。そんな自分を受け止め、正しい道へ導いてくれた彼らにリュウは感謝もしている。この場所でも、果たしてそんな信頼できる人物ができるかどうか、リュウ自身にも分からない。

「さて、いつものメニューをこなすとするか」

『イエス、マスター・・・マスター、あれを』

と、アクセルが点滅する。先にいたのはティアナだった。今回は出動任務だったので、彼女達はオフシフトとなっているはずだったのだが・・・

「シューット！」

ターゲットを作り、ひたすらそれを撃ち落とすティアナ。汗の量からして、相当な時間をやっているようだ。そもそも、オフシフトで無断に訓練するなど許されることだろうか？

（・・・高町なのははこれを知っているのか？）

答えは否、知らないだろう。リュウはやれやれとため息をついてティアナに近づいた。

「ティアナ」

「え？あ・・・リュ、リュウさん！？」

驚くティアナ。この時間帯はフォワード以外デスクワークの時間だ。仕事がないリュウがここにいるのに驚いているのだろう。

「こんなところで訓練していたのか？」

「あの、えっと・・・これは、その・・・」

「別にそう構えるな。俺は局員ではないからな・・・高町一等空尉に報告などしない」

リュウが言うと、ティアナはホッとため息をついていた。この様子からして、なのははこのティアナの訓練を知らないようだ。

「任務の後だというのに訓練とは・・・感心しないが？」

「・・・私、凡人ですから。少しでも多く訓練しないといけないんです」

「自分を強くするためには休養も必要だ。身体を無理に動かしたところでそれは自身を傷つけるだけだ」

これは理論ではなくリュウ自身の経験談でもある。復讐に駆られ何度も何度も、アクセルメモリが使えるようになるまで身体を鍛え続けた。トライアルメモリを得る時も何度無茶をしたかわからない。

「でも・・・」

「とにかく、出撃した後魔力を消費したのに、これだけの特訓は自身の命にもかかわる。今日はこれくらいにして置け」

「・・・・・・・・はい」

ティアナはしぶしぶ、その持っていたクロスミラージュを降ろした。そして近くにあったベンチへ二人で座った。

「ティアナは・・・前にも言っていたが、執務官を目指しているんだったな」

「はい。それが兄の目標でしたから・・・」

ティアナが兄の死と原因を知って夢を引き継いだことを、リュウは知っている。そしてティアナの兄、ティーダ・ランスターを罵倒した管理局員の話も聞いていた。だが無理に夢をかなえようとするが故に、ティアナは自身を犠牲にし過ぎていた。

「この機動六課にいてから・・・どうも無理をし過ぎている傾向がある。自覚はあるか？」

「・・・はい、フォワードの４人の中では、私は一番下ですから」
訓練校主席のスバル、魔力変換を持つエリオ、稀少技能を持つキャロ。ティアナも一応主席ではあるのだが、本人はスバルの方が上であると考えているのだ。

「・・・・・・」

「私、一番魔力が低いですし、強さも技術もない・・・リュウさんみたいに、あんな格闘技もできない・・・私、才能ないんですよ。だからひたすら努力しないと、みんなについてはいけない。ここに来て・・・改めて実感しています」

ティアナの言葉に、呆れた表情のリュウ。リュウは優しくティアナの頭を撫でた。

「リュ、リュウさん!?」

「ティアナ、君は少し勘違いをしているようだ」

「か、勘違い？」

「君は決して、弱くはないし、才能もある・・・少なくとも俺はそう思う」

リュウの言葉に対して驚いた表情になるティアナ。

「でも・・・私は・・・」

「では聞くが・・・この部隊のフォワードで、君のように幻術を使える人員はいるか？」

「・・・それは、いないです」

「フォワードの中で、君が指揮をしなければ誰が指揮をする？経験が多く、戦いの中でも一番視野が広いのは誰だ？」

「・・・・・・・・・」

とうとう黙ってしまうティアナ。リュウの言うことは全て正しかった。

「才能がないというが、俺の格闘技であれ、高町一等空尉のシューティングの技術であれ、それらは全て年月を重ねた結果によって生み出されたものだ。初めからそうだったわけじゃない」

再びティアナの頭を撫でるリュウ。ティアナの顔は真っ赤だった。

「今を焦るなティアナ・・・兄の夢をバカにした連中を見かえすのをやめろとは言わない。だがそれは一歩逸れれば復讐にもなりえる。自身を傷つけ続け、力が使えなくなればそれでこそ本末転倒だ。じっくりと・・・力を付けるといい」

「リュウさん・・・」

「俺も協力しよう。だから、今日は休め」

リュウの優しい言葉に、ティアナは笑顔になった。

「ありがとうございます！」

曇っていたティアナの顔は先ほどとは打って変わって明るくなったのがよくわかった。そしてティアナはシャワーを浴びに女子寮へと戻って行った。

『マスター、何故あんなことを？』

「・・・似ているんだ。ティアナが昔の俺にな」

かつて『W』のメモリを持つ男を倒すためにどれだけ自分が復讐に駆られたかわからない。何も信じることなく、ひたすら復讐のためだけに自身を犠牲にしてきた。今回ティアナを見ていて、そんな昔の自分が被ってしまったのだ。

「だから、俺と同じ道を絶対に辿っては欲しくない」

『そうだったのですか・・・・・・マスター、機動六課の受付からメールが届きました』

「メール？」

『来客者がマスターを呼んでいるようです』

「わかった、行こう」

こうして、リュウは隊舎のロビーへと歩いて行った。

機動六課のロビー

「すまない、俺を呼んでいるというのは？」

「あちらの方です」

受付の人間に自分を訪ねて来た人物を尋ねる。受付の人間は先にいる人間を指差した。その人間を見て、リュウは驚愕した。

「っ・・・！」

「こんにちは、リュウ・ナカジマ嘱託魔導士」

ピンク色のロングヘアーに、抜群のスタイルを持った女性。通り過ぎる数少ない男性局員がその女性をチラチラと見ながら通り過ぎて行く。

「お前は・・・ドゥーエ」

「お久しぶりですわ。お元気でしたか？」

戦闘機人、ドゥーエの姿がそこにはあった。

第１４話　Ｈの本音／交錯する想い（後書き）

ＨＡＨＡＨＡＨＡ！ドゥーエ様登場！
ドゥーエはなのはのキャラでは５本の指に入るほど大好きです。隙あらば出す！それがクオリティ（笑）

今回ははやての本音でした。問い詰めることに対しての彼女の本意が見え隠れするというものでした。
ぶっちゃけアンチっぽくはある感じですが、完全にアンチになるという風にならないように頑張ります

こんな駄文ですが、頑張って行くのでよろしくお願いします
でわでわ

第１５話　誘惑のＤ／恋する乙女達（前書き）

更新遅れて申し訳ないです。２ヶ月放置してました（汗

遊戯王の方が思いのほか進み、こっちのほうはこっちの方でネタ切れが起きてしまいました。

本当に申し訳ありません

ということで、お待ちだった方々、お待たせしました

最新話をお送りいたします

第１５話　誘惑のＤ／恋する乙女達

「・・・ドゥーエ、か」

リュウは静かにドゥーエを見た。昔見たときと同じく、ピンク色の髪を揺らす彼女の服は、前とは違って地上本部の服だ。

「お久しぶりですわ・・・リュウ」

にこやかに手を差し出すドゥーエだが、リュウは何かあるのではないかと渋る。だがここで握手しないのも周りから見れば不自然である。リュウは同じように手を差し出し、握手する。するとドゥーエはリュウを引っ張り腕にすり寄った。

「お、おい・・・っ！」

「うふふ、本当に久しぶりですわ・・・随分とたくましくなって」

まるで長い間会っていなかった恋人のように嬉しそうな表情でドゥーエはリュウの腕を掴む。そして耳元で囁く

「（外へ、行きましょう？）」

リュウは無言のまま静かに外へと出た。その様子を一番見てはいけない人間が見ていた。

隊舎外

「それで、何の用だ」

「うふふ、良いじゃない。久しぶりに会ったのだから」

しかめっ面のリュウと、それに反して嬉しそうな顔をしているドゥーエ

「敵と会って喜ぶ人間がどこにいる」

「私は敵と思ってないからいいんじゃない？」

ベンチで話す二人。片方が不機嫌、片方が笑顔。なかなかシュールな光景である。

「本当に何をしに来た？まさか本当に会いに来ただけと言うわけではないだろう」

「んもう、相変わらず固い男・・・・・・ドクターが動き出したわ」

「ジェイル・スカリエッティ・・・広域次元犯罪者に指定される一級危険人物か」

「あら、早いわね・・・ドクターとしか言わなかったのに」

「犯罪者リストの中で最も生体医学に関して長けており、あらゆる分野でも殺傷などではなく違法研究で指名手配は奴くらいだ」

リュウは以前から母クイントの部隊を襲撃した組織を追った。そして戦闘機人というワードを手に入れた。リュウはそれに関する資料を集めた。その中で犯罪者リストと、その戦闘機人のリストで合致

したのがジェイル・スカリエッティだ。
「流石と言うところかしら？あの紅い戦士になるだけはあるのね」
「・・・それを探るのが目的か？」
「そう構えないで・・・？まだ何も言ってないじゃない」
微笑むドゥーエに戸惑うリュウ。言いながらドゥーエは何かのリストを出した。
「・・・今から3週間後に行われるホテルアグスタのオークションに、ガジェットの軍勢が襲撃をかける」
「！？」
突然の言葉にリュウは立ち上がる。ドゥーエはそれを気にせずそれを続ける
「目的はドクターの興味のあるものらしいけど・・・これ、見たことない？」
「これは・・・そんなまさか！」
それは少々大きめのＵＳＢメモリだった。そして真ん中にはＩと描かれている。これが示す答えは、ただ一つ
「ガイアメモリ・・・だと！？」
「ふぅん・・・これ、ガイアメモリっていうのね。ただの古代遺失

物と言うわけでもないんでしょう？貴方の持っていたあのＡと描かれたＵＳＢメモリと関係があるもの」

「・・・・・・・・・」

「別に無理に答えなくていいわ。私も無理に知る必要はないんだし」

「どういう意味だ？」

ここにドゥーエがいる以上、ドゥーエはスカリエッティの指示でここに来たはずだ。だがガイアメモリはスカリエッティが興味があるという以上、その内容を知りたいはずである。

「私は今回本当に地上本部もドクターの意思も関係なく、貴方の所に来たの」

「・・・・・何故だ？」

「貴方に魅了された・・・と言えばいいかしら？」

言いながらドゥーエはリュウの腕に絡まり、顔を近づける。

「・・・その程度のことで、俺は動じない」

「つれない人ね・・・でもそれがいいわ・・・」

言いながらドゥーエは身体を預け、目を閉じる。

「私は貴方に温かさを感じているの」

「暖かさ・・・？」

「戦闘機人だからこそと言うべきかしら？何故か私は貴方に惹かれるの」

ドゥーエは一層強くリュウの腕を握る。

「ねえ・・・貴方は何故ここまで暖かいのかしら？」

「知らん・・・」

「そう・・・ならしばらくこうさせて」

ドゥーエはリュウに身をゆだね、目を閉じる。まるで今ある時間を幸福に思うように。彼女は目をつぶる。まるで父親を求める娘のように。リュウは思う。彼女もまたスバルたちと同じだと。

（・・・・・生きていく上で、暖かさを求めるか）

彼女は敵であり、母に大けがを負わせた憎むべき敵のはずである。だが、今はそんな様子はない。まるで子供なのだ。そんなことを考えてるときであった。

「あ、ちょ・・・なのはちゃん押さんといて・・・！」

「私じゃなくてフェイトちゃんが・・・」

『わぁっ！？』

草むらからドサドサと倒れ込む人影があった。そこにいたのは機動

六課の隊長、副隊長、フォワードメンバーであった。それを見てリュウはため息をつき、頭を抱える。ドゥーエは不快そうに顔をゆがめた。

「仕事はどうしたんだ・・・貴方達は」

子供たちフォワードは今日午後オフであるものの、大人達は仕事がしっかりと入っていた。

「機動六課の方々は覗きが趣味なのですか？」

ドゥーエが不快そうに顔を向ける。相当この空気を邪魔されたのに腹が立っているようである。

「し、失礼しました～」

そう言ってそそくさと一同が立ち去って行く。

「ふぅーん・・・あの子ね、タイプゼロセカンド」

「スバルのことか？」

スバルを見るドゥーエは自分の体と立ち去って行くスバルを見る。

「ふふ、私の方がスタイルはいいわね」

「・・・それは見比べることなのか？」

「貴方と身体を重ね合わせるなら、比べてもいいでしょう？」

いたずらっぽい笑みを浮かべるドゥーエ。リュウややれやれとため息をついた。

「お前は本当に外見と中身が一致していないな・・・よくそれで潜入任務などするものだ」

「あら、馬鹿にしないでくれる？これでもいくつもの潜入任務をこなした身よ？」

「・・・そうか、まあいい。とりあえず帰れ」

「いいじゃない、もっと貴方と触れ合いたいわ」

名残惜しそうにドゥーエがリュウの手を握る。

「俺とお前は敵同士だ・・・慣れ合うつもりはない」

「なら貴方がこちら側に来れば話は済むんじゃないの？」

「ここには守らなければいけない奴がいる・・・ここにいるのは当然だ」

「そう・・・なら」

言いながらリュウの手を引き、唇を重ねた

「――――っ！？」

「ふふっ・・・私の初めて（・・・）よ？受け取っておいて」

そう言って離れるドゥーエの顔はどこか赤みを帯びていた。

「またねリュウ・・・今度また会いましょう？」

そう言ってドゥーエは機動六課から立ち去って行った。

「うふふ・・・」

帰りの自動四輪の中、ドゥーエは今日の出来事を嬉しそうに思い返していた。キスが初めてではない。今まで何人もたぶらかしてきた。だが今まではテープを張るなどして純潔を守り通してきた。だが今回、初めてその唇を男にゆだねたのだ。彼女にとってもそれは彼女なりの勇気であった。

「さて・・・ドクターへの報告はと・・・」

打ち出されるテキスト。ここには一言こう書かれていた。

――シンテンナシ、ジョウホウエラレズ

By？

これがスカリエッティへ向けて発信された内容であった。ドゥーエは本気でリュウを好きになっていた。誰かを好きになる。それは今までの自分ではありえないことであった。リュウの顔を思い出せば

胸が熱くなる。今日触れ合っていても、彼に触れることで喜びを感じていた。それが例え生みの親を裏切り、姉妹を裏切ることになろうとも、そんなことは関係ない。自分はただリュウといたいのである

「リュウ・・・貴方は必ず私のものに・・・いえ、私がリュウのものになってもいいわ・・・」

言いながら考え込むドゥーエ。機動六課には小娘ながらも人気が高い3人、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやてに、リュウの妹と言うことでスバルことタイプゼロセカンドがいる。他にも美少女とまで行くか話は別で女性局員も機動六課は多かった。そんな中でドゥーエが考え抜いた一つの答えがあった。

「そうか・・・こちら側に来ないのであれば・・・ふふ、ふふふふふ・・・」

そのドゥーエの笑みは自動四輪の感情のないＡＩでさえ怯えるほどの黒い笑みだった。

戻って機動六課

「にぃに！誰なのアレ！？にぃにと慣れ慣れしくしちゃってさ！」

現在リュウは何故か食堂でスバルに問い詰められていた。その場にはティアナもいる。離れた席では隊長陣もそわそわとしている。

「・・・前に知りあった、局員だ」

「知りあっただけじゃないでしょ！？あの態度絶対にぃにに何かし

てるでしょ！」

今日の妹は何故か怖い・・・そう感じるリュウ。まあ、自分のことを好きでいてくれるというのは嬉しいことなのだが、こうなるとリュウは若干怖いとも思っている。

「さあ、にぃに！あの人との関係は！？あの人は誰！？」

「えっとだな・・・」

「嘘は許さないよにぃに・・・」

言いながらリボルバーナックルを構えるスバル。そしてティアナもさりげなく後ろ手にクロスミラージュを持っている。

「彼女は大学時代の同期だ。彼女はデスクワークの腕を買われ、地上本部で働いている」

「学校の同期？嘘！あんなに密着してたのに！？」

「彼女はああやって俺の反応を楽しもうとしてるだけだ・・・俺は何とも思ってない」

なんでこんなウソをつかねばならないのかとため息をつきながら、スバルの頭を優しく撫でた。

「彼女とは何もないさ・・・安心しろスバル」

「あうぅ・・・にぃにはずるいよ・・・」

顔を紅くし、椅子に座るスバル。どうやら落ちついたようである。その頭を撫でられているのを羨ましそうに見るティアナ。リュウはそれに気づき、優しくティアナの頭も撫でる。驚きはしたものの、やはりティアナも嬉しそうにしていた。

「そろそろ食事にしようか・・・お詫びに好きなだけ食べるといい」

「うん！にぃに！」

「まったく、現金なんだからスバルは・・・」

食事に喜ぶスバルと、それに呆れるティアナ。この時、リュウは遠くで隊長3人がそれを羨ましそうにしていたのを見なかったことにしておいた。

とある場所

「ふふふふ・・・」

そこはミッドチルダの首都、クラナガンから遠く離れた場所。そこに横たわるのは巨大な輸送用のトラックである。不気味に笑うのは白い体をした、人とは似付かない化け物だった。

「この力・・・素晴らしい」

やがて身体が粒子となり、その白い体から人が出てくる。男は初老の男で、シルクハットと杖を持っていた。

「次は・・・ああ、そうか、ホテルアグスタのオークションにコレ

（・・）と同じものが出るんだったな」

男はにやにやとカタログを見つめる。書かれているのは『Ｉ』と書かれたガイアメモリ。男はその場を後にしようとするが、数人の魔導士が男を取り囲んだ。

「待て貴様！これはお前がやったのか！？」

目の前の惨状を見て叫ぶ局員。だが男は動じない

「そうですよ・・・私がやりました」

「なら話は早い！殺人容疑でお前を逮捕する！」

局員の言葉にクツクツと笑う男

「できますかねぇ？貴方達ごときに・・・」

『Ｗｅａｔｈｅｒ！』

一つのガイアメモリを取り出し起動させる。そのメモリの名は『Ｗｅａｔｈｅｒ』かつて一人の男の人生を狂わせたメモリであった。そして次の瞬間、ウェザードーパントの一撃によって局員たちは吹き飛ばされた。

翌日

機動六課の朝。今日は緊急で朝会が開かれることとなった。それと

いうのも、この機動六課の評判を聞き、転属してきた局員がいるので紹介するのだという。リュウもその場に参列し、その局員を待つ。そして部隊長と共に現れた人物を見て、リュウ、スバル、ティアナ、隊長メンバーは己が目を疑った。

「きょ、今日より転属なさる局員の方です。自己紹介を・・・」

「ドゥーエ・ニヒリティです。地上本部より転属となりました。よろしくお願いします」

丁寧な一礼と共に、拍手が起きる。その妖艶な姿に数少ない男性局員たちは心を奪われつつあり、スバルはスバルで開いた口が塞がらない。

「よろしくおねがいいたします」

リュウの頭を悩ませることがまた一つ増えるのであった

第１５話　誘惑のＤ／恋する乙女達（後書き）

というわけでドゥーエがまさかの機動六課転属
次回はドラマＣＤの地球編です

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3772q/

魔法少女リリカルなのはStrikerS〜加速の記憶〜

2011年8月7日05時04分発行